地域資料叢書 28

子・孫世代が語り継ぐ移民・引き揚げ・戦後

－第５回満洲の歴史を語り継ぐ集い記録集－

2024 年 3 月

満洲の歴史を語り継ぐ高知の会編

刊行に寄せて

「満洲の歴史を語り継ぐ高知の会」（以下「語り継ぐ会」）は、高知県内の旧満洲（中国東北部）帰国者、大学教員、マスコミ関係者らが、体験者が次々と逝去し歴史の継承が難しくなる現状を危惧して、2018 年 9 月に結成されました。以前高知にあった「満州会」などの体験者の懇談会という形でなく、次の世代に歴史を語り継ぐ組織です。高知県から満洲へ渡った人の実数は正確に分かりませんが、「満洲開拓団」「満蒙開拓青少年義勇軍」で渡満した人数は 1 万人を超え、人数では全国 10 位ながら、人口比では全国 3 位の 1.4%となっています。戦前の高知県民にとって満洲は、多くの県民が移民した非常に身近な地域だったことが分かります。

語り継ぐ会では活動として 2019 年から 2022 年にかけて、研究者や体験者を招いて 4 回のシンポジウム（うち 1 回は台風の影響で中止）を開催し、記録集を発行してきました。

今回発行する記録集『子・孫世代が語り継ぐ移民・引き揚げ・戦後』は、2023 年 11 月 18 日に高知市立自由民権記念館で、「子・孫世代が語り継ぐ満洲の歴史」をテーマに開催したシンポジウム「第 5 回満洲の歴史語り継ぐ集い」の内容を基にしたものです。また、語り継ぐ会の子・孫世代がテープ起こし、編集した満洲帰国者 3 人の証言も収録しています。

まず、加藤聖文さんの講演「満洲引揚とは何だったのか」の講演録、山崎哲さんの講話「戦争はどのように人の人生を変えるのか」の要約、講話をまとめた岡田としさんの「戦禍に散った命を忘れないで伝えて行こう」を収録しました。加えて、シンポジウム「子・孫世代が語り継ぐ満洲の歴史」の討議内容、会場で寄せられたシンポジウムの感想も掲載しています。

続いて、満洲帰国者の証言では、満鉄での仕事や奉天・大連での生活などさまざまな引き揚げの記憶が語られています。特に、片岡盛政さんの通化事件のお話は貴重な証言です。満洲での暮らしや食べ物、満洲の人たちとの交流など、体験者しか分からない満洲や時代の空気感が伝わる貴重な記録となっています。

記録集は、満洲からの引き揚げの背景を知り、残留孤児や葛根廟事件の被害者遺族らがどのような戦後を過ごしたかをリアルに学ぶことができるテキストとして仕上がっています。特にシンポジウムの記録は、語り継ぎの実践についての子・孫世代の思いが記されており、戦争体験や移民の歴史の継承を考える上で、重要なテーマを数多く提起しています。今後、様々な形でご活用いただけましたら幸いです。

満洲の歴史を語り継ぐ高知の会・会長
大野正夫

目次

刊行に寄せて（大野正夫）..... 1

第１部　子・孫世代が語り継ぐ満洲の歴史

【講演録】満洲引揚とは何だったのか～歴史を語り継ぐ前提として～（加藤聖文）..... 3

【レジュメ】満洲引揚とは何だったのか～歴史を語り継ぐ前提として～（加藤聖文）... 17

【講話要約】戦争はどのように人の人生を変えるのか

－中国残留邦人山﨑幹子の経験から－（山崎哲）..... 22

【講話】戦禍に散った命を忘れないで伝えて行こう

～会えなかった伯父、従兄妹たちを訪ねて～（岡田とし）..... 23

【シンポジウム記録】子・孫世代が語り継ぐ満洲の歴史（楠瀬慶太）..... 35

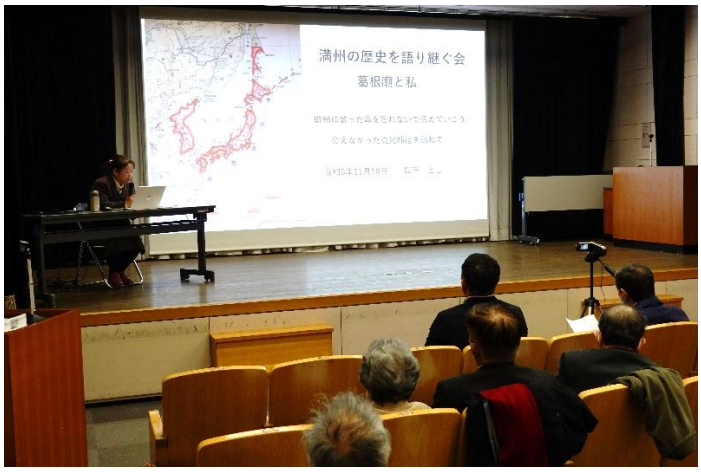
集い・シンポジウムの感想（小野由美子）..... 53

第２部　満洲の歴史を語り継ぐ

【聞き取り記録】「満鉄での仕事と引き揚げの記憶（渡辺和雄）」（岡田とし）..... 55

【聞き取り記録】「奉天・大連の生活と引き揚げの記憶(岡本敏之)」（小野由美子）.... 69

【聞き取り記録】「満洲高校生技術生訓練所・通化事件・昭和 28 年の引き揚げの記憶（片岡盛政）」（織田千代子）..... 82



第５回の語り継ぐ集い。約 80 人が参加した

第５回の語り継ぐ集いのチラシ

【講演録】満洲引揚とは何だったのか～歴史を語り継ぐ前提として～

加藤 聖文

▼満洲国崩壊後の残留邦人の引き揚げ

先ほど御紹介を預かりました通り、2019 年なんですね、もうずいぶん昔にここ（語り継ぐ集い）でもお話をしました。その時はですね、今から私の講演の後に少しお話しさせていただきますいわゆる語り部育成事業がちょうどスタートして間もない頃でしたので、その紹介も兼ねてお話をしました。 今日はそういったこととまた別に、 満洲の引き揚げということをこれから語り継いでいくための基本的な知識を皆さんに再確認してみようというところでお話をしていきます。この話はわりとあちこちでお話しているので、繰り返しになるかもしれませんが、 高知では初めてですのでお聞きください。

満洲からの引き揚げということで、皆さんいろいろと体験を聞かれて、いろんなかわいそうな話、悲惨な話というものをよく聞かれると思いますが、実際に問題はどういう形でこれが進んだのかな、どうしてこういうことが起こったのか、この前提、バックグラウンドというものをやっぱり抑えておかないと。個別的に一人一人の体験というものだけを寄せ集めても、結局全体が見えてこないということになりますので、今日は少し全体のお話を皆さんにしていきたいと思っています。

▼敗戦時に邦人 150 万人

現在ですね。現在というのは（レジュメでは）2017 年と書いていますが、実質的に今海外に在留している日本人は、コロナもあって 1 回減っちゃったというのはありまして、だいたい 135 から 140 万人くらいです。これがアジア地域でいうと今も 40 万人くらいですか。この数というのが国際化、国際化と言われていますので、結構多いのかなというふうに思うんですけれども、実際に戦前の日本で、海外にいた人というのがここ（レジュメ）に表しているように 300 万人以上いました。大阪市の人口が 270 万人ですからそれよりも多いということです。地域別に最も多いのは皆さんご承知の通り中国東北部である満洲というふうになります。だいたいここが 127 万人で、それ以外の地域とかいろんなことを混ぜ合わせてきますと、大体敗戦時に満洲には 150 万人ぐらいがいたというふうに思ってください。こういった中で 150 から 155 万人くらいの人たちが、戦争が終わって帰ってくる、実質的には強制送還ですね、ということになります。

▼戦争と難民はセット

ただ、すぐに帰すというわけにはいかにきませんので、当然難民化するわけです。ちょうど今、ウクライナとかパレスチナでも戦争が起こっていますが、だいたい戦争が起こると難民というのがセットになってきます。兵隊だけが戦っているわけではなくて、それに民間人が巻き込まれて、そこに住んでいた人たちがどこかに強制的に追い出されていく。正常難民だと逃げていくというのもありますし、逆に軍隊が入ってくる時に「出てけ」というので追い出されると。そういったような民間人の犠牲というか、単に弾で当たって死んでしまうと

いうのではなくて、むしろ住んでいる場所を追い払われていくという過程で難民化するというところが一つのポイントになるわけです。

▼食糧難から栄養失調、疾病に

難民化をして難民となっちゃうと、住むところを追われてどこかキャンプというか、とりあえず転々としていくわけですが。当然そうなると、だいたい自分が働いていた職業も失いますから、食べ物とかをどうするかという問題がまず出てきます。食料といっても、物を買うような余裕がなくなりますので、何がしかどこかで手に入れなくちゃいけないと。畑から盗んでとかですね、どこかから取ってきてとかいうこともあるし、誰かから恵んでもらうと。ただ、戦争中に恵んでくれるような人ってそんなにいませんので、何がしかの形ででも何かして生きていかないといけないと。そうすると大概はですね、食べられる、うまく食料にありつける人もいれば、ありつけない人も増えてくると。ありつけないとだいたい、お腹空いてしょうがないから栄養失調になってくるわけですね。栄養失調になると体力が弱ってくると。そうなると大概流行ってくるのが今度は病気ということになります。しかも集団で移動してますので、一人が病気を発症すると、周りにバーッと一気に移っていくということになります。大概そうなるとですね、栄養失調か疾病、いわゆる病気でなくなっていくというケースが増えていくということです。

これは今世界のちょうどパレスチナで起こっている現象も同じですね。弾に当たったり、爆弾に当たって死んじゃうというよりも、むしろ飢えとか病気で亡くなっていく。そっちの数が圧倒的に多くなります。満洲でもですね、実際に数としては、正確な実数はよく分かりません。だいたい 25 万人ぐらいと言われていますが、そのうちのほぼ大半、8 割ぐらいがほとんどそういった病気とか栄養失調といったもので命を失った人になります。こういった犠牲者の数という面でも満洲は非常に多かったわけです。広島の原爆の場合は、原爆が落ちてそれで亡くなる、沖縄線の場合は基本的にはむしろ戦場で巻き込まれて、集団自決だとか、そういったようなケースで亡くなるというのが多いんですが、満洲の場合はむしろ先ほど言ったように弾に当たって亡くなるというよりも、むしろ戦争が終わった後、難民化する中で亡くなっていくという人が圧倒的に多いというところが、他の地域と大分違うということです。

▼死の感じ方、記録の問題

逆に言うと、しかもそれが長期間に渡るということです。短い期間で戦争がドンパチあって、それでピタッと終わって、その間で亡くなっちゃったというケースではなくて、戦争が実は終わって、それからダラダラと日本に帰ってくるまでの間が、ほぼほぼ 1 年ぐらいかかりますので、その 1 年間の間でバタバタと亡くなっていくということです。一気にある月ある日にドカッと亡くなるというよりも ポツポツと亡くなっていて、気がついたらこんなに増えてたという感じです。そうすると意外と悲劇の度合いというものの感じ方が変わってきます。原爆みたいにバーンと落ちて多くの人が亡くなっているというのは、惨状とか、そういったものを見せられると、「こんなに亡くなったんだ」「可哀そうだな」とか思うんです

が、満洲みたいに徐々に亡くなっていくというのはパッと見だとよくわからないわけです。バタバタと、見る限り死体が転がっているとかいう話ではないので、そうすると視覚的にも、感覚としても多くの人が亡くなっているというのはいまいちよくわからない。ピンとこないという問題もあります。

また同時に、日本ではなく満洲という場所でありますので、その状況を記録しているものがほとんどないわけです。当然写真なんかもありません。写真もなければ当然映像なんてもちろんありません。それ以外でも紙の記録とか、そういったもの自体も非常に少ないわけですから、物的証拠というものが無くなっているという。モノ自体、後世の我々が理解するための記録と言われるものがほとんどない。だから死んだとか、多くの人が倒れましたとか、倒れてましたと言っても、口でしか聞いたことがないので、それを見たことない人は、なんかいまいち想像ができないということになってしまいます。

▼記録と語り継ぎの問題

これはこれからの語り継いでいくという問題ともちょっと絡んでいくんです。やっぱりビジュアル的にワッというのが見えるものだと、話を聞いてても確認しながら話を聞けるので、「なるほど、こうやって多くの人が亡くなっているんだ」とか「こんな悲惨な死に方しちゃったんだ」とか、そういうことが分かるんですけど。何もないので「満洲でこれだけ多くの人が亡くなりました」とか、「収容所でこんなに子どもたちがパタパタ倒れて穴掘って埋めました」とか、「穴もカチコチに凍ってたんで、穴も掘れずにそのまま校庭の上に積んでいましたよ」と言っても、それは写真とか何もないから、聞いた人、見たことのない人にとってはいまいち想像ができない。

しかも、想像ができないというのは、世代が、どんどん時代というか時間が長くなれば長くなるほど、よく分からなくなってきます。とりわけ近年で言いますと、やっぱり戦争が縁遠くなっちゃって、戦争をイメージするということもなかなか難しくなっております。たまたまウクライナとかですね。こういったことが起こって、最近はテレビでいっぱいそういう状況が放映されるようになったので、なんとなく戦場のイメージというのが、改めて想起されるというか。イメージとして若い人も分かりやすくなってきましたが、それでもやっぱりあの当時の戦争の状況、満洲の状況というのを口で説明するというのはなかなか難しくなっております。

特に若い人には尚更なんですね。そういう難しさというものがございますが、とはいっても何も喋らないわけにいかないので、どういう形であれ語り継いでいかなくちゃいけないと。いつかは誰かが想像してくれて、それを感じてくれるだろうと、という淡い期待というか、少しでも前向きな気持ちでやっていかないと、こういう歴史を語り継ぐということはなかなかできないと思います。とにかくそういう中で満洲にいた人たちが、ある種取り残されて、それが 1 年ぐらいしてやっとこそ帰ってくると。その間に多くの人が亡くなりました。帰ってきた人たちが大体 100 万人ぐらいの人たちが、なんとか帰ってきましたというところで、お話は終わりということになります。

▼歴史の大きな流れ

帰ってきた人たちがいろんな体験を社会で話して、こんな大変な目にあったと言ったり、あと自分で本を書いたりということで、戦後になってある種体験者の語り、記憶が語り継がれていくというような流れになっていきます。ただ、それはあくまでも個人的な体験でありまして、こういった大きな話というのは、個々人の力というのは歴史の前で無力であります 。私たち人間がいくら一人一人抗っても、大きな流れがあって、その中に飲み込まれて混乱されて気がついたら日本に帰ってきたということなんです。 じゃあなんで日本に帰ってきたのかな、なんで帰れたのかなと思うと、それは誰も分からないわけです。体験者だから何でも知っているというのは、実は間違いがありまして。体験した人は自分の目の前に起こったことだけは知っているけれども、むしろその周りとか前提とかですね、なんでこうなっちゃったのかなとかいうのは全然分からないわけです。

まさに歴史というのはそういうものでありまして、私たちが今生きている時代も同じです。私たちが今生きている時代というのは 自分の目の範囲では分かるけれども、もっと分からない部分というのはむしろ大きいわけです。近づけば近づくほど見える範囲もあるけれども、視野が狭くなって全体が分からなくなるというのがあります。だから体験した人が全て何でも知っているというわけではないということです。我々はそれを聞いた上で、今度はその体験者の人たちの背後にある、要するに背景というものは一体何なのかなということを考えていく必要があります。そういう中で大事になってくるのは歴史とか、学問にもなるわけです。

この満洲の引き揚げに関しては、実態としては引揚者の人たちには何の主体性もありませんので。満洲にいて難民になって困った困ったと言っている間に、何かいつの間にやら船がやってきて、船に乗っけて日本に帰ってきましたと、やれやれということなんだけど、どうして船がやってくるのかなと、なんで急にあの時引揚船に乗るぞという連絡が来たのかなとか、それはよく分からないわけです。

▼引き揚げとアメリカの役割

細かく言うと色々とややこしくなりますので、単純化していきますと、実際はアメリカが大きな役割を果たしたということですね。全然日本とは関係なくてアメリカであります。アメリカがどうしてそういったことをやったのかなというのは、これは全く我々とは生活だと全く関係ない事件であります。別に人道的に難民となった日本人がかわいそうだと思ったアメリカ人がじゃあ船でも仕立てて帰してあげようと思ったかというとそうでもないし、こう世界の中で今動いていること、これパルスチナもみんな同じです。別にかわいそうだから何とかしてあげようなんていうことで、国が動いたり、世界が動くということは実はございません。そこが人間の世界の残酷なところでもあります。要は全然違う要素の中で国というものは実は動いていくわけです。このアメリカが動いたというのは、結局アメリカにとって一番得なのは何なのか、要するにアメリカという国家にとって一番プラスになることは何なのかなということを考えた結果、満洲からの引き揚げが行われたということです。なん

か風が吹けば桶屋が儲かるみたいな話なんです。我々としてはよく分からないけれども、なぜかぐるっと回ってそういうことが起こる。

▼中国の安定化

単純化すれば、アメリカにとって中国との関係が大事でありました。当時、中国との関係を構築、要するに新しく良い関係にしていくためにはどうしたらいいか。そして中国では当時、満洲にいた人たちなんかは、引揚者の方はよく分かるかと思いますが、内戦状態にありました。今と違ってですね、国民党と共産党が対立をしていて、事実上国内で内戦状態になっていた。内戦状態になっているということは、アメリカから見るとやっぱりあんまりよろしくないわけです。できれば中国は一つのどういう形であれ、統一した、きちんとした政府になってほしいと。そしてアメリカと中国が、いわゆる経済関係にしても、相手の国がぐちゃぐちゃになっていたらビジネスもできないし、また余計なことに足を取られかねないわけです。ですからなるべく安定していてほしいと、中国がです。そういった意図があって、中国をどうやって安定化させようかというふうにアメリカが考えていた。その中で内戦を停止させて、国民党と共産党をとにかく仲直りにさせようとか、そういったようないろんなことを考えていくわけです。

▼不都合な 100 万人の軍隊

その中で要因として問題になってくるのが、実は満洲にいた日本人だったんです。これは別に満洲にいた日本人だけではなくて、中国大陸、満洲以外の大陸全島に日本人がいっぱいいました。当然その中のメインは、実は民間人ではなく軍隊なんですね。日本軍は日中戦争で中国と戦ってきました。その中で、中国と戦ったということはアメリカと戦うということになりますが、実際に最後、戦争が負けるまでに、日本の軍隊って一番多くいたところはどこなのかなというと、別に太平洋で戦っていたりフィリピンで戦っている日本軍が一番多かったわけではなくて、実は中国大陸にずっといたのが一番多かったんですね。これは土地が広いということもあるし、長い間戦っていたという経緯もあります。結局そこにいた日本軍が実は 100 万人以上いたんですね。軍隊でいうと 100 万人の兵力って相当な軍隊になります。こういった軍隊がそのまま実は戦争が終わった時に、中国に残っちゃったわけですね。

しかももう一つ問題になってくるのは、例えば私たちはアメリカとの戦争で、よく言われるようなどこかに島が玉砕しましたとか、フィリピンみたいなところではジャングルに逃げ込んじゃって、大岡昇平の小説みたいな話ですね。ほとんど幽霊みたいになってジャングルをウロウロしているとか、みんな腹ペコになっちゃって飢え死にしちゃったとかですね。そういうような日本の軍隊って最後はこんな人ばかりだったのかなというふうにイメージしがちですけど、実はその人たちってごくごく一部でありまして。中国大陸にいた日本軍っていうのは全然玉砕も何もしてないし、戦争に負けてもいない軍隊だったんですね。ですからフル装備のまま戦争が終わっちゃったという軍隊なんです。

そうしますとこれが厄介なのは、そういった軍隊がそのままに居座っちゃうと、じゃあどうなるかというとですね。そこに国民党と共産党の内戦が絡んできますと、国民党と共産党

にとってですね。実はそのフル装備の日本軍が持っている装備ですね、武器とかいうのも欲しい。さらには傭兵、要するにお金で雇ってちょっとうちの方に協力してくれないかということで持ちかけることも可能になります。現実にそういう形で国民党に協力した日本軍もいます。実際そういったことになっちゃうと、内戦がますます深刻化していっちゃうわけです。アメリカは実はそういったことを恐れていたということです。

要は中国大陸にいる日本軍がいつまでもいるというのアメリカにとっては不都合ということで、とっとと帰したいということです。とっとと帰そうというところから実は計画が始まって、日本の軍人を、兵隊を、とにかく日本に早く帰しちゃえということとプラスしてそこに実は民間人も引っ付いちゃってたわけです。で、民間人も合わせてじゃあもう帰しちゃえということで送還が始まる。それが中国全域に広がって、結局満洲も同じになるわけです。満州にいた日本人も早く帰しちゃえということで、アメリカ軍が主導して日本人を送還したということです。要するに、別段でアメリカ人が、日本人がかわいそうだと言って始めたわけではなくて、ずっといると不都合だからということです。

▼国がない、政府がない

満洲にいた人々も引き揚げが可能になったのもまさにそういったアメリカの思惑の中で帰ることができたというかですね、たまたま帰ることになっちゃったということで、別段アメリカ人が特別な行為をしてやってくれたわけでもない。また一部でよく言われているように日本人がお願いしたからなったというわけでもありません。これは戦争というものの冷酷な現実というのがありまして、敗戦国民というのは、あくまでも敗戦国民であって、戦勝国民ではない。そこにはですね、人間の優劣というのが明確に規定されます。しかも日本という国家は、我々はなんとなく戦争が負けましたって、そのまま日本という国が続いているかのように思いがちですが、実は戦争に負けて主権を失う、占領されるということは、その国家としては消滅していることになります。

実態としては、要するに世界の中ではそのある時期日本という国は存在しなかったということなんです。国家主権を失って国がない、政府がないということは、そこにいる元国民たちは誰も守ってくれないということです。守ってくれる術が誰もない、そういった状況にあって、満洲にいた人たちも結局誰も守ってくれないという人たちだったんですね。国にお願いすればなんとかなるということではなくて、要するに国そのものが存在しないんです。ですから、占領されているということはまさにそういうこと。あの時期、要はサンフランシスコで講話条約が結ばれて、戦争状態が終わってGHQの占領が終わりまで。実はあの時代は日本という国は存在していなくて、アメリカに占領されている地域だったということです。講話条約が結ばれてようやく日本は独立したわけです。で、やっとこそ日本という国になった。もう一回戻ったということであって、それまでの間はずっと占領されて国家主権を失った国がない状態で、我々日本人というものも実は日本国民と言われるような存在としては世界的には存在しなかったということです。

我々はなんとなく占領政策自体も過酷でもなかったので、なんかあんまりピンとこなく

て、日本はずっと続いているかのように思っているけれども、現実はそうでないということですね。当然満洲にいた人たちっていうのは、逆に言うと、煮ても煮ても焼いても焦がれても何も文句は言えないということです。非常に冷たい言い方をすると、そういう状態であった。そういった中で、アメリカが結局この人たちがいると邪魔だからというので、送り帰したというような現状。実態はそうだったということです。

▼五族協和と満洲国

ちなみに我々はどうしても満洲から引き揚げっていう話をすると、満洲に日本人が、この100万人以上の人たちが、なんとか苦労しながら日本に帰ってきましたということで、話が終わってしまいますが、実は満洲と言われる地域は、満洲国という国がありました。これは日本が実質的に作り上げた、いわゆる傀儡国家と言われるものです。要するに日本が作り上げた国家が満洲国。その満洲国は、そこにいた人たちは聞いたことがあるかと思いますが、五族協和、もしくは民族協和というのが国家のスローガンとして掲げられていました。五族という５つの民族が手を取り合って仲良くして国を作り上げていきましょうというスローガンだったんです。

5つというのは、本当はもう少し多いんですけど、主要な民族として5つ挙げられました。1つはまず、自治体として支配者である日本人です。もう1つは漢族。漢族というのは、これは我々が中国人と呼ぶ人たちのほとんどであります。もう1つは満洲族ですね。元々満洲というところは満洲族がいたところだから。そしてもう一つはモンゴル族、もう一つは朝鮮族、朝鮮人です。この5つの民族がいたという建前にあるわけです。そのうちの漢族、満族というのは、実態としてほとんど漢族化してますから、我々から見るともうほとんど見分けがつかない。区別がつかないくらいになっています。しかも、元々住んでいる人たちですね。そしてもう一つモンゴル族というのは、モンゴル人は今の中国でいう内モンゴル自治区に住んでいる人たちで、これもまた元々住んでいる人たちであります。

▼朝鮮族の引き揚げ

そして、もう一つ朝鮮族ですね。朝鮮族というのは、ここが実はいろいろと複雑な歴史がございます。元々満洲に住んでいた人たちもいますが、その元々といっても、じゃあいつからなのかというと、実は19世紀というちょうど日本にとっては明治になってからの話です。その頃に朝鮮半島から国境を越えて流入してきた人たちであります。がかなり多い。そして、その後に日本が植民地に朝鮮半島しちゃいますから、そこでいわゆる、そこから逃れていって満洲に渡っていった人たちも当然、その後の20世紀になって渡っていく人たちもいます。もう一つは満洲国ができてから、要するにこれは日本人と同じパターンです。 日本の企業とか満洲国政府なんかに働くために行った人たちがいます。朝鮮半島から。

あとは有名なのが朴正熙ですね、あれは満洲国軍の将軍です。彼は要するに朝鮮半島出身で朝鮮の学校を出た後に満洲国の士官学校に入って、そこで満洲国軍の将軍になったという経緯です。そういうような人たちがいて、要するに朝鮮人という人たちは、元々いた人たちと後から来た人たちが結構混在しておりました。実はこの人たちも多くは引き揚げるん

です。我々は日本人のことばかりで、そっちの話になっちゃうんですけど、朝鮮の人たちってどうやって引き揚げたのかなというと、要は陸続きだから歩いて帰ったのかなと、隣だからちょっと国境を渡ればすぐ朝鮮だからそのまま歩いて帰ったのかなと思いきや。なかなかそうではなくて、朝鮮半島はご承知の通り日本が負けた後にアメリカとソ連に分断されて、38 度線でブロックされて一応戦が引かれちゃっているわけです。

▼200 万人の朝鮮人

実態としては自由に行き来というほどではないけど、一応まだ行き来はできる状態でしたが、満洲国とかに働きに来ていた人たちの多くは実は南朝鮮、つまり今の韓国出身者が多かったんです。そうなると、朝鮮半島南北、北から南ずっと南下しないといけないとか。そういったなかなか大変な思いをしないと帰れないということもありました。同時に、これは日本人と先ほどの国家主権の話と同じで、国がないんですね、朝鮮の場合はまだ。結局あれは日本の植民地支配から解放されたけれども、独立国としては成立、まだ生まれていない。アメリカとソ連によって軍事占領されている状態で、要するに自分たちの国がなかったということは、自分たちを守ってくれる政府も存在しないということなんです。となると一体全体、どうやって帰ればいいのかというと、一番曖昧な立場に置かれていきます。

結局、結論から言いますと、日本人が引き揚げるよりも実は朝鮮人の引き揚げが遅れます。遅れるのと同時に要するに誰もかまってくれないんです。しかも日本人の場合は、アメリカの政策で中国にいると厄介だからというので追っかえされちゃいますけど、朝鮮人の場合は別にアメリカの政策の中には全然頭の中に入ってこないわけです。いると厄介だからという話は全然ないので、そもそも帰さなくちゃというモチベーションもあらわれてこないわけです。アメリカが手を挙げて、じゃあ我々が韓国に帰してあげようというふうに思う動機もない。ということは結局どの国も誰も手を挙げないという状況になって、結果的にどうなったかというとほとんど自力で帰っていっちゃったんです。自分たちで。

それは船を、密港船を仕立てて帰るか、あとは陸続きで歩いて帰るか、でも歩いて帰るけど途中は北朝鮮通らないといけないんで、共産主義大好きという人だったらともかく大嫌いという人にとってそこは命がけになります。そのぐらい当時満洲にいた朝鮮人は日本人より多くて 200 万人いましたが、そのうちの半分が自力で脱出していくんです。そういった実は歴史がございます。そういったことも実は我々の歴史、満洲から引き揚げというのは日本人だけの話ではなくて、そこに残っていた民族と他の民族がどうなっちゃったのかなということもちょっと想像してみるということがこれからの時代では必要だと思います。

▼モンゴルの分断

朝鮮人もそうですし先ほどちょっと触れましたモンゴル人も実は結構大変な面がありました。モンゴルの場合はほとんど 3 つに分断されていますので、今のモンゴルというところと中国のモンゴルと、その間の行き来というのがだんだん遮断されていって、モンゴル人の人たちも何となく自分の所属がどこなのかというのが翻弄されていくと。この歴史というのがあることは少し興味を持ってどうだったのかというふうに思われた方がいらっしゃっ

たら、これから持ち帰ってあの当時のモンゴルの人ってどうだったのかなとか、朝鮮人どうだったのかなということをそれぞれでお調べになっていただくといいかなと思います。

▼引揚者の生活再建・戦後開拓

さて、そういう形でとにかく満洲から日本人が兎にも角にも帰ってきた中で、我々日本人はその後どういうことになっていくかというと、やっぱり引揚者の人たちにとっては生活再建というのが大変になります。元々何も財産なくなっちゃった、そういったところから、もう一から出発しないといけないので、自分で再建生活して仕事に就かないといけないとか。開拓団の人の場合は土地がないですから。開拓団の特徴というのはほとんど自分の財産をまず全部売っ払って向こうに行きます。土地とかはなくても、家とかは自分の私有財産でしたから。家も全部、屋敷も全部、要するに売却して出てくるわけです。だから二度と帰ってこないというつもりで行きましたので、それがまた帰ってきちゃうとなると、これはまた大問題になるわけです。

要するに送り出した村としても、帰ってきちゃったということで、じゃあ元々売っ払った土地なんかを返そうかと言っても、やっぱり自分が一回買っちゃったものをもう一回返すっていうのは嫌だとか、当然揉めるわけです。揉める中で結果的に出てくるのが、戦後開拓というもので、要するに政府が新しい土地を割り当てて、こっちに入植しなさいと、こっちで開拓しなさいというのを斡旋していくことになるわけです。

ただし、この戦後開拓というのも、当時の計画で言っても、満洲から帰ってきた開拓民を入植させる土地なんていうのが、そもそもそんなにいっぱいあったら元々満洲移民なんて必要ないわけで。要するに日本に土地がないから満洲移民させたわけです。その人が帰ってきて、じゃあどこを割り当てようかと言っても、割り当てる場所がないわけです。結果的にどこでもどこかを割り当てないといけないというところから出てきたのが、結局ほとんど今まで耕作もできないような土地になるわけです。

標高が高すぎて寒くって作物が育たないとか、あとは土壌が酸性で、要するにあまりにも酸が強すぎちゃって、植物もそこで種を植えてもなかなか芽も出ないとか、掘ったら石ころばっかりしか出てこないとか、そういうような土地しか結局は斡旋できないわけです。結局そういった難しいところに入植させれば、当然これでうまくいくというケースがまずありませんから、大概は失敗するわけです。

▼生き残った戦後開拓地

失敗はしますが、今でも、たまたま戦後の我々の生活習慣が大きく洋風化して変わっていく中に、うまく適応できたところはそのまま生き残っていきます。適応できたケースというのは何かというと、いわゆる牧畜です。牛乳を作ったり、あまり戦前ガバガバみんな乳製品を取らなかったのが、日本人が戦後になって取るようになります。そうすると乳牛の需要が増えてくるわけですね。そういう中で牛の肉を食べるというのも結構増えてくりますから。いわゆる畜産業とか乳業とかに転換して、そこでうまく適応できる。何とかやっていけるというケースも出てきます。

例えば有名なのは富士山林のふもとにあるところは、戦後開拓地でほとんどの人があんなところでやっても畑も何も育たないというところに入植するんです。そこで始めるのが大体乳業です。それが何とか軌道に乗って、今でも残っている農家というのがございます。有名なのは上九一色村でオウム真理教事件が起こったところなんです。その後にオウム真理教事件が起こっちゃいますけど、あそこでオウム真理教と戦った農家の人たちは実は満洲からの引揚者なんです。

そういう事情もありますし、その他には後は高原野菜を作っているところ。東京近郊、長野県あたりで標高が高くて作物育たなくて大変だという中に、たまたまそこで高原野菜を作る、キャベツとかそういったものを作ったら、たまたま都市で需要が増えてくるので、そこがうまく売れるようになって何とかなっていくという。あの清里といわれる野辺山とかあのあたりの別荘地。バブルの時にペンション開発で結構えらいことになる。それが弾けた後にえらいことになりますが、そういった地域なんかも戦後開拓地で、多くは満洲からの引揚者です。

▼引揚者のアピールと言説

そういう人たちもいるにはいるんですが、そうではない人たちもいっぱいいますので、そういった人たちの中では、いわゆる在外財産、保障をもう一回。満洲とかに残してきた財産を取り戻せとか。そういう運動をするグループたちもいました。そういう中から一つポイントになってくるのは、これからの我々が満洲の歴史を語り継いでいく時の重要な意味でもありますが。要するに自分たちは満洲にいたということを社会で知らせてみようと、その歴史というものをみんなに知ってもらおうと。あまりにも戦後の日本人はそういったことに関心があるので、やたらとですね、満洲の歴史というものを語り継いでいく的なものがある時期に実は流行りました。流行ったんですけど、それが結局は我々が満洲に残してきた財産をもう一回取り戻してほしい。要するに政府が保証してくれとかいう運動をやっている時に 国民世論を味方につけるために、我々の歴史はこんなに苦労したんだというようなアピールの仕方をしていくんです。結果的にどうなっていくかというと、そうするとどうしても満洲にいた時代はすごい良かったとかいう話になっちゃうんです。

あとは満洲というところは、当時からも言われていましたが、やっぱり植民地であると。植民地である以上はやっぱり日本人が優越的な地域であって、現地の人たちを支配してたんだという言説。そういう見方も当然あるわけです。それに対して逆に、要するに引揚者とか、満洲にいた人は いわゆるそういう植民地支配の先兵であるという社会的な批判というのがあったんです。そうなると、むしろ引揚者の人たちはそうじゃないんだということを逆に主張するようになっちゃうんです。そうするとですね、いやあれは植民地支配の先兵だと、ひどいことやったんだというような世論と、それに対して、いやそうではないという引揚者側の意見というのが、両極端な話になっていっちゃうんです。

両方極端の中で満洲から引き揚げてきた人たちが強調し始めるのは、むしろ良かったという話になっちゃうわけです。満洲の植民地支配というのはそんなに悪くはなかったんだ

という、その人たちにすごく恩恵を与えたんだというのが、逆に言うとそれが強調されすぎる傾向になっていっちゃうんです。それはやはり、そういった中で、特に満洲から引き揚げてきた人の中でやっぱり一部の人たちはより強硬にそういったことをワンワン言うようになっていくというか。特に時代が日本の戦後の直後は、さすがにあんまりそういったことを言えなかったのが、大体昭和 40 年代ぐらいになってくると、なんとなく日本は悪くなかった的なことを言うのがわりとそういうのが許容されるような時代になってきて、それに乗っかっていくんです。

これは別に満洲の支配だけじゃなくて、あの戦争自体も正しかったんだとか、いわゆる大東亜戦争の肯定論みたいな話です。大東亜戦争はアジアの解放のために戦ったんだというのは、ちょっと前までは絶対そんなこと言っちゃったら、社会がツマハジキになっていたような話が、なんとなくそれが許されるようにちょっと緩くなってくる時期があるんです。大体社会ってそういう振幅の繰り返しがあります。ちょうどそれは日本の高度経済成長と大体結びついていきます。ある種ですね、日本が自信を持ってきた。要するに敗戦でやっぱり俺たちはダメなんだというのから、なんか経済成長になってきて、やっぱり日本人ってすごいとか、やっぱりどこかに日本人すごいっていうのが出てくると、大体そういうなんか俺たちは悪くなかった的なのが一緒になって出てくるんです。やっぱりそういった言説の中から、満洲というところでやっていたというものも、悪くなかったんだというような話に、だんだんそっちの意見が多くなってきます。

▼理想国家としての満洲

結果的に満洲からの引揚者というものが、実は多くの人たちが 1960 年代、昭和 40 年代以降に、かなり言説的には良かった良かったという話をするようになってきました。とりわけ、そういったことをかなり主張していた人が、レジュメの写真の中に出てくる星野直樹（満洲国総務長官）とか、ある時期に非常に活躍していた人で。ただ共通するのは、これ関東軍の将校たちと同じなんですけど、戦後は実はあまりパッとしない人たちなんです。戦前にある種人生のピークを迎えていて、戦後になったら時代の中に取り残されちゃった人たち。その人たちが過去を振り返って過去が良かったということを結構盛んに言うようになってきます。

反対に戦後も活躍している人というのは、実はあまり言わないんです。それは彼らにとっては今が最高だからです。有名なのが岸信介とかです。実のところあまり満洲時代のことが良かった良かったって、そんなに言われてないんです。別に彼にとっては戦後の方が人生のピークになってきますので、過去のああいった時代もあったけど、今の自分の方がいいっていう話ですから、あまり振り返る余裕もないというか、別にそういう気持ちもないと。あると現役で活躍している人に限ると、案外過去の話っていうものに対しては冷たいんです。これは自民党内でも同じです。案外過去の問題に関しては、この時期は実は案外冷たいんです。むしろ極端なことを言っている人たちは何となく過去の人たちが中心になってきます。

言説がそういう形で、満洲は良かったというような話が結構広がっていくんですが、ただ

問題となってくるのは開拓団の問題でありまして、開拓団という人たちにとっては、実のところそんなことよりもちょっと実態的なものが必要だというか。要するに国としても、私有財産、在外財産の保証の問題にしても、引揚者の全体としては財産を残してきたから、それを要するに政府が補填しろという運動がある時期あったのに、これには開拓団の人たちはほとんど関わってきません。なぜかというと、そもそも開拓団の人は向こうにも財産がなかったということなんです。実は日本で処分して向こうに渡ったんだけど、向こうに割り当てられたいわゆる開拓地ですね。これは満拓から借りている土地であります。それは何年か経てば自分のものになるって話になってましたが、ほとんどの人は自分のものになる前に敗戦になっちゃったので、いわゆる借地なんですね。ですから実態としては財産と言われるものが全然なかった。

財産を保証しろと言われても、街中に住んでいる人は自分の家屋敷があって、預金通帳も郵便局に納めていたけど、それが全部なくなっちゃったから、やっぱりそれを返せ、というのは分からんでもないけれども。開拓団から見れば何もないんだから、なんで都市の街中の人たちと一緒になって、そんなことをしなくちゃいけないのということがあるわけです。この高知も特に有名なことがあります。そういう運動の中で、高知の中ではむしろそんなところと袂を分かっちゃうんです。要するにそういう普通の引揚者とはやってられないということで。

▼兵士に限られる遺骨収集

その開拓団の人たちが目指したのは何だったのかというと、実は遺骨収集なんです。要するにお金とか何とかの保証じゃなくて、自分の家族とか仲間たちが満洲という地に埋もれたままだと。埋もれたままでそのまま野晒しになっている状態を何とかしてくれと。要するにせめて遺骨収集ぐらいさせてよというのが彼らの運動、むしろ向かっていく方向がそちらになっていきます。戦没者の遺骨収集事業というのは今でもやっています。国がですね。この対象者というのは実は兵士に限られます。なぜ兵士なのかというと、これは公務災害という形になります。どんな人でも一回召集かかって軍隊に入ると、一応扱いとしては公務員扱いになるわけですね。そして戦地で亡くなったとなると、いわゆる公務災害ということになって、要するにそういった人たちの死亡を確認して遺骨を持ち帰ってくるというのは国の責務であるというふうに法律上は位置づけられるわけです。

国民世論としても要するに公務災害なんだから、お国のために頑張って亡くなったんだから、それは遺骨ぐらい持って帰ってもそれは当然だろうと。持ち帰るべきだという世論のほうが当時、今はちょっとだいぶあれになりましたけど、当時は強かった。ですから国も率先して予算をつけて、遺骨収集事業と今でもやっているわけですね。

▼民間人は対象外

なんですけど、その中で民間人というのは実は外されております。民間人の死亡者、戦地での民間人の死亡、亡くなった人の遺骨というのは国の収集事業の対象外になります。たまたま兵隊と言って遺骨収集をしている間に民間人の人が出てきたというんだったら、それ

はこれを分けて放っていくわけにはいかないから持ってくるということがありますが、民間人だけを率先して集めてくるということはあり得ません。今でもやっていない。ですからそういったケースになると満洲が一番極端なケースになるわけですね。満州で亡くなった、例えば開拓団の集団自決した後で埋葬された場所というものは、これはあくまで民間人のいわゆる亡くなった人が埋められている場所でありますので、そこをほじくり出して遺骨を集めてくるということは当然対象外になります。他の地域もみんな同じ。

それともう一個は複雑な日中関係がありまして、中国政府はそれは当然認めないということがあります。なぜ認めないのかというと、要するに亡くなっちゃった人というのは、これはまた要するに政治の世界でありますが、最初に言いました通り、いわゆる植民地支配のせいであるということになります。いわゆる民間人であろうが兵隊であろうが、いわゆる中国民衆を苦しめた植民地支配の一端を担っていた。そういった人たちは、死んだ人はみんないい人になっちゃいますけど、死生観の問題がありますね。日本人以外の国は基本的に悪い人は死んでも悪い人でありまして、悪だと言っちゃったらずっと悪なんですね。だからそういった人たちの遺骨を収集して慰めて、かわいそうでしたなんていうことは死んでも言えない。そうしちゃった場合は、植民地支配そのものを逆に言うと、中国政府が認めたというか、いいことだというふうに認めちゃうことになりますので、これは政治的立場としては絶対やれないと。だから遺骨収集もさせないというような発想です。

そもそもあまり中国で遺骨収集という発想もないというか、世界的に海外で亡くなった人をほじくり出して、遺骨をとにかく故郷に持ってこなくちゃというのにやたらとこだわっているというのは、これは不思議なことにアメリカ人と日本人だけでありまして。この2つの国はどういうわけかやたらとそれにこだわります。他の国はどうなるかというと、案外そのままほったらかしいなんですね。そのまま現地で埋葬しちゃって。イギリスはそのまま現地ですし、別にわざわざ持ち帰ろうという発想が元々ない。これは文化的な、いろんな人々の意識の問題でもあるかと思います。ただどちらにしても、こういう形で遺骨収集というものが進まないという中で、ここに木に立っているということです。

有名な方正にある日本人公墓というのは、これはたまたま特例として認められた場所であります。 特例として中国政府はそこだけやってもいいと。 ただそれはあくまで政治的妥協の産物で、ここだけは認めるけど、その代わり他はダメだよという意味でもあるんですね。というところで、基本的には今もその遺骨というのは、中国の満洲の大地に眠ったままがことであります。 今は特に都市開発が盛んになってきますので、 街中にあったようなものなんてほとんど分からなくなっていきます。新京ですね、昔の新京なんかのところもどんどん開発されてきますので、昔は日本人の収容所があってその近くに埋めていたといってもですね、 別のビルが立ち並んじゃって分からなくなっちゃうとかですね。そういうような状態になっていくということです。

▼語り継ぎの注意点

我々が歴史を伝えていくという中で、ある種戦後の中では、我々先輩の中というかですね、

実際の引揚者の人たちというのは、歴史を伝えていく中で、その考え方というのがある種政治性を帯びていってしまうというのは避けがたいものであります。ですから、これからも歴史を語り継いでいく中で、やっぱり気をつけていかないといけない。その時々のいろんな価値観とか雰囲気とか、あとは政治的な動機とか、様々なことに影響を受けやすくなってしまいます。そういったものからはなるべく影響を受けない形でやっていかないといけない。

割と語り継いでいくということが、案外簡単そうで難しいというのがあります。そういった部分で、これから私の後にお二方の語りを聞いていただけると思いますが、そういう事情の背景もあるんだなということをちょっと頭の隅に置きながら聞いていただきたいと思っております。

最後にお配りした資料の中に、その中で「忘れられた日本人」として、残留孤児の経緯を少しまとめておきました。 この残留孤児の経緯というのは、 これから山崎さんの方でお話しする話の前提になります。それを山崎さんの話を聞きながらですね、ここの紙を見ながらですね。年表的にはこういうふうになったんだというのを、ちょっと確認しながら話を聞いていただければと思っております。

最後の方にはですね、中国帰国者支援交流センターというので、この事業をやっているという。これ前回にもこの場で一応ご紹介させていただきました。そのセンターでやっている語り部育成事業というのの一つの成果と言っちゃうと、ちょっと山崎さんに重荷になっちゃいますので、あまりそういうふうには言いませんが。こういうセンターでこういう事業をやっていて、その一環として今からですね、皆さんにこの山崎さんのお話を聞いていただきたいと思っております。というところでちょうど時間が来ましたので、 終わりにしたいと思います。

加藤聖文氏の講演の様子

2023.11.18　第 5 回 満洲の歴史を語り継ぐ集い

満洲引揚とは何だったのか～歴史を語り継ぐ前提として～

加藤 聖文

Ⅰ．満洲国崩壊後の残留邦人の引揚

◎現在（2017 年 10 月時点）、海外に在留する日本人は 135 万 1,970 人（「海外在留邦人数調査統計」）：内アジア地域は 39 万 3,276 人（全体の 29%）

⇒この数字は多いか少ないか？

＊敗戦によって日本国内へ引揚げてきたアジア・太平洋地域の日本人は、300 万人を超した（大阪市の人口：約 270 万人）。地域別では、もっとも多いのが今の中国東北である満洲：約 127 万人、次いで満洲を除いた中国本土：約 49 万人および台湾：約 33 万人、さらに朝鮮半島の約 72 万人（北朝鮮：約 30 万人を含む）、樺太（サハリン）：約 39 万人と続く。これに現地での死亡者数約 30 万人以上を加えると 330 万人以上となり、現在アジア地域に住んでいる日本人の 8 倍超となる。

＊なかでも最多は満洲で、敗戦時には 155 万人を数え、死者も 24 万 5000 人にのぼった…民間人犠牲者数では広島原爆や沖縄戦、東京大空襲の犠牲者よりも多い。
なかでも国境周辺に点在していた開拓団員（27 万人）の死者は 8 万人を数え死亡率が高かった…開拓団員の場合、男性はシベリア抑留、女性と子供は中国残留邦人になるケースも多かった。

◎満洲ではソ連軍の進攻によって戦場となり、敗戦後もソ連軍の占領下で苛酷な生活を余儀なくされた。国境周辺に点在していた開拓団員らは避難民となってハルビン・長春・瀋陽などの都市に流入。半年にわたる難民収容所の生活のなか飢餓と伝染病によって犠牲者が激増していった。

◎このような状況の悪化に対して、敗戦国となって主権を失った日本政府は何も出来なかった…当時は兵士を含めて 660 万人が海外に残留していたが、彼らを日本へ帰還させるには最低 3 年はかかると予想されていた（船舶不足・燃料不足・港湾機雷封鎖・住宅不足・食糧不足）。

⇒しかし、結果的には 1 年後に多くの日本人が引揚げることができた…なぜ？

＊ソ連は産業資産の撤収と日本軍兵士のシベリア移送に集中して残留日本人問題に無関心。中国（国民党政権）はソ連軍が撤退しないと何もできない。アメリカは中国問題に関わりたくない。

＊アメリカ政府内部では対中国政策で方針が分かれていたが、11 月末に国民党政権を積極的に支援することに転換…12 月 15 日にトルーマン大統領が正式発表。

＊トルーマンは、内戦激化を防ぎ中国を安定化させるために国民党と共産党との調停役となることを表明したが、同時に中国の安定化を阻害する要因となりかねない残留日本軍（100 万）と民間人の本国送還を米軍主導で実施することも主要な柱としていた。

★トルーマンの声明発表後、1946 年 3 月にソ連軍は満洲から撤退、同時に米軍支援の下で国民党軍の満洲進駐が始まった。その結果、5 月から満洲残留日本人の引揚が米軍主導で急速に進められ、年内には大半が引揚げることができた。

★ちなみに、満洲国崩壊後、日本人以外の民族も故郷への帰還が行われた。なかでも朝鮮人（200 万人）の帰還は日本人よりも遅く、100 万人が自力で帰還した。

Ⅱ．戦後日本社会と「満洲」

◎予想に反して短期間に引揚が完了したことは、戦後社会にさまざまな影響を与えた。とくに 1947 年から米ソの対立が顕在化するようになると、満洲での悲劇や民間人の引揚完了後も続くシベリア抑留によってソ連のマイナスイメージが増幅⇔アメリカのイメージは向上。

◎着の身着のままで帰ってきた引揚者は失った財産を取り戻すため、サンフランシスコ講和条約締結前夜から在外財産補償要求運動を展開⇒しかし、日本政府は連合国に対して財産請求権を放棄したため（賠償の肩代わり）、今度は私有財産補償を日本政府に請求するが不本意な結果となる。

↓

★この過程で、満洲に残さざるを得なかった日系資産（公共財から私有財産まで）は正当な経済活動の結果であって、植民地支配による収奪ではないという論理が展開されるようになる⇒この論理は賠償問題が懸案であった日本政府にとっても受け入れやすいものであった（中国に対する戦争賠償＋韓国に対する植民地賠償）。

↓

★さらに高度経済成長期に入り賠償問題も過去の問題になった 1960 年代中盤以降、東京裁判批判を背景にした政治的主張へと変容…満洲の政治イデオロギー化

◎1960 年代後半に満洲国の歴史の正当化が進められていったが、満洲国に関わった人々がすべてこのような流れに積極的に関わったわけではなかった。

＊満洲国を理想国家として語った人物は、星野直樹（満洲国総務長官）・片倉衷（関東軍参謀）・山口重次（満洲国協和会）など…彼らの共通するのは戦前の華々しい活動に比して戦後は不遇か地味。

＊これに対して満洲国時代を美化したり多くを語らなかったのは、高碕達之助（満洲重工業開発総裁で敗戦後は日本人救済総会会長。戦後に周恩来との間で日中国交正常化の地均しをした人物）や岸信介・椎名悦三郎など…彼らの共通のするのは戦後も表舞台で活躍。

高碕達之助

星野直樹

◎さらに満洲国を理想国家として語った人々は都市住民であって開拓団員ではなかった。在外財産補償請求も都市生活者が中心、もともと財産も無かった開拓団員には無縁。むしろ開拓団員は犠牲者の慰霊と遺骨収集に拘った…満洲引揚者といっても都市生活者と開拓団員はまったく違う世界の住民であって共通項は何もなかった。

↓

＊開拓団員は引揚後の生活再建がもっとも困難だったグループに属する。彼らは日本国内の財産を処分して満洲へ渡っていたため、帰国後の定住探しから難航した。彼らを送り出した母村も彼らを受け入れる余地は少なく、引揚開拓団員は新しい開拓地に入植していったが、開拓地は耕作に不向きな土地が多かったため戦後開拓の多くは失敗した。彼らにとって満洲は理想郷でも何でも無かったが、10 代で渡満した青少年義勇軍の人々はソ連軍によってシベリアへ抑留されて帰国した苛酷な体験からむしろ思想的には皇国史観を全面に出して満洲を理想郷とする傾向が強い。

＊満洲で亡くなった犠牲者の遺骨収集は中国政府が認めず、現在も多くは埋もれたままとなっている（写真：方正日本人公墓）

Ⅲ．忘れられた「日本人」

◎1958 年：中国からの集団引揚打ち切り

⇒1959 年 3 月「未帰還者に関する特別措置法」…7 年以上の生死不明未帰還者について家族・親族の申告によって戦時死亡宣告が可能となり、約 2 万人が死亡扱い。

＊戦争による行方不明者（未帰還者）は遺族の生活再建の障害になっていた（遺族年金の支給など）。特別措置法では未帰還者の推定数 3 万 1,000 人、その大半が生死不明の兵士。民間人（未引揚者）は兵士に比べるとデータがなく、本格的な調査もされず、しかも対象国が共産圏（ソ連・中国・北朝鮮）だったため実態把握は困難だった。

＊政府は中国に残留する未引揚者は後期集団引揚終了後 2 万 1,287 人、そのうち 1 万 6,474 人が消息不明者と推定していたが、特別措置法によって未引揚者数は大幅に減少。中国残留日本人のほとんどいなくなったと認識。しかし、まだ中国残留日本人（特に孤児）が多く存在していた。

＊中国残留日本人は敗戦時の年齢によって残留婦人（15 歳以上）と残留孤児（15 歳未満）の 2 種類に区分される。残留婦人の場合、本人は日本人という意識はあっても敗戦後に結婚した中国人との間で子供が出来ていたなどの家庭の事情から集団引揚に加わらなかった事例も多かった。また、残留孤児の場合、敗戦時に 5 歳以下だった者が全体の 76.9%を占めていたが、彼らは敗戦時の記憶が薄く、自身を日本人と認識していないか、仮に認識していたとしても生活面において養父母から自立しておらず、自らの意思で後期集団引揚に加わることができなかった。

◎1965 年以降：中国残留日本人の存在が次第に明らかに⇒1970 年代まで民間（山本慈昭：長野県の僧侶で元開拓団員）が中心になって調査が進む

⇒日中国交正常化（1972 年 9 月 29 日）を機に実態がようやく明らかに。

◎国交正常化後、政府による残留日本人調査が始まったが、彼らの帰国を積極的に実施する法的体制が整っていなかったため、結果的に民間主体による肉親捜しと帰国が行われた。しかも、当初は親族が判明した孤児が帰国できた一方、親族が判明しない人は帰国できなかった。その後、1981 年 3 月に第 1 回訪日調査が開始されたが、敗戦時 12 歳以下で身元不明者の残留孤児が対象とされ、13 歳以上の日本人（多くは女性のため残留婦人と呼ばれる）は自らの意思で残留したものと見なされ親族が引き受けない限り帰国できなかった。

★中国残留日本人をめぐる問題は、国交正常化によって急浮上した問題であったことと事態の進展が急速に進んだため、行政側の対応も法的整備も遅れがち。結局、その後の展開も 1985 年 3 月に身元引受人制度(親族が判明していない孤児も永住帰国可能)、1989 年 5 月に特別身元引受人制度(親族が判明しているが身元引受人がいない孤児を対象)によって残留孤児の帰国体制が整備された一方、残留婦人に関しては整備が遅れ、1991 年 6 月になってようやく特別身元引受人制度を残留婦人にも拡大。しかし、この制度では帰国には親族の同意が必要とされ、しかも特別身元引受人数の不足という現実が加わっていたため、1993 年 9 月に残留婦人の強行帰国という事件が発生。

→この事件を切っ掛けに 1994 年 4 月「中国残留邦人等の円滑な帰国の促進及び永住帰国後後の自立の支援に関する法律(中国残留邦人支援法)」制定…国交正常化から 20 年以上経って残留日本人の帰国と帰国後の援護が国の責務と位置づけられた。

★しかし、この時期になると残留日本人の肉親捜しと帰国支援よりも帰国者の日本国内での生活支援が問題となっており、不十分な生活支援策に加えて帰国者の高齢化も重なって生活難に陥る帰国者家族が新たな問題として顕在化。政府の支援策に不満を抱いた帰国者は 2000 年になると国会請願運動を起こすが、結果は請願不採択となり、翌 2001 年 12 月に国家賠償請求訴訟にまで発展。結局、この問題は政治決着が図られ、2007 年 11 月「中国残留邦人支援法」が改正されて今日にいたっている。

＊1981 年の集団訪日調査が開始されてから現在までに 6000 人以上が帰国。残留日本人調査は現在も続いている。

◎中国残留日本人問題と並行してサハリン残留日本人に対しても 1988 年 12 月に一時帰国援護制度を整備し、1990 年からは現地での実態調査も行われるようになり、「中国残留邦人支援法」制定後は同法によって対処されるようになった 。

★日中国交正常化以降、「引揚者」は質的に大きく変容。残留日本人にとって、引揚の可能性が絶たれれば現地に同化していくのは自然の流れであった。そして、現地化したなかで国交正常化が実現して本人の「引揚」が可能になると養父母･配偶者･子供ら家族も行動を共にするのは当然。しかし、本人を除くと彼らは移住者に近い存在。このように「引揚者」と「移住者」が一つの家族のなかに混在する状態が生まれた結果、彼らは「帰国者」として扱われるようになったといえる。

＊この問題に関心のある方は、中国帰国者支援・交流センターのウェブサイトを参照してください。https://www.sien-center.or.jp/

【講話要約】

「戦争はどのように人の人生を変えるのか －中国残留邦人山﨑幹子の経験から－」

山崎　哲

山﨑幹子(よしこ)は 1930 年、福島県に生まれる。1940 年、10 歳の時に父母と弟の 4 人で当時の「満洲」東安省（現在の黒龍江省）勃利(ボツリ)県に「満蒙開拓団」として渡る。冬は零下 30 度にもなる極寒の地で幹子はとても住めないと一人東京の叔母の家に帰る。その後体調を崩した弟を連れて母親も帰国し家族 3 人で福島に戻る。

その後、日本本土では戦争が激しくなっていき空襲も頻繁になってきたので、満洲の父が迎えに来て再び家族で満洲に渡ることになる。1945 年 4 月、幹子 15 歳のことだった。

満洲へ帰ると幹子は一人で佳木斯(ジャムス)の高等女学校の寮に入る。8 月 11 日、突然校長先生が、ソ連が参戦して満洲に進攻してきたと告げ、生徒全員に避難を命じる。二日ほどたってたどり着いた町で運よく母と弟と再会する。現地民やソ連軍の襲撃から逃げ惑う日本人は食べるものもなく伝染病も流行り多くの人が亡くなっていった。その後たどり着いた収容所で偶然にも父親と再会することができた。そして家族 4 人で瀋陽の収容所にたどり着く。しかしそこでも次々に人が死んでいった。

そんな中、ある中国人が幹子を自分の店で雇いたいと言ってきた。母親は娘を生かすために中国人のもとへ行かせた。その後しばらくしてから幹子は家族を探しに収容所付近へ行ったが、家族の姿はどこにもなかった。幹子は中国の地で一人生きていくことになる。

19 歳で中国人と結婚した幹子は中国で生活しながらも家族の無事を祈り続けていた。日中国交正常化後の 1975 年に日本の親戚に手紙を出す。日本の親族は幹子が中国で生きていることがわかると死亡となっていた幹子の戸籍を回復させた。しかし中国の幹子のもとに送られてきた戸籍の父母や弟の欄は「死亡」となっており幹子は絶望する。

1977 年、32 年ぶりに日本へ一時帰国（里帰り）する。幹子は 47 歳になっていた。1983 年になって子どもたちと日本に永住帰国する。帰国後は残留孤児の帰国後の研修施設で働く。帰ってくる残留孤児の中に弟の姿を探し続けるが、最後まで弟と思われる人物は現れなかった。

幹子の孫である語り部は、祖母に向き合いこの体験を聴けるまで長い長い時間がかかった。そしてその話を聞き、改めて何度もちぎれそうになった自分への命のつながりを知った。

（２０２３年１１月１８日談）

【講話】

戦禍に散った命を忘れないで伝えて行こう～会えなかった伯父、従兄妹たちを訪ねて～

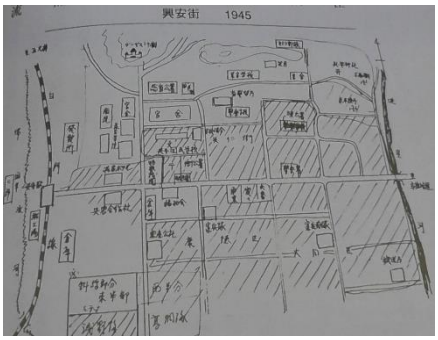
岡田　とし

はじめに

昭和１４年の春に高知県朝倉村（現高知市）で一組の若いカップルが両家に祝福されて大きな夢を大陸に抱き満州に渡りました。

それから、数年先に戦争のために、夫と３人の子供を失い若くしてたった一人になってしまった未亡人は私の伯母で、亡くなってしまった子供たちは会うことのなかったいとこたちです。残っている写真や手紙を元にお話しさせていただきます。

伯母澄子（旧姓　伊野部澄子）はお見合いで外国語大学を出て満語のできるすらりと背の高い士官の伯父と縁あって満州・興安街王爺廟代用官舎で生活を始めました。



３人の子宝にも恵まれ仲睦まじい姿を、手紙やハガキ、写真で実家に数多く送ってきていました。長男・征一郎は実家のある朝倉村で出産しました。高知で生まれた長男と嫁を待ちわびる満州からの手紙も残っています。母親ゆき（私の祖母）は初孫を興安まで連れて帰った時に、あまりにも遠くまで嫁にやったことを後悔したそうです。しかしまだ後の悲劇を知る由もありませんでした。

１、幸せな時代

手紙と写真の紹介

①　長女　尚子の誕生

昭和 16 年１２月１３日

謹啓御返電下され厚く御礼申し上し述べます。

時給も歴史的　英米宣戦布告丸一日前に当たりますので生日も思い出深いものと成ります。尚子と命名いたしました。

八紘一宇の生鮮とあやかり尚武を意味するものです。その後　母子とも万事好調子であ

ります。
先ず心からご安心下さい。
６日午前６時頃いよいよ余震の陣痛が始まり、予想外の軽産にて産婆も間に合わず僕が受け止めたような次第にて、私自身は濡れたままの赤ん坊を手中に入れた時は全く神の授かりものと言うような気持ちで、少しも慌てずに産婆を待ちました。
赤ん坊も元気で女の子故、声も優しくすやすや寝ています。
生れたときは７日午前 11 時、体重 760 匁身長 48 糎です。

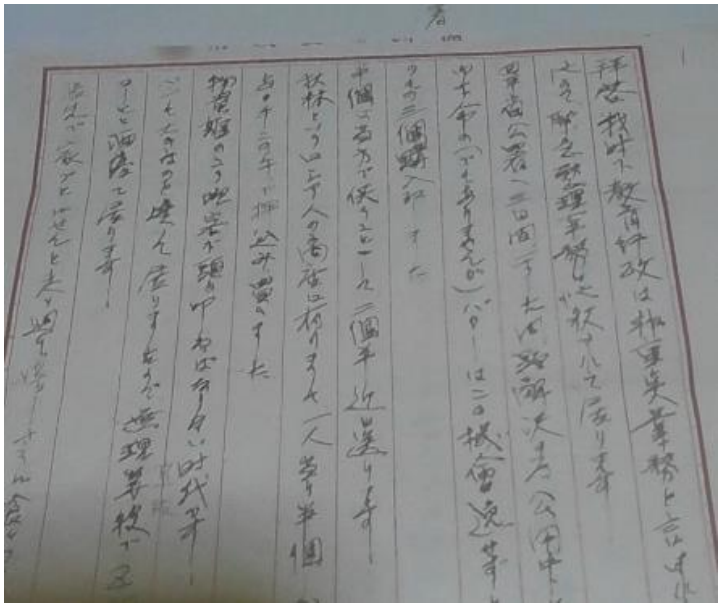
② 征一郎の写真とすくすく育つ、わんぱくぶりの手紙紹介
昭和 17 年ごろ
この頃はマーチョ（馬車）に乗って「代用官舎」と澄まして言っています。
そのまま来てくれてホントにどうしましょう。でも元気いっぱいだから何よりです。
寝るときはちゃんと手をついて「おとうちゃま、お休みチャイ」と、お礼し神仏も拝んで寝ます。中々にお茶目で面白い子で、いつも二人で見るのは惜しい高知へ帰ったら皆が大騒ぎするだろうと話し合っているのです。
大きなおとうちゃまの靴が大好きでよく履いては引きずり回って出ていきました。木馬は大連からのお土産でした。　　澄子

昭和 17 年ごろの手紙です。満州での生活ぶりが分かるようです。広い満州で幼い命を懸命に生きていたと思います。

③ 待ちに待った次男は 19 年 8 月 20 日に生まれ卓也と名づけられました。

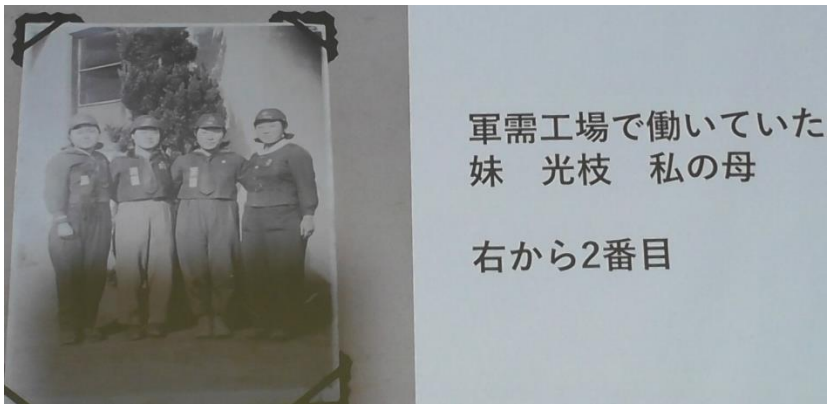
夫、栄一の高等官の合格、無事に子供が育っている自分を運が良い感謝する。と言った 1 年後、卓也は龍江省垣途の地に一人眠ることとなります。

この頃には、便箋の上に満州国帝国政府と印字されていた箇所が切り取られ、ミシンは買っても重くて逃げられないとの文面もあり戦況が厳しくなりつつある様子が伺えます。



２、光枝　満州に渡る

昭和 20 年終戦の 4 か月前に大阪の軍需工場で働いていた妹（光枝・後の筆者の母）を両親が心配し、興安に職を構えてもらい姉の所に逃がすことにしました。運命のいたずらか、ご先祖様の助けか…葛根廟事件が、終戦が目の前に迫っているときでした。

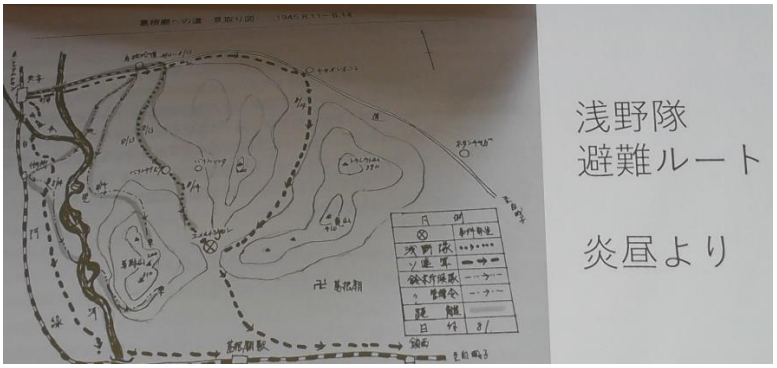


8 月 9 日のソ連参戦を知り、栄一さんの職場からボーイさんが 1 枚の紙を届けてきました。紙には「今すぐに家を出て逃げよ。自分は職場の後片づけを済ませて、後を追う。」と書いてありました。

風呂敷包に身のまわりのちょっとした品を包み、お守りにと夫の写真を胸に入れ家を出たそうです。しかし、どんなに待っても二度と夫に会うことはありませんでした。

３、葛根廟事件　地図の五百羅漢寺の絵の写真と地図

8 月 10 日の朝、伯父栄一ら浅野隊一行は興安から徒歩でラマ教寺院、葛根廟を目指しました。すでに、トラックも馬車も関東軍が持って行っていましたので、歩くしかなかったのです。ここまで行けば日本人僧侶が待ってくれているはずでした。



1200 名ほどでしたが、9 割が女、子供、年寄りで野宿をしながらの歩きでみんなが疲れて、なかなか進まず、３～4 キロの列になり 14 日もお昼前になったので、隊を整えるためにも一休みしようかとしていたところを 11 : 40 にソ連軍が突然現れて。戦車 14 台、トラック 20 台に乗ってきた軍が攻撃してきたのです。

無情にも一般の無抵抗の人々を戦車でひき殺し、マンドリンという国連条約では禁止されている何百発も打てる機関銃で虐殺を始めたのです

人間がキャタビラーで引かれる音、体が宙に飛び、悲鳴、機関銃の音、硝煙の臭い、あたりは血の海、ちぎれた手足、土にめり込む体の一部、1 時間あまりの出来事だったそうです

が、凄惨極まりない地獄絵図だったそうです。

「葛根廟事件邦人遭難の図」（五百羅漢寺蔵）

伯父栄一は 32 歳で突然命を絶たれる瞬間にどんな思いがよぎったのでしょう。
妻と 3 人の子供の無事を祈ったこととは思います。
もしかしたら故郷高知の親兄弟のことも頭をよぎったかも知れません。

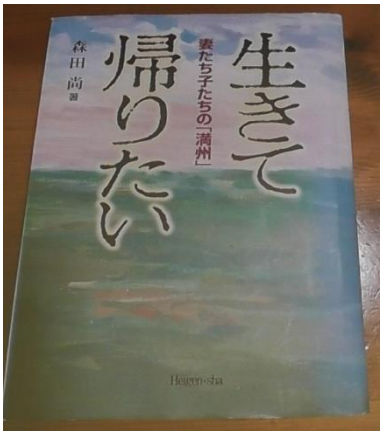
たまたま畑に身を隠せた人、豪の中で助かった人、死体の下で死んだと思われた人が奇跡的に生き残ったそうです。
しかし、生き残ったとしてもそれは恐ろしかったとのことです。あたりは、死体の山、そして血なまぐさい臭い、息も絶え絶えの重症者のうめき声。親を亡くして泣き叫ぶ子、水も食べ物もなくこれまでと、持たされていた青酸カリを飲み、死を選ぶ人も多く、幼子に手をかける人、残された軍刀を持つ人に殺して下さいと列になったそうです。
生きていても中国人暴徒に襲われ、持ち物を奪われ下着まで剥がされ持っていかれたそうです。女性は乱暴され、抵抗するとこん棒で殴りつけられました。

数人の婦人と子供がやっと小屋を見つけ、そこに隠れるとそれを、ソ連兵に見つかり全員が犯され、トウモロコシの殻とランタンを小屋に投げ入れ焼き殺されたそうです。
これは小屋の小さな窓から命からがら脱出して、孤児となり大人になって日本に帰ってこられた方の証言です。この事件で 30 人ほどが残留孤児になりましたが本当にご苦労をされています。
数少ない生き残った方が葛根廟命日会をつくり毎年同じ時刻に東京の五百羅漢寺で冥福を祈っています。こんな残酷な事件があったことを忘れないでいて欲しいと願います。

４、残酷な逃避行

夫や親しかった人たちが、こんな事件があったことを知ってか知らずか、澄子、光枝姉妹

と幼子３人はただただ歩いて新京を目指していました。
　はじめは大きい集団が、「私はこちらの道を行くわ」「私はこちらへ、ではまた元気で会いましょうね」とお互いの無事を祈りながらだんだんと少ない人数になって行ったそうです。
　後に、大きな道を選択した集団が全滅していたことを知ったそうです。
食べるものもなく歩くだけの毎日、ある日次男卓也はおぶわれたまま背中で亡くなっていたそうです。お乳も出ないし餓死であったと思います。
　服を着せては現地の人に鍬で掘り返されるからと藁を敷き裸で土に埋めたそうです。
澄子は自分も穴に入らんばかりに泣きくずれて、妹光枝に肩を抱きかかえながらやっとその場を離れたそうです。まだ２人の幼子を連れて帰らなくてはなりません。
　後に「私は妹が居なければ私は青酸カリをあおって子供と一緒に死んでいた」と話しました。



５、新京

　森田尚さん『生きて帰りたい　妻たち子供たちの「満州」』の本の写真と紹介（ｐ259～261）

　私の左隣の場所には、私より少し年上らしい母親と五，六歳くらいの坊やが座っていた。奥地からの避難民らしいが、母親はよほど大らかな環境に育った人なのかとてもおっとりとした美しい人で、私のしゃべる言葉を聞いて、
「まぁなつかしい、あなたは関西の方でしょう。言葉のアクセントですぐわかりましたわ」と言う。この女性は高知の人なのだそうだ。高知県のことはほとんど知らない私に、土佐の暮し、とくにお祝いのときに、いくつもの九谷焼の大皿に新鮮な海の幸を豪華に盛りつけて客人をもてなす「皿鉢料理」の話をしてくれた。
　見たこともない異郷の豪華な料理の話は、灰色の気分だった私を瑞々しく、心蘇る想いにさせてくれた。それまでは、病を患っているとはいえ、とりつく島もない人ばかりだったこの馬小屋で、はじめて心開いておしゃべりできる人に出逢い、私はまるで肉親に出逢ったような、しあわせな気分になっていた。
　しかし、敗戦後の彼女の体験は、そのおだやかな表情からは想像できない過酷なものだった。彼女は満州の奥地、興安南省の興安街（興安総省の所在地）で八月九日ソ連参戦をしる。当時医学院に勤務していた夫は、患者の移動や病院の後始末のため現地に残り、彼女は青酸カリを与えられて一歳の次男を背負い、六歳の長男と四歳の長女の手をひき、他の避難者と共に興安嶺山の中、遠く新京をめざして二か月間の苦しい逃避行をつづけた。その途中で一歳の坊やを飢えで死なせ、十月初めにやっと新京に辿り着いたのだそうだ。しかも、夫はすでに終戦の前日、葛根廟でソ連軍に攻撃されて死亡したという。

そのうえ、生活の始まった新京でのある日、長男が食事中に箸をポトリと落とした。不審に思って医者に診せたら、脳性小児マヒとのこと。頭はしっかりしているが、半身の自由がきかなくなってしまった。やっと内地送還が始まって学齢に近い長男をおぶって、新京からこの錦州まで来たという。

なぜ、この人ばかりに、こんな悲しいことがつぎつぎに起こるのだろう。私は話を聞きながら、言葉を失っていた。彼女には、終戦の四か月前に彼女のもとに身を寄せた妹さんがあり、敗戦後なにかにつけて彼女を援けていたという。このときも、妹さんは四歳の長女を預かり、一日も早い帰国を願って健康組に入っていた。毎日のように二人で、彼女と 6 歳の長男を見舞いにきていた。

敗戦までは、夫婦と子供三人、申し分なくしあわせだった彼女の家庭は、敗戦後一挙にこんな悲しい姿になってしまったのである。

その事情を知るにつけ、ともかく私たち母子は元気に生きているのだ。けっして「敗戦の被害者」などとは思うまい、と心に強く誓った。幾多の悲しみを乗り越えた彼女の屈託のない姿は悲劇が充満しているこの馬小屋で、私の大きな心の支えとなった。

６、帰郷

長男　征一郎の死

1946 年満州在留日本人の帰国が始まり、引き揚げ港となった満州の葫蘆島から先に船に乗れたのは健康組の光枝と尚子だったそうです。しかし、船に病人が出て港に留め置かれ、後発の澄子と征一郎が先に長崎・佐世保に着いて高知に帰って来ました。

満州から帰る知らせを受け、朝倉駅に迎えに行った母（ゆき）。どんなにか安心したことでしょう。澄子が背中におぶった征一郎を迎えに来た母に「こんなになってしまって」と見せると「無事に帰ってきたがやき、かまんかまん」と二人は朝倉駅でただ涙にくれたそうです。

無事に帰って来たのも、つかの間征一郎はそのまま回復することなく眠りにつきます。その後光枝と帰ってきた尚子は、目の前で兄も弟も死に、父も行方不明でどんなに心細かったことでしょう。「おにいちゃん、尚子がいじめられたらだれが守ってくれるの！死なないで！」と泣いて泣いて、そばにいたみんなも一緒に泣いたそうです。この時に伯母は一人残された尚子を立派に育てて行こうと決心しました。

長女　尚子の死

尚子は祖父母と母親に大事にされながら無事にみのり学園に上がりました。父親に似て歌も踊り上手で発表会には一人で

歌ったり踊ったり、末は歌手になれると皆がこの子に希望を託し成長を喜んでいたそうです。

しかし、ふとした風邪がもとで、帰らぬ人となりました。過酷な逃避行、父、兄、弟の死、慣れない高知での暮らしと心身ともに疲弊していたのだろうと思います。母（澄子）は毎日神社にお百度詣りをし、神様仏様にすがったそうです。しかし運命は残酷だったのです。

亡くなる時に、「お家へ帰る、お家へ帰る」とうわごとを言い「ここが尚子のお家よ」と言っても「お家へ帰る」と聞かなかったそうです。尚子にとっては、お父さん、お兄ちゃん、弟が居る家族 5 人で平和に暮らした満州王爺廟の代用官舎がお家だったのだそうです。そして、「きれいなお花畑が見える、小谷の（亡くなった）おばあちゃんがお迎えに来てくれた」と言って亡くなりました。

伯母は、「優しかったお父さんやお兄ちゃんのいる世界にあの子は行ってしまった。子煩悩だったお父さんが尚子を連れに来たのかもしれない」と言っていました。

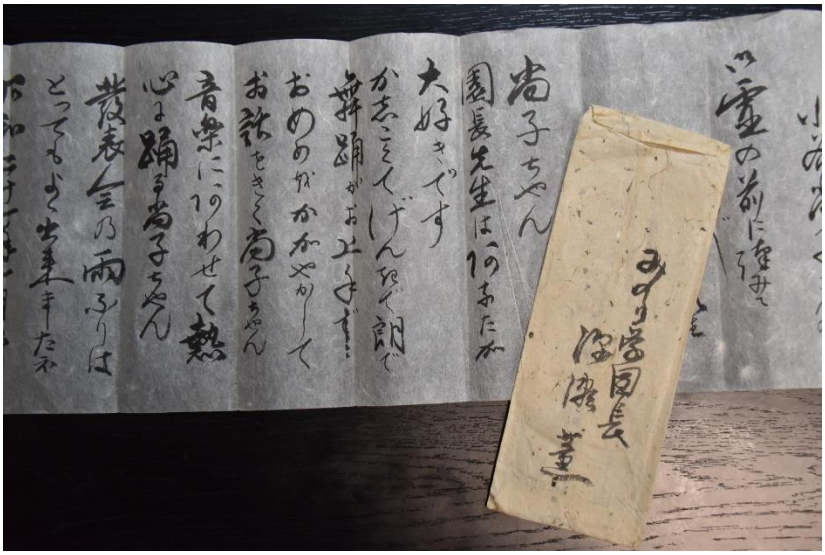
一人残された伯母の気持ちはどんなに辛かったろうと思うと胸が痛みます。そのことを思い、尚子が通っていたみのり園の園長先生が追悼文を下さいました。伯母は「みのり学園に入ったわずかな間が、あの子の人生の華だった」と話していました。

「みのり学園」深瀬園長の追悼文

小谷尚子さんの御霊の前に謹みてささぐ

尚子ちゃん、園長先生はあなたが大好きです。かしこくてげんきで朗らかで舞踊がお上手で、おめめをかがやかしてお話を聞く尚子ちゃん。音楽にあわせて熱心に踊る尚子ちゃん。発表会の雨ふりは、とてもよく出来ましたね。

昭和 21 年 1 月 6 日入園この方丁度 2 年と 3 か月お優しいお母さまとご一緒に休まず通った尚子ちゃんの可愛らしい面影、どうして忘れませう。尚子ちゃんもみのりを忘れないでくださいね。



７、ひとりになった澄子

1946 年 12 月の南海地震が高知を襲った時、皆が外に逃げる中五人家族で一人生き残ってしまった伯母は死ぬつもりで家に居ました。しかし、揺れは大きかったものの塀が倒れたくらいで家の方は何ともなかったそうで、これも運命だったのでしょう。

戦前は地主であった伊野部家の土地は農地改革で小作のものとなり、米すなわち現金収入がなくなり、アイスケーキの商売を始めようとした祖父は機械代を騙され、二重に代金を払うことになり大きな借金を抱えてしまいました。いわゆる武士の商法で商売はうまくいかなかったようで、柔道家で体格の良かった祖父はこの時期にげっそりと痩せてしまったそうです。気苦労が絶えなかったのでしょう。

伯母はそれを期に、播磨造船の持つホテルで仲居の仕事を泊まり込みですることを決意します。以来十年間お給料は全部実家に送ったそうです。お陰で借金の返済もでき、何とか暮しにも困らなかったようで、祖父母はずっと伯母に感謝していました。

後年、伯母は「悲しみに暮れる間もなく家のために仕事に打ち込めて、かえって良かったかも知れない」と言っていました。

おそらく悲しみの淵にのまれそうになりながら、贖罪をあがなうように、自分が生かされたのは家のためだと言い聞かせて懸命に働いたのだろうと想像します。

８、澄子の晩年

伯母澄子はその後４０歳を過ぎて縁あって５人の子供のいる家に後妻に入り神奈川県に移り住みました。自分の子供は育てることが出来なかったから、せめて人の子供でも育ててみようと言って苦労を承知で嫁いでいきました。

二度目の夫はシベリア抑留の経験のある軍人で、伯母は満州引き揚げの経験とお互いに戦争、連れ合いを亡くするという辛い経験をしていたので、長い年月二人は互いの身の上を語りあったことと思います。澄子はこの夫との関係の中で辛い気持ちを慰められ癒されたであろうと思います。

伯父の連れ子の二人の女の子は戦前生まれで成人していたので、下の 3 人の男の子を中学生と小学校 3 年生〈双子〉から育てました。言葉どおり苦労の末、義理の子供たちを立派に育てましたが、古い家制度の封建的な考えの伯母は、戦後生まれの民主主義教育で育った息子たちや特に嫁たちと折り合いが悪く、目も緑内障を患い失明して孤立しますます気難しくなっていました。夫は一人妻を残しては死ねないと思ったのか百三歳まで頑張りました。伯父の存命中は顔を出した子供たちもめったに来ることもなく、夫亡き後は一人暮らしで大変不自由な暮らしをしていました。

伯母の晩年は目が見えないのでケガや骨折を繰り返し、ヘルパーさんの介護では限界となり、最後の２年間は私が高知の実家に連れて帰って家政婦さんのお世話になりながら看取りました。当時の話ができる人に会わせあげ、思い出の場所に連れて行ってあげようと思いましたが、すでに当時の話のできる人はいませんでした。淋しい晩年であったと思います。私は祖父母の元に居たので古い伯母の価値観が理解できたので何とか看ることが出来ました。

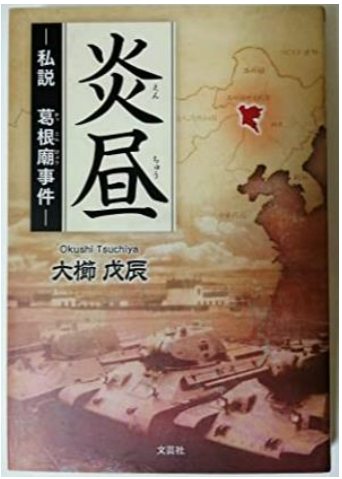
娘時代を恵まれた環境で過ごし幸せな時を送った大好きな実家、子供たちも見送った思い出深い実家で亡くなったのが、せめてもの慰みと思います。苦労続きの９４年の生涯でした。今は両親と妹夫婦と幾多のご先祖様と共に眠っています。

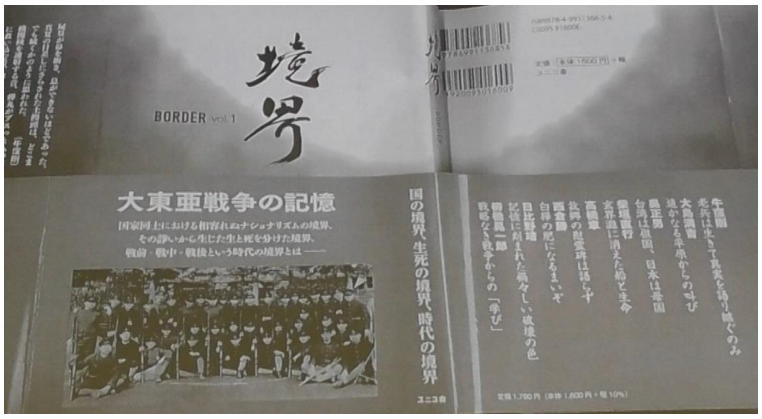
伯母は、あちらの世界で 32 才の若い夫とひ孫のような我が子に再会できていればいいなと思います。

そして、来世というものがあって、もう一度どこかで出会い幸せな一家として暮らして欲しいと願いと願わずにはいられません。

９、炎昼

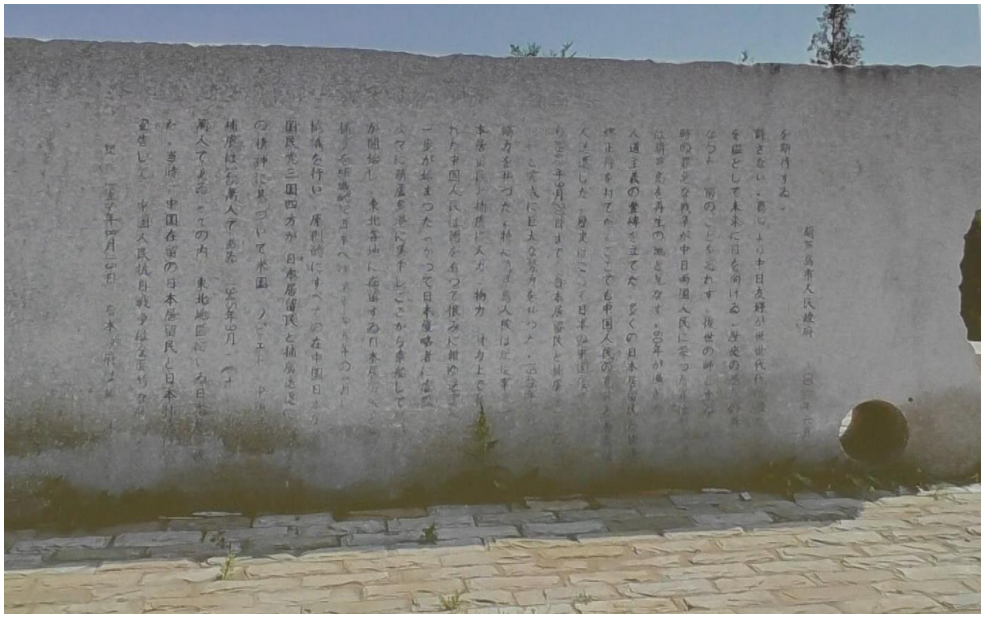
生存者の書籍の紹介（大櫛戊辰、大島満吉）





実家に残された史料をきっかけに葛根廟事件を知り、2022 年 8 月に初めて五百羅漢寺の葛根廟事件の慰霊祭（命日会）を訪ねた。

満州の歴史を語り継ぐ高知の会の﨑山ひろみさんをモデルにした『伝言』が出版されるのに先駆けて 16 歳まで満州で過ごされた﨑山さんの軌跡を訪ねて中国に行ってきました。母や伯母、いとこたちがここから船に乗った葫蘆島にも行きました。



10、哲学者　ヤスパーズの言葉

起きたことは一つの警告である。それを忘却することは罪悪である。このことは起こり得たということだ。それはいつ何時でも起こり得るということである。このことを知っていることでそれを阻止することができる。

そして、この会場に私にとっては義理の伯父ですが、その実の甥が埼玉から聞きにきてくれました。昨日初めて会うことができました。きっと小谷の家族の願い後押しもあったと思います。

今朝は伯母のお墓参りにも行って下さいました。伯母も喜んでいると思います。お陰で亡くなった親族の良い供養となりました。

この場を与えていただいたことに深く感謝をいたします。聞いていただいてありがとうございました。

（２０２３年１１月１８日談）

講話をする筆者

【シンポジウム記録】子・孫世代が語り継ぐ満洲の歴史

テープ起こし・編集：楠瀬慶太

基調講演、子・孫世代の語りに引き続いて行われたシンポジウムでは、「子・孫世代が語り継ぐ満洲の歴史」をテーマに、以下６人の登壇者による活発な議論が行われた。パネラーに、研究者の加藤氏、親が満洲関係者である子世代の織田氏、岡田氏、小野氏、孫世代で祖母が中国残留孤児となった山崎氏、司会を孫世代の楠瀬氏が務めた。シンポジウムの記録として討議内容を筆記する。なお発言内容を一部修正した箇所がある。

シンポジウム登壇者

パネラー

加藤聖文（国文学研究資料館准教授）

山崎哲（中国残留邦人等の体験と労苦を伝える戦後世代の語り部）

小野由美子（満洲の歴史を語り継ぐ高知の会）

織田千代子（満洲の歴史を語り継ぐ高知の会）

岡田とし（満洲の歴史を語り継ぐ高知の会）

司会

楠瀬慶太（満洲の歴史を語り継ぐ高知の会）

楠瀬：時間になりましたので、シンポジウムを始めます。「子・孫世代が語り継ぐ満州の歴史」をテーマに、前半のご報告を補足するような形で議論ができたらと思います。まず、登壇者を紹介します。報告者は 3 人だったんですけど、加えて満洲の歴史を語り継ぐ高知の会で実際に語り継ぐ活動をされている子世代の小野由美子さんが右端、右側 2 人目の同会・織田千代子さんにも登壇いただいて、シンポジウムをしたいと思います。

ちょっとご紹介しますと、小野さんは、新京への都市移民で語り継ぐ会の副代表でもありますの崎山ひろみさんを母に持ちまして、いろんな語り継ぐ活動をされています。織田さんは、満蒙開拓青少年義勇軍にいたお父さんと、その資料について書いた書籍『鍬の戦士・父前田定の戦い』（高知新聞総合印刷）が、第 24 回の日本自費出版文化賞の部門賞を受賞されるなど、実際にお父さんの体験を本にするという形で、語り継ぐ活動をされているメンバーでもあります。

今日のシンポジウムの流れを一度確認しておきます。今回語り継ぐ集いの前半では、厚労省の語り部育成事業など国の取り組みの実際が紹介されたところなんですけど、実際今日お話し聞いてもらったように、高知では語り継ぐ会という形で民間団体が研究者とも連携して、語り継ぐ活動を展開しています。シンポジウムでは、まず（語り継ぐ会の）事務局長の私がこれまでの語り継ぐ高知の会の活動について少し整理させていただいて、それぞれの語り継ぐ活動や思いを皆さんにちょっと語ってもらうというような形で進めていきたい

なと思います。その話と前半も含めて加藤先生にコメントをいただくというような流れで議論を進めたいと思います。それがある程度収束したら、会場からご意見をいただきたいと思いますので、またよろしくお願いします。

まず、語り継ぐ会の活動について少し簡単にご紹介したいなと思っております。語り継ぐ会自体は今年が 6 年目になりまして、この集いも 5 回目になります。年 1 回語り継ぐ集いという形で、こういうホールなどでいろんな体験を語ってもらったり、大学の先生とか研究者の人を呼んで、歴史について学ぶというような活動を年 1 回行っています。それに加えて記録集という形で、今回受付でも渡してましたけど、その語り継ぐ集いの内容を活字にしています。今後それ（記録集）を見てもらって語り継ぐテキストにしてもらうということで、活字の形でそれを残していくという活動もしています。その中で、元々高知城歴史博物館が中心になって、満洲に渡った高知県出身の人たちの聞き取りというのを 60 人近くやっておりまして、その DVD とテープレコーダーの記録を起こして体験を資料化するという作業も同時に行ってます。その体験を資料化したものを語り継ぐ集いの記録集の中に報告するという形で、そういう資料を残していくという活動も一方でやっております。

それから加えて岡田さんの話に出てきたように、満洲に関わる資料というのが、高知県は満洲移民へ行った人の比率が人口比で 1.4%、全国で 3 位になるんですけど、非常に多かったということもあって。加藤先生は資料はなかなか持って帰ってこれなかったというふうにおっしゃってたんですけど、葫蘆島からの引き揚げとかの時に持って帰れたものというのはほとんどなくて、山崎さんの写真とか岡田さんの写真も、実際実家に帰ったときとかに写したものとか、実家に送ったものが残っているというものが多くて。そういうものも関連資料ということで、語り継ぐ会のほうで活字化をしたりとかいうようなこともしています。

岡田さんの場合は、ちょっと先ほど紹介したんですけど、ご自分の家にあったおじさんの手紙を 3、4 通ぐらい自ら翻刻して資料化するということをやっています。それからまた本人からもお話があると思うんですけど、織田さんもお家に満蒙開拓義勇軍で行ったお父さんが残した資料がありまして、その資料を本にするというような形で語り継ぐ活動ということで記録を残していくということをしてます。あと（戦前の）高知新聞にもたくさん満蒙開拓青少年義勇軍に関する記事が載っているんですけど、自ら収集されてそれを活字化するっていうこともご自分で行われているっていうことになります。

こういうふうに体験であったりとか資料であったりとか写真とかっていうものを、複合的に満州の歴史を語り継ぐのに必要なものを、何とか記録をして後世に残していけたらっていう活動を、ちょっと地味ですけど、それぞれの皆さんで協力してやっているということになります。右端の小野さんは満洲の（体験の）聞き取りをした DVD とかテープレコーダーを自ら見られて、お母さんにも手伝ってもらいながら記録として活字化するようなことも行ってまして、そういう体験を伝えるっていうだけじゃなくて、資料も伝えていくっていう活動をやっているところです。

語り継ぐ会はもともと 10 人ぐらいで最初 2018 年に始めた会なんですけど、現在は会員

が 62 人ということで、この 5 回の集いをする中でいろいろな人が集まってきたということになります。それから今年に入ってから副代表の﨑山さんを中心に月 1 回語り継ぐ会っていうのを、また別途行ってまして。これは主に﨑山さんとか、体験者の人たちに来てもらって、子世代の皆さんに体験を直接伝えていくっていう活動も今やってるとこです。っていうことでちょっと細々ではあるんですけど、いろんな語り継ぐ活動を高知のほうでは展開しているということになります。それでそうですね ということでやっております。

それに関連して、僕が今事務局長をなぜやってるのかっていう話も、少し長くなって申し訳ないんですけどさせていただこうと思ってまして。先ほど山崎さん、僕の 1 歳年下で僕は 39 で、山崎さん 38 なんですけど。いわゆる孫世代になります。山崎さんは大学生の時に、おばあさんから戦争体験を非常に詳しく聞かれたっていうふうにおっしゃってたんですけど、僕の場合も大学時代に戦争体験者の方々に 200 人ぐらい聞き取りをしたりしていたんです。一方で自分の祖父が日中戦争のときに南京の周辺に行ってまして、その後 終戦は朝鮮で迎えるんですけど、僕が戦争体験についていろんな聞き取りをしていたにもかかわらず、うちの祖父は僕に全く戦争のことをしゃべらなかったし、しゃべりたくないっていうことで、聞けなかったんですね。その後、僕は新聞社のほうに入りまして、いろいろ取材をしていたんですけど、そうしているうちに祖父が交通事故に遭ってしまって、それで亡くなってしまって。僕は結局、自分が戦争体験、いろんな人の体験を聞いていたのに、自分の親族の体験を、戦争体験を聞くことができなかったっていうことで。そういう戦争の体験を記録しておくってこと、伝えておくってことがすごく大事だっていうことを実感して、今 この活動をしている孫世代の一人なんですけど。また、直接聞けた人たちとはまた違う思いで活動しているメンバーでもあります。

ちょっと僕の思いを、まず少し話させていただいたんですけど、報告者じゃなかった小野さんにまず今語り継ぐ活動をしているっていうことを、どういうふうに考えられているかとか、思いとかっていうものを聞かせていただけたらと思います。小野さんよろしくお願いします。

小野： 小野由美子と申します。37 年間小学校の教師をしておりまして、母とは 25 年前ぐらいから同居をしておりまして。一緒に暮らしておりますが、小さな頃から母からは中国での話はよく聞いていたのですが、あまり頭に残っていないというか、聞き流してふーんっていう感じでずっと終わってたんです。教師になったっていうこともあって、いろいろ聞くような形にはなってたんですけど。

大きな転機は、2021 年に行った王希奇（ワンシーチー）さんという中国の画家の方が描かれた、大きな引き揚げの、日本人が引き揚げてくる様子を描いた「一九四六」という絵があるんですけど、その一九四六展をしたことが、私の中では大きなきっかけになりました。実行委員会形式で行って、その中で学習コーナーを作ろう。その絵だけの展示ではなくて満洲とは一体どういうものだったのか、この絵はどういうことを意味しているのか、そういうことも含めて学習コーナーを作ろうということで、実行委員会の中でも大変論議をして

文章の一言一言についても吟味をしてコーナーを作っていきました。その中で私も母から聞いてていろいろ知っていたこともあったけれども、新たに日本史を全然しっかり学習できてなかったなと思うところとかありまして。その「一九四六」展が私の中では大きなきっかけになりました。

母のいろいろ満州会とか、いろんなことをしている時には、サポートをしたりもしていたんですが、いつでもどこかでサポートという方で、私も中に入ってするという思いがあまりなかったので、真剣に聞いていなかった部分もあるんですけれども。その「一九四六」展から、あと今年の6月に先ほど岡田さんの写真にもありましたけど、母と一緒に母の生まれた満洲へ旅行に行ってきました。その中でいろいろなことを母から話を聞いていって、点と点とだったものが、線につながっていくというか、そういう感覚でこういうことだったのかとか 。今の中国は母がいた頃よりもずいぶん大きな町になっていて、本当に見る影もないところはあったんだろうとは思いますけれども、母が生まれた病院がそのまま残っていたり 、母の父、私の祖父が働いていた満鉄の炭鉱事務所があったり。私の祖父の思いを思い浮かべたりしながら、とてもいい旅ができました。その点だったものが、線となってつながっていく中でも、やっぱり日本の歴史をしっかり勉強しておかないと、語り継いでいくということはなかなか難しいということも、自分の中ですごく出てきて。

自分が教師であったけれども、やっぱり6年生とかで歴史を学ぶ時に、満洲のことってほとんど小学校の中ではもちろんですけど、触れることが少ないんですね。中学校、高校でも教科書を見ても本当に1ページの中に少しある、満州事変のことが書かれているだけ とかいうことなので。やっぱり満洲とはどういうことだったのか、日本がどういう思いで 満洲という国を作ったのか。それから母が体験した風船爆弾になる風船の部分を、気球の部分を学徒動員で作っていたんですね。そんなことなんかも、母しか知らない、知り得ない体験のことなんかもしっかり伝えていきたいっていう思いになって。一緒に活動していく、今は母も元気でいてくれますので、母と一緒にそういう活動をしていきたいなと思っています。

楠瀬：ありがとうございました。続いて織田さんの方からご自身の活動とその活動をしている思いを聞かせていただけたらと思います。

織田：皆さんこんにちは。紹介していただきました織田と申します。私は6年前まで満蒙開拓青少年義勇軍のことについては全く知りませんでした。言葉が長いのでこれからじゃ義勇軍と略してお話しさせていただきます。私が義勇軍のことを知るきっかけは、今から6年前、父の遺品の中に風呂敷に包んだ写真集がありました。その表紙を開くと、昭和14年度第2次満蒙開拓青少年義勇軍、大和鎮青年義勇隊開拓団第三中隊写真集と書いてありましたが、生前父から聞いたことがなかったので、何でこんな写真集が残っているんだろうと不思議に思いました。私は義勇軍のことは何も知らなかったので、まず疑問に思ったのは安芸の山の中の生まれの父が、何で義勇軍のことを知ったのか、とても不思議に思いました。そして調べていくと、当時の学校の教育というか、文部省から学校に対して義勇軍応募者を一人でも多く増やすように、先生たちに圧力がかけられて。学校の先生の影響が大きかった

ということが分かりました。多分父は学校の先生から義勇軍のことを聞いて、自分から進んでいったんじゃないかと想像しました。

そして義勇軍って一体何だろうか。それも知りたくなって、県庁に何か資料がないだろうかと問い合わせをすると、県の方には何も義勇軍に関する資料はないという返事でした。私はその言葉を聞いて、高知からは 1331 人の義勇軍が送り出されているのに、県に何も資料がないっていうことは、じゃあ高知県から義勇軍という存在が消されているんじゃないかとすごくショックに思いました。そしていろいろ調べていく中で、私の手元にたくさんの資料が残りましたので、じゃあこれを記録として残そうと思って、2021 年に先ほど楠瀬さんから紹介していただいた本を自費出版することにしました。

そして皆さん、義勇軍って何だか知っていますか。まず簡単に説明しますと、日本が中国東北部を支配するために作った傀儡国家、満洲国を隣国のソ連からの侵略を防ぐために、守るために兵士として日本人を派遣し、普段は農業を営み、いざ戦争が始まると軍隊として戦うという昔の屯田兵制度と同じような目的で昭和 13 年から派遣されました。農家の次男、三男たちを中心に数え年 15 歳から 19 歳までの青少年たち 8 万 6530 人のことを義勇軍と言うそうです。そして 2 万人以上の少年たちが死亡しています。15 歳といえば今の中学 2 年生です。そんな幼い少年たちが、古里や親を捨てて夢や希望を抱いて満洲に渡っていったのに、そこに行ってみれば過酷な飢餓や荒野の厳しい生活環境の中で、訓練所に入れられ自由のない訓練生として生きていかなければならなかったという。想像を絶する過酷な生活体験を書かれている多くの体験者の手記を、本当に心が痛み、凍りつく思いで読ませていただきました。でも義勇軍の実態を多くの人に語り継いでいかなければ、何も皆さんには知っていただくことができません。何も語らなかった父に代わって、義勇軍のことを語り継いでいくことが、（資料を）公表した私の責任だと思っています。それには過去の歴史や当時の社会背景など多くのことを知っていなければ、正しく伝えられないので、今もコツコツと資料を集めたり、読んだりしています。

今日の会の主催である「満洲の歴史を語り継ぐ高知の会」で 昨年、義勇軍と高知と題して講演させていただきました。そして今年 7 月に資料集として、本を発行させていただきました。その後、この会の一員としてお手伝いさせてもらっています。今後の予定としまして 10 月に国立公文書館に請求してあった高知県関係の開拓団の資料のコピーが 100 枚以上届きましたので、これから 1、2 年かけて整理をしていく予定です。これからも自分のできる範囲で義勇軍のことを語り継いで、訴えていくことが、私の老後の生き甲斐となっています。頑張っていきたいと思っています。以上です、ありがとうございました。

楠瀬：織田さん、ありがとうございます。続いて岡田さん、先ほどは伯父さんとか親族の話をされたんですけど、ご自分のことはあまりお話しされなかったので、ご自身の語り継ぐ活動について少し補足で話していただけたらと思います。

岡田：先ほどの話の中で 私の母のことは一言も語らなかったんですけれども、実はやっぱり娘時代に非常に残酷なシーンとか、死体を山ほど見た関係で、帰ってきて　ちょっと今で

言うPTSDみたいなのを患ってしまいまして。そういうことはあんまり自慢にもならないし、人に言ったことはなかったんですけれども。今年の朝日新聞さんに「PTSD と帰還兵」という記事が載っておりまして、やっぱり全国にはお父さんが帰ってきて虐待するとか、アル中で苦しんでおられる方がたくさんおられて、なかなかそれが語られないし、子にもスポットを当てないということで。そういう運動が広がっていることを知って、(PTSDの日本兵家族会・寄り添う市民の会の証言会が行われた) 武蔵村山市まで馳せ参じたんですけれども。やっぱり日本の戦争を防いできた末に、虐待とか家庭内暴力または引きこもりという現象が、もしかしたら戦争というものをきちっと検証してこなかった、語られなかったことに 芯があるかもしれないという話を聞いて。私は本当に、それが私の中でヒットしたので これは戦争を語る上で、心を置き去りにしてはいけないと。もうズタズタにされて、今なお虐待とかそういう連鎖で苦しんでいらっしゃる方の気持ちというものをどこかで何か吐き出すとか、語り合うっていうことが大切ではないかなというふうに。私に何ができるのかは分からないですけれども、そんなふうに思っております。

楠瀬：ちょっと補足させていただくと、僕が話すのも何なんですけど、岡田さんのお母さんは帰ってこられてから結婚されて岡田さんを出産されるわけなんですけど、ちょっとそこら辺りの話も。

岡田：はい、本当に無気力というか、体が動かないというか。祖父母というか私の母の両親が心配して、いろんな施設とか道場に通ったんですけれども、今のように精神科の医学が発達しているわけではなく。なかなかもう何もできない、何もする気力がない状態で、両親が面倒見てたんですけれども。このまま私たちが年をいっては大変なことになると思って、うちの祖母が結婚させようと。その代わりに養子を迎えて私たちが面倒見るからということで、6人兄弟の5男である私の父が養子に入ったんですけれども。私は物心をついたときには、祖父母のもとにおりましたので、あまり両親に対していい思いというのがなくて。非常にそれが劣等感でもあったし、自分自身が自我を形成するときに非常に苦しんだというか難しかったというか。普通の家庭というものが羨ましかったですし、なかなか私なみにですけどちょっと苦しみました。それが良かったのか悪かったのかは分からないですけれども、私という人間がこの世に生まれたのはそういう事情でしたけれども。やっぱり母は子育てとか家事というのが非常に難しい、生涯難しい人間でしたので。私ももしかしたら子どもたちにそういうふうなことをしてしまうのではないか、あるいはしてしまった時に、非常に自分がまた親と同じことをしているということで苦しんだりもしました。

楠瀬：岡田さんのこの活動へのきっかけというのは、実は高知地域資料保存ネットワークの方で、岡田さんのお家にある伊野部家資料という資料を調査したときに、満洲関係の資料がたくさん出てきまして。一つの資料が語り継ぐ活動のきっかけになったという理解でいいですかね。ということで、岡田さんの場合も織田さんと類似していて、資料を通して満洲のことを知るっていうことが、一つのきっかけになったというのがあると思います。

最後になるんですけど 山崎さんの方からこういう活動をすることになったきっかけと

かいうのをお話しいただけたらありがたいです。

山崎 : はい。自分でどういうきっかけだったのかなと思い出したんですけど。直接のきっかけとしては大学生の時に、後輩とある夏の夜ですね。結構話が盛り上がった時に、ふと私が自分がここにいるルーツというか、バックグラウンド、歴史のつながった、そういう背景があるんだよって話をした時にですね。その後輩が、それって日本人みんな戦争の被害を受けてるから、それ山崎さんのおばあちゃん大変だったって言うけど、みんな同じじゃないですかっていうふうに言われたんですね。みんな等しくその日本では被害を受けているから、別に山崎さんのおばあちゃんだけが特別な経験したわけじゃないでしょって言われた時に。なんかそれがその満洲に残留した、中国に残留したことで、経てきたその歴史っていうところをうまく伝えられなかったんですね。中国に残った、そこで何が祖母の体験に、何を経験したのかってことをその時に伝えられなくて。自分できちっと祖母の経験を話したいなと思ったんですね。それと同時に中国残留っていう歴史について、もうちょっと理解をしたいと思ったのがそもそもきっかけでありました。

これをきっかけにしてですね。いろんな過去のことを思い出したんです。そうするとさっき講話の中で、富士山の標高が分からなかったっていうところを出したんですけど。祖母は日本語と中国語を話せて、でも私の両親は日本語があまりうまくできなくて。ほとんど中国語で私は育てられたんですね。母方の実家がまだ中国にあるというかなんですけど。母方の実家に母の里帰りについて行くと、やっぱりおじいちゃんおばあちゃん、基本的に中国語なんですけど。でもおじいちゃんはなぜかちょっと日本語がしゃべれたりするんです。何でかって聞いたら、ちょっと満鉄で働いたっていうことを言ってて。親族が、中国、日本にいて、誰が日本語を話せて、誰が中国語を話せてっていうのが、全くそれを理解できなかったんですね。

でもいろいろ資料とかを読んで勉強とかをしていくうちに、なるほどと。小野さん先ほど点と点がっていうことをおっしゃっていたと思うんですけど、私もいろいろ知っていくうちに、自分につながる歴史っていうのが、断片的だったものがだんだんと線になっていく感覚っていうのが非常にあったんですね。資料とか当たっていくうちに残留孤児の孫、残留夫人の孫とも出会うことがこれまでたくさんありまして。彼らに話を聞くと、本当は聞きたかったけど亡くなってしまったとか。楠瀬さんがさっきおっしゃってましたけど。聞きたいと思ったけど既に亡くなっていたとか。あとはおじいちゃん、おばあちゃんは一番得意な言葉が中国語で、自分は日本語だから継承できないと。聞きたかったけど聞けない、聞きたいけど聞けないっていうことを結構言う三世が非常に多くて。これってまだまだ続いてる歴史なのに、当事者においても継承が難しくなっていて。日本社会においてもおそらく満洲につながる歴史っていうのが、記憶が薄れてきてるという中で、私は何とか滑り込みでそこのお話を聞けたので。これを伝えていくことによって、まだまだ満洲に残った日本人の歴史っていうのが、現在進行形のものとして子や孫、そのまたひ孫においてもまだまだ続いてるっていうことを伝えていきたいなという思いで、今もやっている次第です、託したいです。

楠瀬 : 山崎さん、ご自身で語り部ということでやっていることに加えて、ご研究でも満洲のこととか、残留孤児のことをやられていると思うんですけど、ご研究をやることになったきっかけとか。ちょっとそこまで踏み込んでいいかどうか分からないですけど、もしお話できることがあったらぜひ。

山崎 : 私、今大学院の博士課程で中国残留孤児、残留婦人の孫がどう生きてきたかっていう研究をしてるんですね。それを始めようと思ったのが、中国残留孤児、残留婦人の学術研究ってだいたい二世で止まっている。三世から下の世代になると、あまり私がこれまで見てきた時って薄かったんですね。私は自分の歴史を知りたいと思って、学術書に当たるんですけど、よし自分の番だってこう見ると、一世、二世までは非常に豊穣な記述があるんですけど、三世になるとピタッて止まっていることが多くて。これは何でかなって思ったのが、そもそもきっかけなんですね。私自身はこれ振り返ると、自分が祖母の孫であるっていうことが多分人生の方向性というか、構造づけられてきたっていうことがすごく多かったので。これは他の三世も同じような祖母、祖父の歴史を引き継いで生きているだろうと。しかしながら日本社会で残留孤児、婦人の孫の世代、孫の姿がなかなか見えてこないのは何でだろうということで、全国の三世に話を聞いて、どういう人生を送ってきたのかっていうことを今研究しています。

楠瀬 : ありがとうございます。ちょっと僕も含めて 5 人の話がそれぞれ出てきたと思うんですけど。いろんな整理の仕方があると思うんですけど、少し整理すると、小野さんの場合はお母さんから結構話は聞けた。それが一歩踏み出すきっかけっていうのは一つあったっていうことでした。織田さんとか岡田さんとか僕とかは、そんなに強く聞けたわけじゃないけど、歴史や歴史資料と体験、自分の体験、人から聞いた人の体験とか体験っていうものが結びついて語り継ぐ活動へと進んでいったっていうのがあるかなと思います。山崎さんの場合も滑り込みで聞くことができたっていうのもまた一つの類型というか、一つのそういうタイプもあったのかなと思うんです。加藤先生、今まで前半も含めて聞いてもらっての感想とか、コメントを少しいただけたら。すみません、すごい一気に振ってしまっていますけど 、お願いできたらありがたいです

加藤 : かなり難しいですね。こういった形で語り継いでいくっていうのは、地域によって語り継ぎ方もありますので、それぞれの地域性があって然るべきだと思うし。こうでなければいけないというやり方もないと思います。高知県の場合、こういった特にね。こういう形でされてるってこと随分前からお付き合いありますが、改めて感心しますし。やるたびに人が増えてるっていうことは、やるたびにメンバーが増えててすごいなというかですね。特に子供とかね、次の世代まで、孫までいけるかどうかは分からないですけど、そこまで見据えて活動されてるってことは、なかなか他では見られないことなので、ぜひ続けていただきたいと思っております。

今回はむしろですね。山崎さんみたいな、東京でやってる今語り部のですね。そこのスポンサーじゃなくて広告主じゃないですけど。宣伝の方で、ちょっと私来たようなところもあ

りまして。要するに語り継いでいくということをですね、むしろ語り部って言っていますけど、語り継ぎ部というふうに正確に言うとそういうことです。それをやっていこうということで進めておりまして。ただその中で、どういう語り方をすべきかっていう中でですね。要するに、聞いたことをそのまま淡々と言うということなんですね。余計な解釈を入れないという、そこで例えばちょっとドラマチックにしちゃうとかですね。あとあたかも当事者であるかのように喋るとかいうこともしないと。あくまでも聞いた。私はこういうふうに聞いたっていうのを話すという。その当事者のように喋るんじゃなくて、当事者からこういう話を聞きました。僕は偶然に何かの縁でたまたま聞いちゃった。そのたまたま聞いちゃった話がとても心にどんどん残ってしまって、それを誰かに伝えたい。人間ってどこかにそういうのがあって、強烈な話か何か自分の中にインパクトを与えられるような話を聞いた時って、誰かに喋りたくなっちゃう。その気持ちを大切にして、語り継いでいきましょうというやり方でやっております。

ただ、もう一つその中で気をつけなければいけないことは。とはいっても、何にも知らないというのは。要するに、ある程度の知識というのは重要で、何にも知識なくてしゃべっていくということは非常に危険だし、危なっかしいんですね。やっぱり最初から完璧ではなくても、常に背景とかですね、いろいろな歴史というものをきちんと学んでいこう、知っていこうというスタイルをとっております。ですから、大学の講義みたいなこともやりながら、要するに体験者の話を聞いて、また講義みたいなことをやって、知識の確認をしてというようなことを、何度か何度か繰り返しながら、こういう形で人様の前でお話をするというようにしております。

あとは、皆さんの中で話を聞かれたときにですね。要するに、語り方としてはこういうことだということで、皆さんはそれを聞いた上でですね。考えてほしいということであります。要するに、こんなことがあったのか、ありがとうというか、知識を知ったというのではなくて、その話を聞いて、皆さん方がその話を聞いたときにどう考えるか、考えてほしいという、考えるきっかけを与えていこうというのが、本来の語り継ぐ形ではないかなと。単なる知識だけを語り継いでいくのではなくて、それを聞いた人がまた今度は新しく考えていく、考えた結果をまた誰かに話すということ。考えるということがとても大事だと思います。歴史を知るということが大事ではなくて、実は歴史というのは考えることであって、こんなことを知らなかった。こんなことを知らなかった。私たちは何か知らなかったではなくて、そういった事象の中で自分はどう考えるかということの方を大切にしたいと思っていますので。

それが今日、今の社会を生きるためにも必要だし、自分たちは何も知らなかったじゃなくて、 与えられた情報の範囲内で何かを考えていくという。そうすることによって、後で何かとんでもないことが起こったとしても、自分たちは知らなかったから騙されたんだとか、そういう話ではなくて、考えたすえに間違っていたということだったら、間違っていたら直せるということですね。人間というのは結局、僕はどちらかというと人間というのは完璧ではございませんので、必ず間違える。要するに間違えたということを納得して直せばいいわ

けで、 ただ単に知らなかった、騙されたと言うんだと、結局何も考えずに同じような間違いを繰り返してしまいますから。戦争についてもこういった話を聞く中で、知らなかったというだけではなくて、考えてほしいというか。自分だったらどうするのかとかですね。そこまで深く歴史を考えていただきたいなと思っています。それは満洲だけではなくて、他のところでも同じです。ですから満洲だけは特殊でもないけれども、かといって満洲の歴史というのは無駄でもないし、やっぱりそういった歴史というものの中から皆さんが考えていく、きっかけというかヒントというのは、ある部分では満洲の歴史というのはそういう点ではいっぱいありますので。こういう活動を通して皆さん持ち帰っていただけるかなと思っております。そういったことを改めて再確認したというかですね、今回はそういう場になったと思います。

楠瀬：先生ありがとうございます。皆さんに質問を受ける前に、今後のことを少し話しておきたいなと思っていまして。加藤先生からも少しあったように、孫世代にどういうふうにつないでいけるかということが少しあったと思います。ここに挙がっている高知県の語り継ぐ会というのは、実は子世代の人と体験者世代とのその二世代で展開されている活動だと思うんですけど。実は先ほど出た「一九四六」展。葫蘆島（コロトウ）からの引き揚げの絵画を展示する展示企画のときに、ちょっと孫世代に活動がつながったことがありまして、ちょっとその話を少ししてみたいなと思います。

やっぱり戦争を直接聞けない世代というのが昔に比べてあまりにも増えてまして、若い世代の戦争への関心というのは決して高くないというのが実感としてあります。それは満洲となるとさらにもっと少なくなっていくと思うんですけど。その中で 2021 年に「かるぽーと」で「一九四六」展が行われる前に、語り継ぐ会の活動の中で、高知大学の先生を通じて、満洲移民の体験者の証言のテープ起こしを、当時の大学 3 年生の 2 人、東洋史を専攻している学生さんと日本経済史を専攻している学生さんの 2 人に、ビデオとテープを聞いてもらって、それをテープ起こししてもらうという作業をしました。その中で学生さんがすごく満洲のことに、おじいさんとかおばあさんが戦争体験を聞いていたということもあって、すごく関心を持ってもらいまして。それがきっかけで 2021 年に行われた「一九四六」展のときに、 学生実行委員会ということで、自分たちが体験をテープ起こしする中でもっと学ばないといけないということを考えて、読んだ書籍のことであったりとか、研究論文の話なんかを分かりやすく SNS で若い人たち、同世代の人たちに伝えるという活動をしてくれました。当然その間はいろんな活動をしてくれたんですけど、大学を卒業してからもつながりというのはあるんですけど。やっぱり社会人になっちゃうと、そういうことが学生のときはできても続かないということではあったんですけど。一つの語り継ぐ活動を通して、それが孫世代につながったという瞬間があったのかなというふうに思ってます。

その中で皆さんにもう一回振りたいんですけど、ご自身たちが次の世代とか周りの人たちにどういうふうに伝えていくかということについて、ちょっとどういうようなお考えとかがあるかということを、小野さんから少し短くていいのでお話しいただけたらありがた

いです。

小野：先ほどの高知大学の学生さんたちとも卒業して連絡取り合っていますけど、やっぱり同じような活動ができないにしてもすごく考えてくれている。先ほど加藤先生がおっしゃいましたけど、考えてくれている、それから友達たちにそういうことを話してどう思うとかっていうことを伝えてくれていることは、すごくありがたいことだなと思っています。

私自身は教師をしていたということもあって、学校の先生たちに教職員研修とかそういう場でこういう話を伝える場があればなと。若い先生たちの中には、それこそ満洲のこととか知らない若い先生たちも増えていると思うので。やっぱり教える側の教師がいろんなことを学んで、知って、考えて、それをどこまで伝えるかというのは、小学生とか中学生とか高校生とか、相手によって変わってくるとは思うんですけど。まずは知る、そして考えていくことにつながるような活動ができたらいいなと思っています。12 月 11 日に退職教職員の会で、私が中国旅行のお話をさせていただくことになっているんですが、それは退職した先生方なので、子・孫世代とは違うけれども、そういう形で学校関係の方々なんかに伝えていけたらなと思っています。

楠瀬：織田さんは本とか講演とかを通じて既に語り継ぐっていうことをいろんな人にされてると思うんですけど。そのことと、あとご自身の親族とかに伝えていくっていうことを、今どういうふうに考えられていますか。資料もお家にあるっていうことなんですけど、ちょっとお話いただけたら。

織田：そうですね。親族に対しては、私息子に本を読んでもらったんですけども、感想どうやったって聞くと。うん、まあまあ、わかったっていう、なんか掴みどころない、もっとちゃんとした答えが欲しかったんですが。私と離れてるので、電話で聞いたので、どこまで伝わってるのかちょっと私もわからないところであります。それから親族、私のいとことかには本を渡して、「まあ、おんちゃんこんな過去があったがや」って。「そんなことを知らなかった」ってみんなびっくりしてて。もちろん娘の私が知らないことだったから、知るわけはないですけど。なんか改めて私の父のことを、再発見じゃないですけど。「まあおんちゃん大変なことしたがよね」っていうような話ももらったので。私自身、本当に父は「墓場まで持って行く」って隣の人に聞いて。いや私父が墓場まで持って行ったものを掘り起こして、こんなに本にして公表して、本当によかったんだろうかって、最初はずいぶん悩みましたけど。まあそういう反応があって、やっぱり伝えないとわからない。父の写真集がなかったら、まず私も知らないし、私の身内も知らないし、父のことは闇のままたぶん過ごしたのが、私が掘り起こしたために、父の辛い過去のこともわかってもらえたし。それはそれで父はどう言ってるかわからないけども。

私自身はこれからも公表した以上、責任を持ってこれからもきちっと伝えていかないといけないということで。それにはさっき楠瀬さんが言ったように、自分自身がやっぱり、そういう社会的な背景とか、何を知らないと正しく伝えられないということがあるので。今はいろんな人のつてを頼って資料を集めて。楠瀬さんも先ほど言ってくれたように、新聞記事

からも貴重な証言が得られましたし。それから国立公文書館からも貴重なコピーが今手元に届いていますので。私としては語り継ぐというよりも、高知県に資料がないので、自分ができるだけ少しでもその資料集めをして、記録として残していきたい。それが私の今の願いです。以上です。

楠瀬：ありがとうございました。ちょっと岡田さんも。もう少し。

岡田：私は今日が初デビューで、一主婦としては本を配っていつでも私話しに行くきねって言ったわりには、誰も話が聞きたいとは言ってもらえないですけれども、お声が掛かればいつでもどこでも話をするつもりです。 パワーポイントを使うのに、うちの息子を捕まえては教えて教えてと言ったので。そこそこ息子は何をしているのか知っているのと、今日はそれが気になって、夫と息子がここの会場に来てくれていますので。それが少しだけ伝わっているのかなというところです。

楠瀬：ありがとうございます。 山崎さんも先ほど少し話されたんですけれども、孫世代とかの人たちと話す中で、伝えていくことの課題とかは何か考えられていたら、ちょっとお話いただけたら。

山崎：そうですね。 課題としては、残留孤児・残留婦人の孫世代もやっぱり興味がないという人たちがすごく多いのですね。 やっぱりちょっと遠い、おじいちゃん、おばあちゃんだと距離があるので。そこの世代の歴史を知らなくても直接的な影響はないということで、特に知ろうと思うことはないんですという人は結構いるんですね。 反面、例えば私が大学とかにこの語り部で行かせていただくと、学生の皆さんから、自分の今までの人生振り返って、おじいちゃんおばあちゃんの経験って、そもそも戦争を経験してなくてもしてても、聞いたことがないということに気づきました。それって今、今日山崎さんの話を聞いて、なんで自分は今までおじいちゃん、おばあちゃんの歴史を知らなかったんだろうと思ったということを言われたことがあって。多分そういったところにつながっていけばいいのかなというところはすごく思っています。多分満洲ということに対する興味が薄れているというのはやっぱり事実としてあって。満洲というものとの自分との関連性が薄い人たちが、いろいろ人数が増えていくと、中でも形式というか、おじいちゃん、おばあちゃんの話を知ることで自分につながるその線を知ることができるということは、どんな歴史を経てたのかというのは、多分自分を知ることにもなると思うので、それは豊かな人生につながっていくと思うんですよね。

NHK のファミリーストーリーって私もすごく好きで見るんですけど。人の歴史を全然関係ない、他人の歴史を見ているだけでもすごく面白いのって、人間ってこういうふうにつながってこの人にたどり着いているんだなというのは。多分人の人生を聞くだけでも「なるほど」と思いますし。多分それが自分となると、より「なるほど」というふうになると思うので。過去にあった大きな歴史的な事項から距離はあったとしても、自分につながる一世代前、二世代前の話を知ることで、自分の歴史を、自分の存在を知るということにつながっていけばいいのかなというふうに今は考えています

楠瀬：ありがとうございます。加藤先生、語り継ぎ部の事業というのをやられていますけど、そこのターゲットというのはやっぱりどっちかというと、孫世代とか次の世代へということも考えられているのでしょうか。

加藤：本当はそういう例でいいんですけど、聞きたいという人はどうしても年齢層が高くなっちゃうというのがあるんですね。ただ私もいろんなところで市民講座とかをやっても、聞きに来る人は割と年をいった人たちというかですね。歴史に興味があるというのは大体若い人が興味があるというより、大体社会をリタイアした人がですね、振り返って急に目覚めちゃう人が圧倒的に多いので。それはそれで僕はいいと思うんですね。今興味のない若い人でもそのうち社会に出て、すごく忙しくてそんなことなんて考えてられないなと思って。でもそういう人もいつか定年が来ますので。そうするとリタイアすると、急に歴史に目覚めちゃうという。大体みんな人間ってそういうパターンたどります。だから必ず断絶するってことはないと思うんですね。

ただ大事なことはそんな細かく言わなくても、僕も子供の時代の時の思い出というか考えても。例えば学校でもですね。先生が何気なく僕はまだ小学校の時は、戦争体験者の人たちがまだゴロゴロしてた時代でしたので。学校の先生もですね。実際に戦争に行ってきたとかいう先生もまだうちの学校にいたんですね。そういう人たちが授業の合間合間にポロポロと話したことっていうのは、なぜか覚えてるんですね。要するに子供の場合ってそんな体系的にバーッと喋らなくても、ほんのちょびっとだけ喋るだけでもなんとなく覚えてて。それが大人になった時にふと思い出して、なんか「あれっ」ていう気づきになることがたまにあるんですね。ですから子供の時からこんなに教えて、「ずっとそれを語り継いでいってね」とか言っても。「大人になっても社会に出ても、もうそのまま忘れずにこの活動を続けていってね」っていうのは、僕の話で一旦断絶してもいつかは思い出してくれるんじゃないかなという気が私はしています。だからむしろ頭の柔らかい小学生ぐらいには断片的でもいいからちょっとポコポコと球を投げておくと、それが種になっていつか芽吹くんじゃないかなという気はしております。

楠瀬：ありがとうございます。語り継ぐ会としましても、今その子世代の人たちを中心にいろいろ活動が広がっているところはあるんですけど、今後次の世代っていうこともちょっとまた考えながら活動をしていけたらなと思っているところで。今日のこのシンポジウムですごくいろんな示唆をいただいたところで、また会員の皆さんともいろいろ議論していけたらなと思ってます

あと 10 分ぐらいあるので、ちょっと会場の方からまた質問とかご意見がありましたらぜひお願いできたらと思うんですけど。挙手をしていただけたら。感想みたいなことでも構いませんので、ぜひお願いします。

大野正夫：山崎さんのお話を聞きましてね。山崎さんのおばあさんが長春（新京）で収容所に入って、帰ってきてらお母さんの弟もいなかったという話がきましたね。収容所はもしかしたら敷島収容所って言って。実はその前に女学校は敷島高等女学校があったんですよ。

その前には敷島収容所があって、そこにいっぱい開拓団の方がいて、どんどん亡くなって、すぐに発疹チブスが流行ってですね。それでお母さんは亡くなったかもしれません。あとね、そこに来た子どもたちを、中国人がね、非常にもらいに来たらしいんですよ。日本人は頭がいいって、可愛らしいって言うんでね。かなりの中国人の方が、かなり豊かな方がね、もらいに来たと言うんで。もしかしたら弟さんはもらわれていったと思いますね。それでお母さんが生きてるんじゃないかと。ただ、そういうことを知ってる人はね、たぶん弟は連れ去られたというか、引き取られたと思っていたんじゃないかと思うんですね。そういうことを感じました。だからお母さんがずっと思ってるのは、そういうことじゃないかなと思っているんですね。もし病気で死ぬか生きるか、たぶん元気だったと思うんですね。子どもですからね。そういう感じがしました。

もう一つ、チフスと言いますと、奉天でチフスが流行ったといったのは、発疹チブスなんですね。いろいろありますね。やはり新京の収容所でどんどんどんどん亡くなっていたって話を聞いております。 僕も瀋陽にいていましたので。ということで、思いつきですけども。

山崎：ありがとうございます。ドラマの大地の子で。ちょっと記憶違いだとあれなんですけど、主人公が自分の妹さんと対面したときに、お兄ちゃん誰っていうふうなシーンがあったと思うんですよね。たぶんそれと似たような可能性もうちがあったんじゃないのかなとたまに思いますね。本人が日本人だということをもしかしたら忘れてというか、周りに知らされずそのまま成長して、一般の中国人として亡くなっていたか。今も生きているかわからないですけど、そういった可能性もあったんじゃないのかなというのは、大地の子を見て思うところではありました。

祖母が、厚生労働省に自分の家族どうなったんだということを一応問い合わせたことがありまして。山崎さんの家は 3 人とも、あなたの父、母、弟は葫蘆島で 3 人亡くなりましたという形で、公式に残っているものを省からもらったんですけども。祖母はそれはちょっと受け入れがたいと。それは国としてそう残っているかもしれないけれども、本当はどうだったかというのは、私は最後までそれが本当か、または何だったのかというのを知りたいというふうにずっと言っていたので。あのときに、加藤先生の最初のお話でもありましたけれども、資料がほとんど残っていない中で、個人が最後まで思いを強くして親族を思い続けたというのは、うちの家族、親族だけじゃなく多くの残留孤児、残留婦人の方々にあったと思いますので。こういったことも日本史の一つとして、世界史の一つとして語り継いでいきたいなというふうに思っております。

鈴木宏毅：仙台から参りました鈴木と申します。最初に私の背景といいますか、私自身のこと若干お話をさせていただいてその後お考えをお聞かせいただければありがたいというふうに思っております。 私は 2 歳 5 か月で、5 人の我々兄弟を引き連れて、両親が満洲、ハルピンから引き上げてまいりました。それまでしたがって、その後、父親ももちろんのことですけれども、母親もほとんど話してはくれませんでした。当時のこと。もちろん満洲から引き揚げてきたということは聞いてはいましたけれども、そういう詳しい話は知らなかっ

たということですね。 昭和 51 年に母親が癌で亡くなる直前。今と違って当時の病人の扱い方というのは、我々兄弟、子供たちがいろいろ世話をしておって、病院で寝泊まりをしながら母親を看病しておった。その時に母親が苦し紛れに異常な感覚で、当時の引き揚げの状況、あるいは満洲、ハルピンでの生活の状況、いろいろ詳しく話してくれました。そこで初めて私自身がこういう世界があったのか、自分自身にも。しかし残念ながら、それをどういうふうに自分のこととして、自分の周りの人たち、あるいは私自身も高校の教員をやっておりましたので、やはりついていかなきゃならないのかなと言いながらも、結局は語らず、そのまま時間が尽きなくなりました。 ちょうどその後、自分自身が退職をして、ようやく先ほど加藤先生がおっしゃられたように、ようやく自分の歴史を振り返って、これじゃ駄目だというので、回想記を書かせていただきました。

そういう中で、いよいよ自分自身がそういう世界を、私らの下の世代にしていくためにはどういう努力が必要かということで、いろんな活動をさせていただきました。その中で一番強い、私自身のきっかけといいますか、こういう活動をさらに引っ張っていきたいというふうな思いになったのは、先ほど小野さんがおっしゃいました「一九四六」に関わる内容でございます。 宮城県では 2019 年に初めて実行委員会を作りましたが、そこで「一九四六」展をさせていただきました。その時の印象が、非常な印象として残っておりますのは、もちろんお年を召した方々、あるいは経験者の方々がご覧になるということはもちろんなんですけれども、若い子どもたちがどういうふうにしてこれに接することができるようになるかということで、実行委員会で相当な議論をしまして。最終的にはなかなか単なる来てちょうだいと言うだけじゃいけませんので、ある学校の先生を介して高校の方にアタックをして、ようやく高校から何人か。あるいはちょうどその美術館の近くに高校がありましたので、そこに挨拶に行った時にも高校生の何人かが見にきてくれました。その時の印象と、そしてなおかつ私自身もそれを一生懸命絵を通して説明すると、子どもたちの必死さを感じ取る、そういう世界を肌で感じ取ったわけです。

そこでお話をちょっとお聞きしたいんですけれども、こういういわゆる語る会といいますか、語り継ぐ会の方策としては、体験とかあるいは資料とか、そういうものなどが大事であろうということももちろん承知の上なんですけれども、それ以上に、あるいはそれと同等に、目でそういう世界を感じ取られるようなチャンスがあれば、これは一つの語り継いでいくには手がかりになるんではないかというふうに思っております。そこで改めて先生の方にお聞きしたいんですけれども、この高知でも体験された「一九四六展」、これを何らかの形で、語り継ぐ会の一つの方策の一つとして、何か手立てはないのかなというふうな思いで若干ご質問させていただいたらと思います。お考えがあればぜひお聞かせいただきたいというふうに思っております。以上です。

小野：今年の 6 月、中国に行った時に王先生にもお会いして、その後の続きの続編の絵を描かれているということでアトリエで見せていただいたんですけれど。「一九四六」は葫蘆島から引き揚げてくるという、葫蘆島の船に乗るまでに並んでいる 500 人ぐらいの日本人を

描いた絵だったんですけれど、続編としては、舞鶴かどこか、福岡か、日本に着いた時の日本人という形で続編みたいな絵を描きたいと思っているということで、同じように大きな絵を見せていただいたんですけれど。幸いといってはなんですけれども、葫蘆島に王先生の一九四六の絵が、引き揚げ記念館が葫蘆島市にできて。そこの目玉として「一九四六」の絵が飾られるということになっていたんですが、このコロナとかいろいろなことで建設が止まっております。ですから絵が今もまだ日本にある状態です。葫蘆島の記念館ができたら中国に返還されてしまうので、日本に絵がある間、全国各地で、高知で「一九四六」展したときも全国各地で 47 都道府県全部で回ってほしいというような感想もあったぐらいのを見るとやっぱりすごく心に響くものがある絵だったので。それが日本にある間に他の都道府県でもしていただけたらなという思いはあります。何件かちょっと母の方にも問い合わせがあったりして、うちの県でもやってみたいけどというような声が上がっているので、そういうことができるのであればご協力はしたいと思っています。

楠瀬：加藤先生いかがでしょうか。 僕が答えましょうか。一応先生の質問に答えとしてあっているかどうかわからないですけど、やっぱり次の世代に伝えていくときにやっぱり大事なのは、僕の言葉で言うとあれなんですけど、可視化というかビジュアルで見せるということなんじゃないかなとは思っています。加藤先生の世代とか僕のときも断片的ではあるんですけど、直接体験者から聞けた世代っていうのは、やっぱり結構直接体験した人から聞くインパクトっていうのはあるんですけど。直接そういう人たちから言葉で聞けなくなったときに、もうちょっと戦争とかっていう時代を生で感じられるようなビジュアルなものっていうのは必要かなというふうなことは思っていて。

語り継ぐ会のほうでもあんまり表にはまだ出してないんですけど、戦争体験の聞き取りをだいぶやってるんですね。それを地図上にですね、Google マップ上に載せていって、あとそれと関連する資料も高知県でかなり満洲関係の資料っていうのはかなり発掘が進んでいて、そういう資料も地図に載せていって、実際にそういう体験を体験とか資料っていうものをもうちょっとビジュアルで見ることができるような。そういうアーカイブ的なものを語り継ぐ活動をする中と同時にそういうものを作っていこうっていう動きもやってるところで。やっぱり若い世代の人はどっちかというとそういうことがきっかけになって考えることになる場合もあると思うので。こういう公の場だけじゃなくて、そういうものが見せれるものがあったらいいなとは。そういう出力ですかね、可視化ができればいいなとは思ってるんですけど、なかなかまだそこまでは行ってないんで。本当に一九四六展みたいに展示とかいう形で見せれたらいいんですけど。なかなかそこら辺りまで大規模なことができないので、その予算がかからんようなやり方でちょっと可視化ができればいいなということは、語り継ぐ会としても考えていて、それは一つの課題でもあるかなというふうに思ってるんですけど、なかなか難しいところではあります。 ちょっと補足はありますか、

加藤：一応答えるんですけど、「一九四六」の絵は最初に日本に来たときに実は東京でやって、そのときにちょっと呼ばれて、集会をやったことがあるんですよね。王さんも来ていた

んですけど、それで一回こっきりで終わると思っていたら妙にあちこちで声がかかるようになって、いつの間にあら全国を循環しているという感じで。あれは最初にかれこれ7年くらい前の話ですから。そんなに日本全国をぐるぐる回っているんだと思うと、逆にちょっと驚きというか、という気がします。ビジュアルしかないので、映像フィルムというのはあるにはあるんですが、実は外国にあるものですから、日本ではそういったものをなかなか見ることができないので。どうしても海外になってしまう。海外の方がより本質を伝えるところでもあるから、伝え方としては非常に良いとは思います、使い方によっては。ただビジュアル以外の伝え方について、若い人にどうやって伝えていくかというのもいろいろとどこでもこういうのがありまして。これ以外に、私も新宿にある平和記念展示資料館の方でも展示の監修もやっているので、常に若い人どうやって集めるんだとか、どうやって訴求するんだとか、どこでも言われているんですね。でもあんまり技術に走っちゃうと、かえって本質からずれてしまうので、やっぱりそこはきちんとした伝えるという中身の問題はやっぱり大事だと思います。

そこはきちんとした上で技術、余力があれば、要するに十分条件として映像を撮って発信するとか、パソコンとかインターネットで発信するとかいったようなことはあくまでもこれは基礎があってこその話ですから。あんまり身の丈に合わないように無理してあんまり迎合しながらやっていくよりも、きちんとした地道な活動を続けていただければなと思っています。

楠瀬：ありがとうございます。 もうそろそろ時間なので、もう一方ぐらい別の方であればですけれども、しなければもうこれぐらいにしようかなと思うんですけど、どうでしょうかね。 最後、大野先生。

大野：今の話の続きですけれども、我々の会で満洲の歴史を語り継ぐ高知の会のホームページを持っているんですね。そこにはいろいろな刊行物も載っているし、写真を提供、載せる場もあるので、ぜひもう一つの方法で我々の会で満州の歴史を語り継ぐでポンポンと押すとパソコンで見れますので、ぜひホームページを見てください。 以上です。

楠瀬：ありがとうございます。一応そっちの方の情報発信も継続してやっていきたいなと思っています。ちょっと長くなりましたが、皆さん1時から3時間ちょっとお付き合いいただきましてありがとうございました。非常に今日の内容も実りがあるものが多かったので、この内容も記録集という形でまた冊子にしたいと思うので、また皆さんのお手元にも届けられたらと思っています。また来年以降も語り継ぐ集いということでやっていきたいなと思っているので、またご参加いただければと思います。特に閉会の何たらとかいうのはないので、皆さん手元にアンケートがあります。もしご意見とかご感想とか書いていただける方がいたら、書いて最後受付においていただければと思います。長い時間お付き合いいただきましてありがとうございました。

シンポジウムの様子

集い・シンポジウムの感想

校正・編集　小野由美子

☆貴重なお話をありがとうございました。
高知地域の方の体験について記録・保存する活動があることに感謝します。
自分自身の祖父も戦友といるとき以外は、兵士としての体験は「言うてもわからん」と語らなかったことや、親族が満洲へ渡り暮らした話（もう 90 代後半でいつまで聞けるか）などと重なることを思い浮かべながら拝聴しました。（私も岡田さんと同じく、県外まで戦争と PTSD の家族の会のシンポジウムに行きました。）今も続いている、と思いますし、皆さんの話されるお気持ちが伝わってきました。ありがとうございました。

40 代女性

☆時代を経て戦争の歴史が遠くなる半面、世界のあちこちで戦争が起こり、人間の弱さ、反省のなさを思う時、忘れてはいけない事柄を改めて思います。ありがとうございます。
若い方が語り継いで頂けることに感謝です。

70 代女性

☆語り部の方のお話では、特に山崎さんのお話が興味深かったです。体験した方が少なくなっている現在、意欲を持っておられる方はありがたい存在です。
日本がどんどん右傾化し？危険な状況が近づく今こそ歴史に学び正しい判断をすることが大事と思います。弱体化しているマスコミにももっと頑張ってもらいたいし、この会のような活動が必要と思います。

70 代男性

☆私は北朝鮮からの引揚者です。若い世代の方が 78 年前の悲しい出来事を語り継いでくれることは心強いことです。ありがたいです。ほとんどの方は何も語らずお墓に持って行かれました。私の体験も孫たちにもっと伝えたいと思いました。

80 代男性

☆私が勤務している学校では、体験された方の紙芝居を使って 2〜6 年生の小学生に、満洲で何があったのかを毎年伝える授業をしています。今月末に 6 年生に授業をします。体験談も聞かせていただくことにもなっています。今日の話は授業をするうえでもとても貴重なお話でした。ありがとうございました。子どもたちにもいっしょに考えてもらいたいと思っています。

60 代女性

☆山崎さんと岡田さんの話では、祖母や伯母（親族）の実体験が語られており、とても心が痛む思いであった。満洲での戦争や収容所入り等で、家族とも突然の別れを経験することとなったり、子どもが風邪で亡くなってしまったりと、想像を絶する残酷さだと感じた。
加藤さんの話で、満洲での戦争から引き揚げまでの様子を聞くことができ、今の時代からは想像できない光景が広がっていたんだなと感じられた。
満洲での戦争から 80 年が経とうとしている中でも、孫世代の人が語り伝えてくれていることに感銘を受けた。当時を体験した人は、終戦以降も苦しみ続ける人生となってしまっており、いかに戦争があってがいけないのかを考えさせられた。

20 代女性

☆各講演も良かったが、シンポジウムは本格的に本質的内容に突っ込んだ議論に感銘を受けた。語り継ぐ会の今後の活動に期待が持てると思いました。

70 代男性

☆山崎哲さん、岡田としさんのお話が、戦後の視点、子・孫の視点から良かったです。今後アプローチすることが重要だと思いました。

70 代男性

☆良かったと思います。
具体的に良く調べ、わかりやすく皆さんのお話を聞いて、漠然と分かっていた事もよく知ることができました。
皆様の語り継ぐ活動に感動しています。大事なことです。できることは協力していきたいと思っています。

80 代女性

☆満洲引き揚げについて
加藤先生のお話は分かりやすくて知らないことが多いことに気づきました。
そもそも論というか、体験の話も必要ですが、正確な歴史を伝える必要を感じました。

60 代女性

第２部　満洲の歴史を語り継ぐ

2013 年から満洲引揚者の﨑山ひろみさん（満洲の歴史を語り継ぐ高知の会・副会長）や高知県立高知城歴史博物館の渡部淳館長らが高知城歴史博物館の事業として定期的に続けている高知在住の満洲引揚者への聞き取りの会。2022 年までに約 60 人に聞き取りを行い、音声と映像データで満洲での体験の証言を記録している（高知城歴史博物館でデータ保管）。こうしたデータは、満洲での体験を語り継いでいくために欠かせないものだが、今後の活用のためには証言の資料化（文字起こし）と映像データの編集作業が必要である。これまでに高知大生らの協力を得て、『第２回満洲の歴史を語り継ぐ集い記録集・2020 年度活動報告集』（2021 年 1 月発行）、『第３回満洲の歴史を語り継ぐ集い記録集・2021 年度活動報告集』（2021 年 9 月発行）、『青少年義勇軍・葛根廟事件 高知県関係資料集－第４回満洲の歴史を語り継ぐ集い記録集－』（2023 年 7 月発行）で、計 5 人の聞き取りを文字起こしして活字化している。

今回は、2018 年 7 月 22 日に聞き取り（47 回目）した渡辺和雄さん（昭和 4 年佐世保市生まれ）、2016 年 8 月 21 日に聞き取り（35 回目）を行った岡本敏之さん（昭和 11 年奉天市生まれ）、2018 年 11 月 25 日に聞き取り（49 回目）した片岡盛政さん（昭和 4 年仁淀川町生まれ）の 3 人の証言を文字起こしした。一部発言を修正して掲載している。

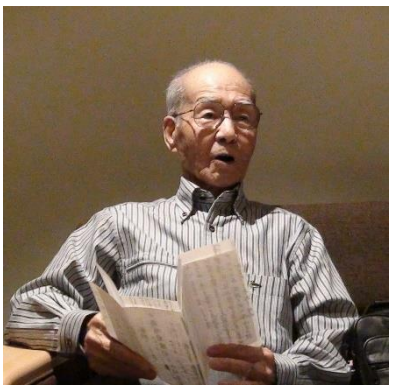
【聞き取り記録】「満鉄での仕事と引き揚げの記憶（渡辺和雄）」

文字起こし：岡田とし

（校正：楠瀬慶太、﨑山ひろみ）

聞き手　高知城歴史博物館館長　渡部　淳
満洲の歴史を語り継ぐ高知の会　﨑山　ひろみ
NPO 地域文化計画　中村　茂生

※表記の混同を避けるため、渡部氏は「館長」、渡辺氏は「和雄」と表記する。


渡辺和雄さん

館長：早速なんですけども、この会はですね、先ほど坂本さんからお聞きになっていると思いますけれども、その満洲から引き揚げておいでた方たちがほとんど写真とかいろんな資料を持って帰れなかったということで、 記録がすごい国内では少なくて、皆さんが経験した記憶をとにかくお伺いしちょかんと、あの国で何が起きたのか、どういう事件があったのか、あるいはどういう経験をされたのかというのは後に伝わらんもんで、とにかくいろんなことをお伺いしようという会を数年やっています。

何かが主題がある事じゃなくて、今日は渡辺さんがお生まれになって、どういう生活をして満洲に行かれて、どうい

う経験をされて、そしてどうやって引き揚げてきたかということを筋にして、もういろんなことをとにかく思い出すことを全部お話ししていただきたいと。
和雄：昨日、﨑山さんから早速今日のことについて、いろいろと事細かな説明をいただきました。何にも心配なことはないかということだし、もしかして中村さんという方も同席されるやらわからん。中村さんとかね。その時に、とりあえずは記憶にあること、どんなことでも小さなことでもかまんから、館長さんから聞かれたら答えてあげてくださいねという、一応予備知識はいただいていますので。
館長：そのとおりです。
和雄：ただね、ここでお断りしておかないといけないのは、﨑山さんにも昨日電話の話し中に申し上げたことですけど、具体的に筋道を立てて、ああでこうでというような、そういう話は一切できませんわ、もうそこを取りここを取りの断片的な記憶がこうあって、ところどころ空白の部分が逆に多くてね。ああ、そうか、そういうなんじゃとろうかという、自分なりに一部納得してみたいと思います。そんな状態です。ご期待に添えるかどうか、そんなのは申し訳ないけれども、 最初からお断りしておかないといけない。 あまり大きな期待はありません。
館長：いえいえ、大丈夫ですよ。﨑山さんからいくつかお話を伺っているんですけれども、なお記録に取らせてもらう関係で、お生まれになった時からのお話を順番にお伺いしますので。
和雄：あはは（笑）
館長：もともとは、お父様とかお母様はみなさん高知の人でしたか。
和雄：本籍は両親とも高知で、現在は合併になりましていの町。 当時は吾北村というところでしたけどね。
館長：吾北のどちらですか。
和雄：柳野というところです。そこは比較的集落も多くて、私がまだ来年から小学校という頃に、もうすでに定期のバスが通っていました。柳野というところへは。
館長：まだ、小学校は廃校になりましたけど建物は残っていますよね。あそこは。
和雄：春と秋、平成 24 年まではずっと家内と一緒に行っていましたけど、私が急に入院せないかんことになりまして、12 月に。もうそれ以来一切遠距離で、自分で運転ということしないわ、ほら。 比較的距離的にもどうですけど。行ってないけど、写真なんかニュースを見たら、なんかそこは集会所か何かとか、コウゾを蒸しただとかいろいろ。そんなニュースが懐かしいなと思うのでね。
館長：私が去年吾北の昔の小学校を全部回ったことがあるんですよ。 それで何か集会所になっていました。
和雄：私も現地にいたことはないのでね。写真をテレビニュースとかで見るだけのことで。
館長：じゃあそこでお父様がお生まれになって。
和雄：はい、母も同じ中学の中のちょっと違う部落を離れたところでね。で、親父は志願して海軍へ入ったわけです。
館長：お父さんは何年生まれですか?
和雄：親父が明治 42 年です。それから母が明治 40 年です。
館長：お父さんは学校出られて、それから志願で。
和雄：と言いますのがね、義理の親父にしたら、親父のまあ言うたら姉の旦那さん、川村という方が元はここの県庁にも勤めていまして、知事をやってなさった中内さん、高知県知事。あれとね、机も並べるくらい、おい、力やん、おい、竹やんと呼び合うような仲だったらしいんです。それなりがね、昔に海軍にいたら、ほら、当時は軍事色一色で、軍服とか帽子を着たらかっこいいでしょ。親父がそれに憧れて、志願して入って海軍へ、駆逐艦に乗っていまして、乗船した駆逐艦はだいたい名前が旧歴のようなのに写っていますわね、弥生とか三日月とか如月とかね、睦月の方へ乗っていまして、だからそんな関係で私、佐世保で、佐世保の方の軍港にいましたので、佐世保で昭和 4 年に生まれました 9 月 24 日に。
館長：お父さんは、軍人はいつまでやられていたんですか。
和雄：だから私がね、そこで生まれて。いよいよ来年、小学校に上がるという時に、家族みんなが、兵役というか免除というか、本籍地へ帰って、私はそれからずっと、本籍農学校で、ある時は尋常小学校か、まだ国民小学校にはなっていなかったと思うけど、尋常小学校、柳野で卒業して、それから同じ、同じ小川というところが小さい川、そこが高等小学校という、2 年そこへ行きまして、それからそこを卒業して、満洲に行くようになったわけです。

館長：うちの職員に、清水出身がおって。
和雄：おじが竹やん言うのがの川村竹美で、清水出身で、私が満洲から引き揚げた時に、村長をしていましたので。あの時分に固定電話じゃあいうものは、全然一般家庭にない時分に、柱へ大きなこんな感じで、 ジリンジリンと出て、役場と直通で、おじの家へ（電話を）取り付けていまして、顔も見えないので、どんなになっちゃうんじゃろうと、不思議に思ったことがあります。
館長：ご存じないですか、 清水の筒井、おじいさんが何と言っているのか、吾北の教育長をやった、それこそ、渡辺さんとあまり年は変わらないのではないでしょうか。筒井。清水の日比原というところ。
和雄：もうね、当時は今と違いましてね、もういろんな何が、ほら、固定電話もない、自転車も家ごとないという、今の中村さんらぁにはご理解できないけどね、そういう世の中でしたのでね。直接自分の意思を伝えるために、相手とお会いせないといけないというような時代でね。学校が違ったら全然、まるっきしもう。
館長：お父様が退役したときは、 立ち入った話ですけど、 階級は何ですか。
和雄：えっとね、 一言で言えば准尉です。下士官。正確に言えば、一等上等兵曹長か、一、二、三等まであるらしいです。一等兵曹長で、下士官です。それから尉官にあがりますね。それから今度帰ってから、 私がまだ小学校に行きゆう時分に、召集が来まして、今度海軍で雨に濡れたり、当時は想像絶するような、 ひどい何だったでしょう、風邪ひいて、それが元で、結核患って、いわゆる傷痍軍人になって帰ってきてね。それからずっと本籍地に住んでいます。 そういうことです。 確か間違いないと思います。これもね、渡部さん、中村さん、﨑山さんからアドバイスをいただいて、その場で質問されたち、なかなかね、あの場を出て、外に出てきたら、あれはあれだったというふうに思い出せる。一応ポイントポイントは、メモしちょきなさいよと言われまして。というふうにええアドバイスをいただきまして、こうやって書いてきましたわ、ほら。思いつくことを、後も先もない。
﨑山：いいです、いいです。
和雄：間違いない。一等兵曹長です。
館長：渡辺さんはそれで、柳野の小学校と、小川の高等小学校を出て、それからの歴史というのは、茨城県の方にいらっしゃってますか。
和雄：はい、卒業するちょっと手前に先生から、川村先生という先生だったと思いますが、高校で満洲へ行き、鉄道へ行って働く者がおらんか、手を挙げよと。同級生の中で、私一人が手を挙げてほら。それから、卒業してから間もなしに、係官の方でしょう。今思い出せばその満鉄のね、採用する学校へ来ていただきまして、ほか面接して、はい、採用しましょう。いついずれか、こうこうで支度をして、高知駅へ出てきてくださいというのでね、これが支度金ですと言って、その場で、昔、こんなにして 10 円紙幣があったでしょう。なんとか被ったような、妙な古いアレを 3 枚、結局 30 円そのときいただいて、それで、親父に言ったら、ふっ、ニコッとしました。当時の金銭感覚が、結構それなりにあったと思いますからね。それから、今、館長さんがおっしゃった内原へ。はい。
館長：外に出ていくことは、親御さんとかは?
和雄：いや、別に反対しなかったです。お前がそういう気持ちだったら、当時は周りがだいたい、私より二、三つ上の人は、自分から志願して、志願兵とかいろいろ、世の中の空気が、そういう流れでしたのでね。別に反対はしません。お前がそう思ったら、家で農業をやるのも何じゃが、思うことをやってみなさいと言うて。
館長：茨城県のいわゆる学校訓練所みたいなところですか? 満鉄の訓練所ですか?
和雄：満鉄の。
﨑山：内原のは満鉄のじゃないのね。
和雄：あれは違いますか? 青少年義勇軍。 その辺が、私は全然無知というか。 﨑山さんのほうが。
﨑山：向こうへ渡る人の少年たちを、あそこに入れて。
和雄：そういう範疇は無しの、向こうへ行く人と泊まる人の。
﨑山：訓練所ですよね、いわゆる。 ちょっと 1 ヶ月ぐらいだったわね、それは。
和雄：そう、当初お話に聞いたときは、要は 1 ヶ月と言われたのは、24、5 日、20 日あまりぐらいじゃなかったでしょう。
館長：その間に何を習うんですか?
和雄：いや、今でもその辺がちょっとこう理解できませんけどね。あの時、30 人か 40 人お

ったでしょうか、一緒に。朝、点呼終わって、それから鍬をかたいで、今から畑の開墾に。
館長：ああ、やっぱり農業もある。
和雄：畑の開墾に。そんで自分なりにね、煩悶したんですよ。俺は鉄道が好き、汽車が好きで、満鉄を希望したのは、ここへ行って、鍬仕事、農業仕事をしようか。何か納得がいかんことは、みんな別に何も言わんし、自分もそういう何もしようがない。自分なりに自己納得をしてね。それが 20 日あまりだった。ああ、よかった、予定より早く引き上げるようになって。それから、友部という駅からね、 汽車へ乗った時の乗った時間、今だったらこと細かに、 何時何分、汽車の列車の名前はどうよ、名所の名前はどうよ、そこまで聞かないといけない。当時はそんなことは、14 歳でしょ。割と無頓着で、汽車へ乗った時は、これでずっといけなかった。一応記憶にあるのが、岡山か広島辺りで、夜中になったのを覚えてます。茨城を出てから。 はい、それからずっと行って、下関に降りて、それから関釜連絡船、下関ってあの釜山のね、あそこの船に乗って上陸して、それからずっと行って、今のソウル言いますけど、あそこは昔は京城で、京のお城と書いてね。それから平壌は一緒ですわね。平城は同じ平城で、あるいは平城より、新義州とかね、それからどんどん行って、それから奉天に着いたわけです。
館長：その訓練所には全国から集まっているんですか?
和雄：全国的に、あっちこっちから希望者を募って、集まったんです。それも私も、あんたはどこから来たんだ、そんなふうに聞いたこともないし、お互い聞かれたこともないし。
館長：年齢としては似たような年齢?
和雄：ええ、もうだいたい 14、5 歳のね、同年代。
館長：義勇軍と同じですね。
和雄：それから帰るときは畑仕事が済んで、帰るときは夕方、何を歌え言うて、「七つボタンに桜に碇」とか。
﨑山：予科練の歌ね。
和雄：予科練の歌、それを歌いながら宿舎へ。それで宿舎は、ずっと真ん中通路があって、2 人並んでもゆっくり通れる。
﨑山：軍隊と一緒ね。
和雄：両側が板の間で、壁の方へ頭をして寝るように。足がみんな廊下へ出すような感じでね。それで一番大変だったのが、それまでは親がかりで、布団をつつく役は自分ではするじゃあいうてないでしょう。 小学校の何を出て、14 歳ぐらいでポカッと茨城へ行って、また今度満洲に行ったんですけど、茨城へ行ったときに、最初の朝、「集合！」言うて、号令がかかってみんな集まった。自分のいて、定められた寝間を見てこい言うてね。布団をほんと何にもかにもほんと、そのままもうむちゃくちゃに放り上げて。ちゃんとね、布団、毛布は全部ここの隅をカチッと揃えて畳めというてね。そういう厳しいことも、そういうことは覚えてます。そんなこんなで今度満洲へ行きまして、満洲はね、今でもこれだけはっきり覚えちゅう我ながら感心できるわけですけど、奉天市、小西区、小さい西の区、小西区、北起街、北という字に起こす、がいは街の字。3 段、1 段、2 段、3 段の 3 段です。の 122 というね。ここだけはっきり。
﨑山：何か資料持って帰りました? 頭の中に？
和雄：いやいや、それというよりもほら 1 年間おる間に、親との文通は 2、3 回、自分で書いたというようなので、記憶に残ったもんですよね。
館長：じゃあ、茨城では百姓の訓練みたいなのがあって、奉天に行ったら全然今度は違う話になる？
和雄：今度は奉天に行きましたらね、はい、全然違う。2 人の相部屋というかね、2 人部屋で畳のね、丸っきり違う宿舎があって、どう言ったらいいんでしょう、ちょうどこう、こういう形、コの字型みたいでね、校庭がありまして、校舎があって、食堂があって、それから風呂屋と風呂場があって、こっちが宿舎ですからね、 自分たちの寝泊まりする、そういうのでね。そこで 1 年間、通常の昔の旧制一中というかね、 同等の勉強させていただいたので。
館長：じゃあそこでも勉強を？
和雄： 勉強とあとね、実質的には 5 分の 1 くらいが実習で、 実際の汽車の連結業、あれが多いですがね。あれを外してみたりとか、そんなときは車内のいろいろ点検とかね、そんな感じでね。
館長：そこは人数はかなりおるんですか？生徒の人数は？

和雄：そこへ行ったのがね、学生が 30 人くらいじゃなかったでしょうかね。けんど当時は、世間的なそういう知識をどうじゃあ言うようなのは、一切欲得もない、ただ、わいわい言うぐらいのことでね。ただし一番仲の良かったのが、福井県から来てました高橋マサジという。もうその高橋君とはうんと仲の良い日も多くて、ずっと一緒でしたけどね。
館長：ほんじゃまあ学科というか、一般の勉強と鉄道の技術の実習みたいな。それはもう満鉄の人が先生に？
和雄：それは満鉄で。中国語も余分に中国人の先生が来て、筆記して教えるわけですよ。今現在の中国の新しい何を見たら、略したような、まるきり当時とは違う。おまけに日本が統治していた満洲ですよ。だからなおさらと思うけどね。
館長：朝から晩までずっと授業みたいな。
和雄：そこで授業をして、いわゆる通常の学校と同じ土曜、日曜は休みという感じでね。ひいとい土曜日でした。馬の合う高橋君と。「渡辺君、北奉天の方へ行ってみろうか。あそこの方に近くに柳条湖で、昔満洲事変の勃発した地点があるらしい」がということで。歩いて行ったはずです。当時車で行く時代じゃないのでね。 行ったらね、線路の脇に、このくらいの高さの上に二つとか三つに、わざとこうやったような記念碑がこのくらいに建っていましてね。僕はあそこを見て、「おい、あそこを見て」言うて 100 メートルほど右を見たら、福田か福山か、福は覚えてますけどね。歯医者さんがありました、日本人の。友達が「高橋君、こんな人家もあまり場面がないところで、歯医者がありぁやっていける。」それがほんと記憶に残ってますね。
館長：土日はそういう自由時間で、いろいろと。
和雄：土日は自由時間で、冬なんか外へ出るいうたら、﨑山さんはご存知でしょうけど マスクをして目をしょっちゅうこう、指でこうやりよらんと、まつ毛が自分の指で引っ付いてね、しょっちゅうこうやって、こうやりながら。
館長：授業はわりと厳しかったですか?
和雄：結構厳しいです。ひとりすごく厳しいのに授業が終わったり、いろいろした時には、内面的にすごく優しい小林ツチヨ先生という、その先生のことだけははっきり覚えてますけどね。その先生がこのくらいの長さの柄の先へこのくらいの点検するときによくタンタンタンとやる金槌みたいなのがあります。あれを必ず持ってきて、あれで叩かれて。そんなことも思いだいたけど、すごく優しい先生です。
館長：試験とかがあったりして。
和雄：いや試験はもうないずつに、翌年春、卒業ではなしに終業です。1 年間の終業。
中村：それは学校の名前みたいなものはなかったんですか?
和雄：名前はね、ここに書いてあるんですけど、奉天技術院養成所。よかった、﨑山さんからアドバイスを受けちょって、まこと。
﨑山：技術養成所?
和雄：ええ技術院養成所です。 すぐ近くをね、前を吉林か牡丹江へ行く線路が通ってましたのを覚えてますからね、学校の近くの。
館長：それから言うと、茨城での訓練というのは何の訓練だったんでしょうね。
和雄：あれは未だにね、自分なりに納得できん。俺はこれは、汽車が好き、鉄道が好きなのに、ここへ、茨城へ。それもまた、高知とちごうて高知を出たのが 3 月の終わりか、あそこに入ったのが 4 月でしたけど。まだ桜もろくに咲いていないので寒いときでしたのでね。それは、郷里でおると同じなのに。…満鉄で・・その辺がちょっと理解がね。今、﨑山さんからお聞きして分かったけど、全体のそういうほんで。
﨑山：青少年義勇軍ってありましたでしょ。
和雄：ありました。
﨑山：あの人たちが主に入って訓練を受けて、もっと長いと思いますよ。
館長：義勇の方は。
﨑山：ええ、義勇軍の人たちはもっと長くいた。
和雄：当初 1 ヶ月っていったのに、たしか 20 日どころかだったと思います。
﨑山：だから、義勇軍じゃないから早くすんだんでしょう。
館長：じゃあ、その養成所を出て、現場に赴任するわけですね。
和雄：はい。その出る間際に先生から質問がありまして、これからいよいよ、君たちは現場へそれぞれ分散して、自分の希望地へ赴任するんじゃが、自分の希望がなるだけ添えるようにね、取り図らうから、まず希望を書けと。

﨑山：ああほんと。へえー
和雄：で、先生に言われて、新京って自分は書いたつもりがね、 実際行ったのは新京の近くですけど、寛城子という検車区、かんはうかんむりの寛、お城の子、子どもの子。
﨑山：それも新京市の中よ。
和雄：中ですかね。ああそうか。
﨑山：新京市、寛城。昔は寛城子が、新京ってなかったから、そこがハルピンなんかに行く駅でした。
和雄：﨑山さんのがいろいろ研究なさっているから詳しい。 あしゃあそんなことには無頓着で、ほら、それを新京はよかろうという、そういうふうにね、希望したところが寛城子というところで。
﨑山：それが 15 歳ですね。
和雄：15 歳です、それが。
館長：じゃあ高知から茨城に行って、それからずっと行って、 奉天に行ったときも大きな都市だとやっぱり思ってましたよね。
和雄：ええ、もう奉天が大きい都市でね、はい。
館長：新京に行くと、新京は奉天とは全然雰囲気が違いますか。
和雄：ああ。町の雰囲気とか綺麗さというか、町の雰囲気はやっぱり新京の方が垢抜けしているというか、 そんな感じを思いましたね。今でも奉天は工業都市とかなんとかでね、結構、あのう、何らしいんですけどね、新京は今でも。
館長：そこで、現場で働き始めるわけですよね。
和雄：そこへ現場に出ましたのが、4 月の下旬か 5 月の早々になったんですね。それから考えてみたら、ひいふうですわ、終戦になったのが。
館長：ああ、そうですよね。
和雄：で、職場の中で、何かソ連軍が満洲の方へ攻めて来ゆうらしい。 まあ自分たちは呑気なもんですわ、ほら。前日も同じ仕事を従事していたわけです。そうしたら、8 月の 14 日の日でしたか、職場の上の役職の人が、 何か明日は、昨日はハルピンへ行っちゅうから、明日はいよいよ新京だと。お前らもそれなりの覚悟しちょけよ、いうてね。まあ、分からないながらも、覚悟せないかんのじゃおか、撃たれるのかと思って、しよったら。その 15 日の当日、15 日の昼に、何か玉音放送があって、無条件降伏をしたと。 ああ、くつろいだ。まあ本当の本心はそうですよ、みんな日本人は。ああ、やれやれと言うこうね、はい。
館長：玉音放送を実際聞いたんですか。
和雄：全然聞いてないですよ。 あれは本当に、その辺も私に、どこからどういう流れで、どういう風に私らの耳にそれが入ったんだろうかと思うてね。 いまだにそれがこう、何か不可解ですけどね。ちゃんとあの玉音放送があって、ここで無条件降伏したと言ってね、その日に、昼過ぎに。
館長：それまではあんまりその危機感みたいなのは。
和雄：全然、もう 14 日、いや 8 月入ってからも全然そんなに、全然丸きりなかったよ。それで仕事も普段通りの職場で。
館長：でもよくその、ソ連がだんだん攻めてくる可能性があるというので、関東軍がどんどん南下をしていくだとか、そういう動きが。
和雄：それは見ました。見ましたけれども、今になったら時効になったからかまんでしょうけれども。当時ね、私らがまだ、ほら、そういうことになるじゃ知りませんが、無蓋車言うて、蓋のないこれくらいの貨車がありますがね、それ兵隊さんがカーキ色の着いたの。どんどんどんどん、南へほら、今朝も南行った。 またひと列車南行った。我々ほたくって行ってどうするんだろう、あれがいわゆる、何か日本の作戦か何かで南下しよったのでしょう。今はもう 70 年も前、時効はきたけれど、当時はね、みんなこうやってた。（ロチャック）
館長：特にそういう動きを外に言っちゃいけないとか、そういう上からの指令は?
和雄：全然なかったです。なかったけど、お互いが暗黙の了解と言いますかね。 喋られんなと言うね。なんとなく、これは言わないことです。で、さあ、それはそれで良かったですけれども、 ひいとい、あれは、こう新京に入って 2、3 日してからでしょうか、 上の県職の部長か署長か、みな全員集合せよと言って。 見たら、ソ連兵が。図体の大きなソ連がオーバーみたいなのを着いて、肩からは、チエッコ機銃と自分らあは言わせてもらいよったけれども、みんなそう言うておりました。銃身がこのぐらいしかないような。これぐらいの、62 発とかなんぼ玉が入っているので、それを肩から掛けて、ダワイとか、そんな言葉でね、

並べとか、来いという意味でしょう。それは覚えています、なんでもない言葉。それから、ああ、いよいよこれで最後か。あれでパパパッとやられたらもう終わるよと。 そうじゃなくて、これからも同じように今までどおり、 従来どおり仕事をお前ら続けてやれ。そのためには監視は時々来るからと言って。ああ命拾いした、そういうこともありました。それが怖かったです。それと終戦後にもう一つ怖かったのは、どこからどういうルートでしょうね。みんな自爆せにゃいかんので、ソ連兵がここまででした。終戦の悪夢のようだった。 このくらいの、全体で言うとこのくらいの長さですよね。ここから先が鉄製の手りゅう弾。こっちが木製の柄でね。その柄のここに穴があって、ここから糸があって、指をスッと掛ける輪っかの何があって、これで指を掛けちょいて、これを握ってやったら爆発するから、 渡されたのを覚えてます。死なないといけないと。
﨑山：終戦後?
和雄：終戦 2 日か 3 日ですよ。それがいまだに分からないのは、どういうルートで自分らの手に渡ったか。 ほいたら回収するというのでね。ああやれやれ、また。ソ連兵でこうやられるかと思ったら命を拾った。 またこれで 2 度命を拾うと思ったら、今度はデマが飛び出して。当時は、ここじゃきかまいませんけんど、我々は満人満人言いよりましたからね。中国人ね。集団で暴動起こしそうなって。今までの何で鬱憤晴らしにね。それもないづつに終わってね。帰るまで仲良くね、やりまして。まあ何か良かったと思ってね。
館長：特に戦争が終わってから大変なきつい目におうたとか、そういうことはなくて。今まで通常業務はずっと続くということですか?
和雄：職場は従来通りの職場で、帰るまで。
館長：そこに、ソ連へは来たでしょうけど、中国人がやってくるだとか、指示に来るだとかいうことはなくて、日本人の職場に来てずっと?
和雄：私はやはり、それまで同じ状態で、中国人の風呂を沸かすおじいさんの人がおりました、年配の人が。当時まだ若いの。私らは若いから、おじいさん思うたんでしょう。その人が、中国人が、ちゃんと風呂を沸かして、それで夕方、作業済んだらみんなが 7 、8 人一度にパッと入れるような、コンクリートのね、 むき出しのコンクリートの長方形の風呂で、そういう生活でした。
館長：食べ物が急に変わっただとか、そういうことは?
和雄：いや、それもなかったですね。考えてみれば、不幸中の幸いというか、本当に恵まれていたなと思ってね。
館長：やっぱり、交通のあれは、安定化させるかどうかなんでしょうかね。それで、その通常の業務が、いつまでずっと続くんですか?
和雄：それから 1 年後まで。21 年の 8 月の終わりか 9 月入る頃まで、ずーと同じ仕事を。で、いよいよ引き揚げるという話が出始めて。我々も引き揚げる時期が来ゆうらしいというので。それなりの心積もりをしましたけど。最初に館長さんがおっしゃったように、何一つ資料とか、何にもないですよ。服と肌着だけをリュックに詰めて、それだけです。それで引き揚げてきました。
館長：ご自身が引き揚げるまでに鉄道業務をやってたら、それこそ引き揚げの貨車だとか、北から来る難民というか、そういう人たちもいっぱい来ているわけですよね。
和雄：ええ、あのう、新京に難民避難所か、開拓団の方とか。そういう方が来た時に集まるそういう避難所か、なんか一時的に避難できるようなところが新京にあったらしいですけど。私らそこまでね。
﨑山：駅の近くとか、学校がほとんど避難所でしたね。
和雄：今じゃったらそこにいて、あちこちちゃんと見るわけですけど。当時はそんなことは全然ありませんでした。
﨑山：そうよね
館長：やっぱりだいぶの人がこう何かをする、引揚者だったんですね。
和雄：ただしね、私の身の回りでもチブスで、チブスにかかって何人か亡くなりました。どれもかわいそうな開拓団の方がいて、それは今でもはっきり覚えていますがね。もう痩せこけてね、かわいそうなもんでした。
﨑山：着るものなんかもね。
和雄：もうボロボロでね。
館長：それで 1 年ちょっとで自分が引き揚げようという。
和雄：いよいよ順番が回ってきまして、引き揚げることになりました。

﨑山：9 月に入ってからですかね？
和雄：9 月に入ってからでした。はい、21 年の 9 月に入ってから、引き揚げの。館長さんが先ほどおっしゃった、どんどん北から送るような汽車はどういう運行方法であったか、そこまで私は全然わかりませんが、ほら。
﨑山：渡辺さんなんかが引き揚げちゃったら、渡辺さんがしていた仕事は中国人が。
和雄：いや、そこもその辺も全然。引き継ぎして、はい、こうで、ああで、そんな作業も一切なし。突然、いよいよ明日から引き揚げるから、汽車に乗れという命令というかね、そういう指示で。だから業務引き継ぎをして、はい、これ、ああで、こうで、そんなことは一切ないです。
﨑山：事務系の人はわりと満鉄の人も早く帰ったかしらんけど、技術系の人は後残されて、9 月なんかで引き揚げられたって、ちょっと不思議だと思うんですよね。だけど、まあ、それは事実だから。
館長：満鉄はあれですか、給料とか良かったんですか?
和雄：えー、給…。
﨑山：良いか悪いか、比較して。
和雄：まあまあでしたよね。
館長：まあやっぱり、いろんな待遇とかも良いんでしょうね。
和雄：ええ、結構良かったです。
﨑山：日本の吾北のお家へ、送ったりしませんでした？お金を。
和雄：いや、それはしなかったです。
﨑山：あ、そう。貯金なんかもね、あの頃はしてたって、みんな置いてこないといけないから。
和雄：お金といえば、帰ってから引揚者なんとかの国債、あれを 2 度もらいました。1 年ごとに何百円あげて、あれを 2 回。合わせてトータル累計年数が 6 年か何かになりますからね。
館長：じゃあ、その新京を引き揚げる時には、もう本当に何も持たずに、みたいな形で。で、まあ同じ職場の人たちで一緒にこう引き揚げるんですか。
和雄：そう、もう本当のね、言葉どおり、着の身着のまま。もう自分の着いているものと、リュックへちょっと着替えを入れている、それだけです。
館長：その引き揚げまでは、特に戦争が終わったからといって、特に苦労があっただとか、ひどいことがあったということはあまりなく、ドキドキしたくらいなんですか？
和雄：私の場合はね、幸せなことにそれがなくて。ずっと同じ職場で同じ仕事をずっと引き揚げるまで継続して、はい。ただ周りにはずいぶんかわいそうな方もいましたけどね。北から開拓団のような方がね、もうそれは惨めなもんでしたね。
館長：後先になりますけど、その通常の業務というのはどういう業務をされていたんですか。
和雄：どう言ったらいいの、あのほら、よくほら、こちらの電車とか汽車でやるような、油さしたりとか台車を取り替えたり、摩耗したところがありゃあそれをのけて、他の部品とか換えたり、まあそういう感じですわね。それとその客車内の清掃とかね。まあそういう、一般的に言ったらそういう仕事です。
館長：新京駅って大きかったんでしょう?
和雄：ほらあの鉄道の何が、レールの幅が違いますのでね、日本と。広軌言うて、何か 7 センチかなんぼね。もうね、広いよって、ほら。当時、アジアでは、東南アジアでは一番速いという、アジア号という機関車がね、はい。
﨑山：片っぽに 3 人座ってましたからね、だからそれだけ通路があって 3 人いたからね。**館長**：広いですね。
﨑山：で、貨車が広いんですよね。だからソ連がいろんな物資を取っていくのに、ここは広いからいいけど、今度ソ連入るときはもう普通の、まあ日本と同じような、だから全部レールを変えてね、何かしたそうですよ。でもどんどこどんどこ、それこそその貨車積んだままでソ連に連れて持って行ったらしいですよ。それこそ満鉄の人が言ってくれました。
和雄：現場を見ました。あれ、またソ連が取っていきゆう。あれは何か不可侵条約か何かを結んでおいて、突然日本に攻め込んで、日本とあの満洲へ。 そういうふうに、今現在はハボマイ、シコタン、エトロフ、これら自分のところの領土じゃ、もう原住民もおるから、やっさもっさといいよりますからね。あそこらも取り上げてね。
﨑山：渡辺さんは少年だったということもあるし、ご家族と一緒じゃないしね、真面目だか

ら、周りのことずっと見てないんですよ。 いろいろね、すぐ、渡辺さんの宿舎が何言いましたかね、町は？宿舎があったところ。
和雄：あ、露月町です。
﨑山：露月町、駅から西が、葵町とかのとき、こっちはイロハで、露月町って言ったら、わりに駅に近いんですよ。だから、その辺が仕事するのに便利だったんでしょうね。露月町って近いんですけどね。 すぐそこに吉野町っていう繁華街があるんですよ。
和雄：全然知らんよ。
﨑山：え、吉野町知らないの?
和雄：全然、今だったら可能な限り、あちらこちら回るんですよ。 当時はそんな、世俗的なことに何の興味もないというか、年齢から推し量って想像してみてください。 15 歳でしょ。もう全然、ほら
館長：宿舎行って働いてと・・。
和雄：おまけに単身で行ってますしね。ただ、この間の電話の中で、露月町で 2 丁目だけど、町名がなかったように思うけど。
﨑山：地図にありますからね。
和雄：やっぱり 2 丁目ってありますか。
﨑山：ありますあります。 ちゃんと見てるんです、私。
和雄：私の思い込みじゃない、思い違いじゃない。
﨑山：間違いないです。 ロシアの露に、月町ね、露月町。イロでしょ。だから駅の近くから、イロハニホヘト、こちらはアイウエオって、いろいろ。全部だから日本人、特に新京は首都を構えて、日本人が作った町でしょ。 だから全部日本の名前ですよ。
和雄：露月町、こういう字です。よかった。アドバイスをいただいてましてね。もうその場で言われたち。何だったらメモしちょいたらいいですので。ありがたいことです。
﨑山：いえいえ、あの辺は駅に近いですから。まだ新京ができる前から言ったら、鉄道の守備隊で。鉄道の両側 1 キロですか、そこが日本のものになっていたわけですからね。駅の近くのね、私らがいた女学校の辺りまでかな、そこが旧市街で、そこに日本人が住んで、すごい繁盛していたわけですからね。それこそ何でもそこら辺にあって、私の家はそれからもっと離れて、新しくできた官庁街ですからちょっと離れていますけど、渡辺さんがいらっしゃったところは、行ったらいろいろ遊ぶ、いろんな楽しいところもあったり。
館長：もうちょっとね。
和雄：しもうた。今さら言うても始まりませんけんど。
﨑山：それこそ昭和 19 年だったら、おいしいものも売っているしね。吉野町だったら食べ物もいろいろいっぱいあって。私ら吉野町に行ったら、本当におご馳走をしてもらってね。大和屋という和菓子屋さんがあって、そこで豆大福を買うのが楽しみだったとかね。全然知らないね。残念。
和雄：まるっきり。それでいよいよ満洲から帰るとなって引き揚げて、汽車に乗りました。で、山海関というところの近くに、葫蘆島（コロトウ）というところから船に乗りましたね。もう同じです、この葫蘆島という字が。妙な字です。
﨑山：山海関ってここですから、山海関よりだいぶ手前です。
和雄：手前かねぇ。もう同じです。 妙な字です。言うてくれと言われても書けないような、これが廬です。
館長：葫蘆島でちょっと。
和雄：で、船に乗って、船の船底というか、船の底みたいな、そこへ詰め込まれて、 2 日ぐらいでなかったのか、東シナ海。 で、佐世保へ上陸して、上陸しましたら、待ち構えていた桟橋のところで、あの扇風機、掃除機みたいなのがあれで、バーッと、DDT が真っ白いのが頭から。
館長：葫蘆島から 2 日間なりの船の中は、そう厳しい環境ではない?
和雄：いや、船の中の厳しさは一切ないかわりに。食事が朝と昼、いや夜、1 日 2 食で。もうそれに堪えました。
館長：それまでが普通の生活ですからね。
和雄：ほら、前言ったら年齢的に一番の食べ盛りでしょう。朝 9 時頃に朝、朝食、夕方 5 時頃に夕食。昼は一切ないんです。そのお茶わんたるや、また小さなね。絵を描いた子供用茶碗や、あんな茶碗やね。
﨑山：何か食料を準備して持って行きませんでした?

和雄：何にもできませんでした。
﨑山：新京を出てからずっと、収容所もどこも行かないで、そのまま葫蘆島まで行きました?
和雄：どこか一遍汽車を降りて、一晩どこかでね、
﨑山：錦州かどこかで。
和雄：どこかで一晩、それは覚えています。どこじゃったか。
﨑山：船が来るまでね、そこで待っている、待機している。
和雄：私の聞き間違いか思い込みか知らないけど、乗った船がアメリカの船とか、そうでしたかね、リバティ、上陸用船艇いうてね。
﨑山：私と一緒。
和雄：やっぱり私の思いすごい違いじゃなかった。リバティのね、上陸用舟艇というてね。で、佐世保へ上陸して、その粉をかけられて。いよいよ佐世保の日本の土地を一歩踏んだのが、不思議なことやと。私の生まれた 9 月 24 日、誕生日。それで親らもびっくりしてね、偶然にしてもあまりにも、滅多にあることにはないがと。
﨑山：佐世保だからね。
和雄：去年、佐世保へちょうど行く機会がありまして、10 月に去年行ってまして。まだだけど、自分がね、80 数年ぶりに佐世保で生まれた。そこへ再度行くじゃあということはもう、全然頭になかったでしょう。だから残念なのは、両親が健在なときに佐世保のことを、生まれた周辺のことを根掘り葉掘り聞いちょったらよかったということ。ただ一つ、学校があって、すぐ近くに神社が何があって、坂道で。今の戸籍謄本見たらわかるけど。佐世保市、上下の上を書いて上町（うわまち）と呼びますがね。上町 90 番。学校はちゃんと現在、大正 12 年の開校した学校。現在もありまして、去年も。よかった、思ってね。去年行ってきました。
館長：佐世保に着いた時が、16 歳くらいですか?
和雄：はい、16 歳の春ということです。
館長：誕生日ですね。それから佐世保からはどうですか?
和雄：佐世保で。確か昔、 敗戦までの日本の海軍、海兵隊かなんかの宿舎があったとかどうとかいうところで、そこで確か一泊したような記憶がありますけどね。それも定かでないんです。なんか断片的にそんなんじゃなかったかな。
館長：海兵の分校みたいなのがありましたね。
和雄：それから今度は汽車に乗りまして。それぞれ地域ごとに分かれて。私が高知駅へ到着したのが 26 日か 27 日でした、9 月の。高知駅へ。
館長：ずっとあれですか？広島岡山を通って土讃線で?
和雄：あのね、広島を通るときに広島駅で一旦停車して。汽車の窓からこうやって覗いたら、そこをここにぽつぽつ真っ黒こげの電柱が、血の焼けたのか知らんけど。もうただの一面見渡せば真っ黒。1 年後じゃったんですけどね。後で知って。これが原爆という、俗に言う当時はピカドンというのがあったもんね。高知も同じことです。高知駅からちょっと出たらもう、はりまや橋までずっと見通しが利くようなね。 今見るも何も家だらけでも、視界はないですけどね。それで高知駅のちょっと斜め東、南にね、相生町って今もあるはずですが。そこに引揚援護局かなんか、今なんかそこがちょっと、健常者でない人がおる、そんな施設になっているらしいですけどね。そこが援護局。
﨑山：相生町のね、そういう引揚者の･･･
和雄：そうそう、援護局。そこでね、ここで一晩泊まって、電報を打ちなさいと。それぞれの田舎へ、お家へ。それで電報を打って、そしたらこれがお夜食ですいうて、ふかし芋ですがね、さつまいも。
﨑山：もう。おいしかったでしょう。私も忘れん、よう忘れん。
和雄：あ、そうですか。もうあの美味しかったことはね、本当にね。
館長：みんな食べ物がありますね。
和雄：私が嘘を言うんじゃないってことは、分かっていただけますかね。もうあのふかし芋をね、女の世話をやっている方がね。もうあれがもっと食いたい、そんなことは言えんしよ。あれがおいしゅうてね。
館長：それで翌日？
和雄：翌日、当時のフジバスかなんかあったらしいですけど、私も記憶が全然ないですけど。高岩というところまでバスで帰りまして。現在のいの町高岩ですがね。そこまで。で、親父が迎えに来てくれてまして。そこに鈴木いう先生をなさってた方もおいでる、鈴木旅館いう

てね。旅館をやってましたがね。そこで一部屋借りて。親父が、お腹が減ったろう、飯を食えゆうてね。蓋を開けたら真っ白い米でしょう。もう一口、口入れちゃぽろり。あの時の気持ちはね。ほんとにもう･･･それともう一つ、そこから歩いて帰りましたから。今と違ってバスがしょっちゅうはありはしませんのでね。もう歩いて帰ろうて。もうなんかね、山が上から今でも頭の上、ボサッと落ちてきそうな、何にもないところで 3 年間おったそういう感覚で、ほら。
館長：はああ、山がもう･･･。
和雄：山がね、覆いかぶさってね、 これだいぶね。「何を言う」って親父に笑われたけどね。それが思い出であります。
館長：ご兄弟はいらっしゃるんですか?
和雄：兄弟は 4 人兄弟で、私が一番上。次と次が長女と次女になりますわね。それから一番末が弟で、4 人兄弟で。親父が、私が 20 歳になった年の昭和 24 年に、ここが元で（胸を指して)、それまで療養をしてましたけどね。それが元で、あちらへ。
館長：ご長男が戻ってきたのを確認してね。
和雄：まあ、4 年ぐらい一緒に生活できました。
館長：その時は、ご兄弟はみんなも吾北に残っていましたか?
和雄：みんな学校にまだ行ってましたしね。具体的に理路整然と行ってからのことをお話できるようなことはないので。ここ取りあそこ取りの本当断片的なお話しかできませんけどね。
中村：満洲に行かれる時は、高知から同じように 14、5 歳の人たちがまとまっていかれたのですか？
和雄：その時ね、高知からは私を入れて二人じゃなかったろうか。松原とか松本さんとかなんか松がついちょったように思うけんど。私が細いけどそれよりまだちょっと小柄な。大勢のどやっと、終戦後の集団就職のようなああいう何はなかったです。それだけ満洲に行く希望者が少なかったんでしょうね。
中村：帰ってくる時も別々で？
和雄：それぞれてんでばらばらね。それぞれがその場で、「じゃあお元気で」が最後のお別れね。
館長：帰ってきてから満鉄のその福井から来とった仲良しだとかそういう人たちとの連絡とかは
和雄：連絡はね、というか、10 年くらい年賀のやりとりを。今でもはっきり覚えています。今おそらく町名も合併かなんかで変わっているんですけど。それは役場にいたらわかるでしょうけど、福井県、坂井郡、棗村（なつめむら)、コハタ、9 号、6 番地がその高橋君のね。もう 10 年が、ぎっちり年賀やったりね、しよったでしょう。おそらく今はね、そういうなにはないと思います。役場にいたらわかるんでしょうけどね。それはもうそんな、棗、コハタじゃあ言うて、知りませんと言われると思うけどね。実際はそれがその人の。
館長：じゃあ、戻ってきて付き合ったのはこの方ぐらいですか?
和雄：ええ、それともう一人ね、女性。親が妙な顔をしましたがね、最初。葉書が来た時に、私が帰ってから。突然、ほら秋ごろ葉書が来ましてね。ご無事に引き揚げて帰りましたか、お元気ですかって。熊本県、玉名郡、相谷（あいたに）村、そこからだけはちょっと記憶が飛んでますけどね。そこまでははっきり覚えてます。 熊本県、玉名郡、相谷村。山本スミコさんいうてね、 私より二、三つ歳が上じゃなかったかな。
﨑山：何をしてらした方です?
和雄：そこまでは私も。
﨑山：満鉄の関係?
和雄：それも全然。ただね、近くにおいでた方で、私がね、ある日、偶然会うて。当時ね、今の中国共産党。当時の共産パーロティ言うてね、私らあ言いよりましたがね、八路軍。の待遇がすごくえい。今考えれば無鉄砲のこと考えるもんですね、15 ばあで。満鉄やめちょいって、八路軍に入ろうかと。白い飯で待遇もええという話じゃが。山本さんという人は「やめちょけ」と、絶対にいかん。それのおかげでね、今もこうやってお話できるようになった。あの時止める人がおらざったら行っちょったかもったわからんですわね。あの当時は政府軍、国府軍と言うたりもしよったけんど。蒋介石と毛沢東がにらみ合いをしよって。結局最後のはしには台湾へ蒋介石は逃げましたけどね。その毛沢東が今現在の中華人民共和国の始まりですからね。つい最近 4 月か 5 月に全人代いうて、日本の国会と同等の何があって、

習近平が永代自分の意思で一生やろうとおもいや主席が務まるような法律をこの間作りましたわね、中国が。
館長：それじゃ、その
山本スミコさんというのは、 満鉄の官舎の近くにおった？
和雄：ええ、おいでて、今じゃったらほら、何をしてますか、どうなんですか、いろいろ詳しい話を根掘り葉掘り。当時は丸っきしない。それから 2 回ほど文通しました。それがいつのまにや自然消滅でね。自然消滅で。ただしこの高橋君というのは、帰ってから引き揚げてから、国鉄へ当時の今の JR に入社したと。
館長：渡辺さんも帰られて国鉄に入られた？
和雄：いや、私は帰ってからそれへ入っちょってもよかったけど。当時はそれより何よりとにかくお腹いっぱい食べることがいっぱいという世の中でしたわ。まずお腹をはらさないかん。ああ、それだったら百姓農業のほうがええわと思って。やりゆううちに、世の中がだんだん落ち着いてきた、しゆううちにちょっと街へ出て変わった空気も吸ってみようかなと思って、高知へ出てきたわけです。昭和 33 年の春に。帰ってから 10 年ちょっとで高知へ田舎から出てきたわけです。
館長：高知でお勤めをされていたんですか？
和雄：ええ、こちらで運送会社のところにおりました。途中に当時警察 OB の方で、成岡さんいう朝倉の方ですがお家が。その方がタクシー会社を興すというのでね。ちょうど私の運送会社におる西本というのが、おじ、甥の仲でしてね。渡辺こうこうでおじがタクシー会社を興すいうが、当初は 6 台で始めるいうが、いちゃってくれんかというので。私が一番最初にそこへ入らせてもらって、タクシー乗りゆううちに 。今度は個人タクシーを始めて、平成 11 年の 7 月の 30 日まで個人タクシーをずっとやって。それからずっともう引退して現在に至っています。
﨑山：だけど役員してらっしゃるんでしょう、個人タクシーの会社はね？
和雄：だから毎年、東京は年に最低 1 回は必ず行き。京都、それからあの四国は高松で四国支部というのがあります。 それも毎年。えらいほんと、こんなふつつかなもんじゃけど、組合員の方に認めていただいて。専務理事なんかを務めさせてもらいまして。今でも現在の南四国個人タクシー、高知個人タクシー、二つの高知市の組合がありますがね。 そのうちの南四国というところに。
﨑山：戦後だいぶ経ってから。全国の満鉄会もあるけど、高知の満鉄会というのがあったけど。それは全然声がかからなかった?
和雄：私が平成入ってからでしょうか、昭和の終わり。高知新聞を見てましたらね。記事の中に城西館で満洲会をやります。あれ、懐かしいよ。けんど自分は連絡する先もわからないし。連絡も全然もちろん来てないし。知っちょったら出席もさせてもらえるんじゃったにと思ったけど。その新聞記事を見たのは覚えてます。あれはもうだいぶ前のことです。確か城西館じゃったと思います。
館長：満洲の引揚者の会があって。満鉄の職員の会とかいうのはないですか?
和雄：それはなかった。ありましたかね？
﨑山：あったんだけど、入ってらっしゃらない。
和雄：ほんで知らない。私はなんのことはない。本当は新しい﨑山さんから連絡をいただいて。実はこういう何があるのが、ぜひおいでいただけんかということを。
﨑山：どうして私知りましたか?
和雄：あれは何をきっかけでしたかね。
﨑山：はは忘れた、私も。
和雄：それからね 。ええ
﨑山：お手紙いただいたかな? お手紙いただいたかしら? 私が新聞か何かに出て。それでお手紙くださったか電話くださったか、わりに最近、館長さんも新京会いらして下さったわね。そのころです。
和雄：5、6 回出席させてもらいましたね。さあ来年もと思いよったときに私が大病しましてね。暮れに。
﨑山：最後の時にいらしてないんですよ。辞めてだいぶになりますけど。最後に根川さんが来てくださっていろいろしてくださってね。なかなか盛大に最後の新京会ができたんですよ。たくさんの方がいらしてくださって。
和雄：50 日間入院してましたね。

﨑山：なんぼ連絡してもおいでんでね。ついこの間まで行方不明者だったんですよ。
和雄：﨑山さんはよく私の自宅をご存知なんですけどね。8段の階段がありまして、車庫が道路に面してあって。そこからこう上がって、くの字に曲がって玄関へという家の構造になっています。
﨑山：ちょっと大変よね。
和雄：家族の者がここを修復した関係で 、もし退院しても車椅子ということになると、とてもじゃないが 車椅子の状況にはないというので 鴨部というところへマンションを構えまして あそこじゃったら車椅子で エレベーターですぐって上がりね。そんなこんなで現在マンションに。
館長：じゃあ満洲時代の関係者との付き合いというのは、あまりもうなくなってます?
和雄：もう一切というか、ご存知なのはこの﨑山さんでね。
館長：満洲時代のお話とかは ご家族の人にはします?
和雄：しますけどね。もう全然うわの空で。それからどうしてその後。そういうのは一切乗ってくるような話ではない。こちらは本当にもう 2、3度死ぬ場面に会いましたけどね。あっけらかんとしたもんですわ、家族の者は。まあ大変じゃったね。いうくらいのもんで。もうそことり、ここととりの一つもまとまりのない話ばかしで申し訳ないんですけどね。
館長：いえいえ、じゃあ満洲時代の物というのは、もう本当に何も残ってないですか?
和雄：何にも残ってない。
﨑山：あのほら、満洲から手紙を出してるでしょう。そういうのをお家で置いてません? 写真とか。写真とか手紙など、吾北の家とかに送ってるでしょう。
和雄：そういうね、両親がそういうね こまめにいろいろ収集したり、収納するなんじゃなかったので。農業が忙しいし。第一、自分自身のこの国の勲7等の瑞宝章もね、どこへどうなったら無いがです。それとあの金鵄勲章いうてね 小さい十字のね、ほんとちっこいですがね。それもありよったのが、どこへどうなったやら。自分のことでさえそれですもん。
﨑山：ありゃまあ、そういうのが欲しいのよ、見せてもらいたいのに。
和雄：もう一つあるのは、菊の桐か何かの紋章が一つあるだけでね。あとはほら、大同元年ですかね、満洲が建国した時の。この時の記念硬貨。真っ黒いちょうどこのくらいのね。
﨑山：持って帰ってきました?
和雄：私が保存してます。要は勲章、三本線が入った下へぶら下がってます。ああいう感じで。
館長：満洲からほんとに持って帰ってないですよね？
和雄：ほんとの着の身着のままで。何か、こうほら、一つかでもね、思い出に残るものとか、そういうものをね、形のあるものをと思うけど。何にもないです。
館長：やっぱり満洲からの引き揚げの方にお伺いしたら、やっぱり開拓団の人とかはいろいろ大変だったみたいですけど。やっぱり技術を持っててね。交通の問題ですから大事にされたんでしょうね、敗戦後。
和雄：大きな声では言えませんけど。開拓団の方は大変でしたね、ほんとにね。話を聞くだけでもほんとにね。悲惨な目に遭ってますわね。
館長：どうもありがとうございました。
和雄：いえいえ、ほんとにもう。そことりここととりの 。
館長：ほんとに、やっぱり記憶力がすごいですね。
（中略）
館長：吾北は、お家はどなたかがついでいらっしゃるんですか?
和雄：いや、もう、家自体も自然消滅というかね。 もう、だんだん田舎はね、ご存知でしょうけどね、 昔、何百軒あったりあるところも何十戸になったり、柳野のところもご多分に漏れず、同じような状況です。 ひとことで言えば、過疎化ですかね。本当に人がどんどん減って。

（中略）

和雄：﨑山さんのおっしゃる通りのお方で気安くお話ができてよかった
館長：こちらこそ、毎回毎回皆さんにお話ししていただけるのは…
和雄：残念なのはいきませんわ そことりここととりの断片的な話 しかできませんので。
館長：お聞きしていると決定的場面の 食べ物で皆さんね、記憶があるんですよ。あそこで

何を食べたとか、あの味がとか、あの匂いがとかいうのは やっぱり飢えていた時代ということなんでしょうか。
和雄：そういうことでしょうね
﨑山：その戦後は宿舎で普通に食べれました？戦前と同じように食べ物は。
和雄：えっまあ普通に、だから自分なりにあまり大きな声では言わんねえ。もう恵まれていたなと思ってね。特に開拓団の方のみじめな。本当に。ほとんどは家族連れになるのでね 。
﨑山：満鉄でよかったんですよね。他の会社ってほとんどないでしょう。官公庁もないですしね。だからみんな失業してるけれど。満鉄だし、おまけに技術者っていうのは強いですよね。
和雄：まあ幸せなことに。帰るまで同じ職場で、同じ仕事でね。
﨑山：いろんな方がいらっしゃるから。
和雄：けんど、一番最初にソ連兵が 肩へチエッコ機銃で。何言うのか知りませんけど。あたしらあはチエッコ機銃って言った。
﨑山：あれね、今それをお聞きしたけど あたしらぁはマンドリンって言ってたんです。
和雄：ちょうどこのくらいのが重心の引き上げの ちょっと先ついてるような感じでね。割と重心の短い丁でね あれでバリバリっとやられるんだよ。生きた気持ちがここちがせざった。みんなずらっと並んでね。相手は図体の大きい人でしょう。
館長：何度か覚悟はされたでしょうね。
和雄：えっもう２度３度くらいはこれでダメかと。手りゅう弾を出された時も。俺の人生もこれで終わりか・・。もう一つは暴動という、それはあくまでも噂で終わったけどね 。本当にやられてたら何をせられるや分からんしね。そんなこともなかったし。
﨑山：本当に一般の中国人って本当に貧しかったから。もうこの際日本人から何もかにも取ってやろうということだったしね。前ここで江川崎の開拓団の武田さんが話して。去年武田さんと一緒に満洲に行ったんですよね。その時の話してたけど。ここまで取らなくてもいいだろうというぐらい。本当に女の人もパンツ一枚だけ。真っ裸で靴も取られて。本当にもう見られたもんじゃなかったってね。暑い中をね、地面が、もちろん舗装されてませんわね、その頃は。吉林までの６日間も。暑い土のところは 。本当に徹底的に、何でも欲しかったんでしょうね。下着でも何でもね。本当に裸で 私らはもう、このパンツも履いていないでマータイ（麻袋）に穴を開けて。マータイあれをこことここと穴を開けてね。
和雄：かぶるようにして
﨑山：そうそうかぶって 穴から通すと。ここのところをこうして大きいでしょ。それをこうやってね。
和雄：戦後に言いました、終戦後。日本は女性がほとんど坊主頭になるような 中国でも何かしないといけないと。そんな噂がねえ
﨑山：私らも坊主頭になりましたよ。だからもうみんな困難して帰ってきてるの見てますからね。私駅の方はもちろん行ったことないですけど。うちの方は小学校に入りましたからね。初めのうちだけ私なんかも、おにぎり作って持って行ったりしたけど。だんだんもうそれが入ってきて、治安が悪くなったから ・もう女の人は出られんって言うんでそれっきり。

（中略）

和雄：本当に、つたない話しかできませんでえらい申し訳なかったです。貴重なお時間さいていただいて有難うございます。
館長：こちらこそ貴重なお話ありがとうございました。
﨑山：ご苦労様です。お陰様で。
和雄：ああ良かった。

【聞き取り記録】「奉天・大連の生活と引き揚げの記憶（岡本敏之）」

文字起こし：小野由美子

（校正：楠瀬慶太、﨑山ひろみ）

聞き取り対象者　岡本敏之さん（昭和 11 年奉天市生まれ）
聞き手　　高知城歴史博物館館長　　渡部　淳
　　満洲の歴史を語り継ぐ高知の会　﨑山　ひろみ
　　NPO 地域文化計画　　中村　茂生

岡本敏之さん

渡部：数年前に私、満洲会にちょっと寄らせてもらったときに、﨑山さんとお話しして、満洲からお帰りになった方、いろいろ資料を持って帰れるんだったり、写真もないもんで、 記憶を語ってもらっておこうということで、月にだいたいお一人ずつ来てもらってお話しして、もう 30 人くらい?
﨑山：いえいえ、35 人目。
渡部：特に戦争の話とか、主題を決めてのお話ではなくて、本当に満洲に行ってどういう生活をされたとか、どういうものを見た、考えたとか、ご自由にずっとお話をしていただこうと思ってます。
岡本：子供ですのでね、子供ですから、戦争の話もないですわ、全然。
渡部：まず、お生まれは?
岡本：11 年生まれです。
渡部：11 年、何月?
岡本：5 月 29 日です。
渡部：どちらでお生まれ?
岡本：これは、奉天の青葉町で生まれています。
渡部：そもそも、お家が満洲に行ったというのは、どういう経緯ですか?
岡本：私の父は熊本の人間ですがね。熊本の人間で、渡った時は警察で渡ったんだと思います。私たち物心をついた時には、お父さんの務めはと聞かれたら、 鉄路警護隊司令部と言えという名を教わりましてね。父の務め先へ何回も行ったことがあるんですが。父はそんなことで渡ったと思いますが、熊本から渡ったんだと思いますが、 母はですね、満洲生まれなんです。 大連生まれなんです。じいさんばあさんの代に、じいさんばあさんが、安芸の人のようですが、高知県のですねそれで、あんまり話をしなかったけれども、どうも聞くところによると船が沈没して、持ち船が沈没して、ちょっと生活ができなくなって。満洲へ逃げたみたいな話を、母の兄弟、伯父になりますがね。伯父に聞くんですが、母はその兄弟の末っ子で、大連で生まれているわけです。大連の母と奉天の父とが、奉天の大広場の近くのヤマトホテルで結婚式をしたという話です。私は 5 人兄弟の一番上なんですけれども、上 4 人が奉天生まれです。
渡部：それは向こうで何かお知り合う機会があって、結婚したということなんですかね。
岡本：どうしてでしょうね、そこのあたりは聞きません。世話をする人があって、結婚したということですけれども。
渡部：じゃあずっと、ご兄弟 4 名は奉天で生まれて、奉天で育ったということですか。
岡本：そうです。一番下は、1 歳ちょっとでしたのでね、引き揚げが。終戦直前に生まれまして、歩くようにはなっておったんですが、一家全員がパラチフスにかかりましてね。 動けなくなって、父も母もみんな寝たきりになって、私と妹がうんと軽かったんですが、私がだいたい家の飯炊きをして。飯炊き言うても、米食うなってことでしたからね、日本人は。米を箪笥の下の方へ少しは隠してあったけど、普段は米を食べずに、高粱とか粟とか、大豆とか、そういうものを炊いて、おかゆにして食べたんですが、それまでは、終戦までは炊事はもちろんガスでしたし、トイレも水洗便所でしたね。ですけど、トイレは使えたけれども、ガスは止まってしまったし、それで仕方がないから炭でご飯を炊いたり、石炭で炊いたりしましたね。

渡部：奉天の住所はどのあたりなんですかね。
岡本：五条通り。
﨑山：うちと近いですね。
岡本：そうですか。青葉町。ちょっと見てくださいよ。青葉町というのがこの通りじゃないですかね。どこかに書いてあるかな、青葉町って。これは平安広場からこう来たところだったと思うんですけどね。これが五条通りかな。南五条通り。南五条通りの 30 番地ですから。ここですね。ここで 5 歳の時まで育ちました。 5 歳の時まで育って、それから、5 歳の時に転宅をしまして。紅葉町。
﨑山：紅葉町?
岡本：はい、紅葉町です。
﨑山：ここが最初のところですね。
岡本：そうです、そうです。紅葉町の 20 番地、八条通り。これは八条ですかね。パーマーロ（八馬路）ですね。20 番地、これですかね。ここで引き揚げまで育ちました。ここから高千穂広場に行って、こう行ったところ、ここに小学校。これが葵小学校ですかね。ちょっと見えないですね。ここから高千穂広場に行って、ちょっと斜めに入って、こう行って突き当たりだったから、どんどん・・・これですね。
﨑山：お父さんの職場というのはどこ?
岡本：父の職場はね、大広場を通り越して、こう行って。鉄道の近くじゃないですか。白菊町。鉄路だから。白菊町というのがあったんだけど。ちょっと待ってくださいよ。こう行って、こう行って、こう行って、こう。ずーっとまっすぐ行って。
﨑山：ちょっと字が見にくいですね。
岡本：そうですね。ちょっと、字がはっきりしない。大広場を通り過ぎて。これ奉天神社ですかね。ここが公園。どっか、この辺でしたよ。道路のこっち側でしたのでね。奉天神社のすぐ近くの。ちょっとわからんけどね。
渡部：この辺り?
岡本：そうです。そこの辺りです。私割合、町の中は子供の時はあっちこっち行きましたのでね。
﨑山：頭に入ってるんですね。
岡本：頭に入ってるんです。今度満洲行った時の、タクシーに乗ってあっちこっち行くのに、こう行ってくれ、こう行ってくれ。
渡部：お家は官舎みたいな?
岡本：そうですね。官舎だったんでしょうかね。全然わかりません。 この 5 歳まで育った家も行きたいと思ってね、行ってみたんですがね、そこは安宿というか、ホテルといったらおっこうなね、安宿になって、人が何人も泊まってました。
﨑山：日本の家はそのままで？
岡本：はい、そのままで。もちろん改造はしてますけど。かなりひどい家におったんやけど、あまりひどいとも思わんかったけども。それで家の真ん中にペチカがありましてね。「いやあ、私はここに何十年か住んでるけどペチカなんてありませんよ」というけど、上の方見たら、こう、ペチカのあった穴がちゃんとね残ってる。「こりゃあペチカがあったでしょうが」と言うと、「そうやねえ」と。間違いなかったですね。
渡部：じゃ、その辺りというのは今でも当時の家がわりと残ってると？
岡本：残ってます。行ったのは 1987 年、もう相当前ですね。
渡部：30 年
岡本：そう 87 年だったと思いますが、それでその終戦まで育った後の家ですね。家はね、もうのけられてました。そこはね、いわゆるビルで、住宅仕切られた家だったんですね。さらに小さく仕切られてましたね。ありゃ、この家とこの家が僕の家だったよと思うて、家のところでね。ほんですみませんが見せていただけませんでしょうかと中へ入ったところが、ガス台があったなあというところに全然ないし、ここはお風呂だったなあというところに全然ないし。変わってましたね。家ははっきり覚えていますし、それから表は全部ぴったり閉めましてね、裏から出入りするという。ロスケ（露助）、ロスケが来るのでねえ。で、枕木で高い、何というか、塀を作って入れんようにしておったんですが、そこからこう入って。あのここがスチームを焚く棟はべつにあったんですが、このビルの中にスチームを焚く棟は別にありましてね。そこでまあ、にいやんという中国人が焚いてくれよったんですがね、ストーブを。ストーブやないスチームを。ほいたら朝になったらカンカンカンという音がし

てスチームが通ってくるんですね、ずっとビルの中へ。ここに焚くところがあったよと思うてね。ここからこう入ってまっすぐ突き当たったところが家だったなあと思うてね。だけどね。やっぱりそうやって二つに分けられるともう家の中の様子がすっかり違ってました。あの、中国は家は割り当てられるんだそうですね。あんたはここに住め、あんたはここに住めとね。
渡部：国家から支給されるという・・。
岡本：ええ、そうそう。家賃なんかはいるのか知らんけど。いってもとても安いんだろうけれども。人数が増えたりしたら、ここは狭いから別のところに住まわしてくれいうようなことを頼めば別のところが与えられるという話をね、その、通訳に聞きました。というのは私、87 年の渡航がツアーがあったんですよ。ハルピン、新京、奉天、大連とこの 4 つの都市を訪問するというので、私、おじはハルピンにおりましたし、新京にもおりましたし。おじというのは父の兄弟です。父の兄弟みんな満洲に行って散らかってましたのでね。ほいでおじのいたハルピンというのはどんなところだろう。行ったことあると言うけれども自分の覚えにはないなら行ってみたいなあと思って行ったし、それから新京というものおじがどんな生活をしよったんだろう、ちょっと行ってみたいなあと思って行ったし、それから奉天へ行って、最後に大連へ、母の故郷である大連へ行ったんですがね。大連は母に連れられてよく行きましたのでねえ、だからうろ覚えに覚えとったんですが、大連はこういうところにあったなあと。光明台という、光る明るい台と書いた光明台というところでしたが、大連商業という商業学校がありましたが、商業学校の裏を通って坂をこう登って、それからこうたらたらっと下りたところにじいさんばあさんの家があったんですわ、母の、ですね。それで、ああここへ来るときはいっつも馬車で来たなあと、こう登って来たなあと。それで、こうたらたらっと下りたら、ないんですよ。だからね、町の中は変わってないんですね。町の中は変わってないんだけどちょっとこう外れたところはもうすっかり変わって分からないんですね。
渡部：子どもたちはその辺りはずっと、遊び場というか、あれですか？
岡本：そうですね。その時は缶蹴りしたり、かくれんぼしたり、それから本当に悪いけれど、クーニャンを追っかけてね、クーニャンというのはだいたいくず拾いをしてましたのでね、そのクーニャンを追っかけて歌いながらこうして「アイヤアイヤ」言うて逃げるのを喜んで追っかけたりして、悪いことをしたことですよ。
渡部：じゃ、そこら辺住んでるのは日本人ですけど、ちり拾いとかに中国人がこう・・・。
岡本：そう、それはね。例えばマーチョ（馬車）とかヤンチョとか、人力車ですよね。そういうのは中国人ですし、それから煙突掃除。あの、こんなワイヤーの先にモジャモジャのついたこれでね、これをずーっと煙突の掃除をするわけですね。煙突掃除をする人は中国人です。それから豆腐売りやらがんもどき売りやら。「とうふ～、がんもどき～」いうて売りに来る人は中国人です。その中に、ビルの中に住んでいるのはスチーム焚き以外は日本人です。ちょっと離れたところに中国人が住んでいるところがあったと思います。そこへは私たち行きませんでした。
渡部：クーニャン追いかけて。
岡本：そう。悪いことしたことですが。
渡部：公園とか何か動物園とか何か、そういうところとかは・・・？
岡本：動物園とかは全く覚えがありません。あの、長浜公園というところが、えーっと、（地図を見ながら）ここが・・あ、長浜公園というのがここにありますね。これはちょっと私、分かりません。砂山がありましたけどね。砂山がこう・・・。長浜公園からこう流れてきて・・。ちょっと分かりませんね。この砂山がね、そこへは遠足に行ったり公園へ遊びに行ったりはしましたけども、まあ、この広場へ、広場がこうありますのでね。朝日広場とか高千穂広場とか平安広場とか、広場へは遊びに行ったりはしましたねえ。
渡部：（地図を指して）ここら辺は行ってません？
岡本：そこら辺はちょっと手に合いません。
﨑山：奉天の故宮なんかには？
岡本：故宮なんかにはねえ。
﨑山：遠足に行きました？
岡本：いや、ちょっと手に合いません。
﨑山：ああ、そうですか。
岡本：ここ、遠足でここまで行くいうたらね、ちょっと。

﨑山：歩いてはちょっとねえ。
岡本：ええ。3 年生、終戦が 3 年生ですので。3 年生にはちょっと。鉄西というのは鉄道から西が鉄西だったんですが、鉄西の方には遠足で行きましたけれども、どこか捕虜の収容所があったんですよ、鉄西に。そこで捕虜が働かされていたんですよ。それは遠足で行って見たんです。捕虜が働いてるというのを見たんですが。
渡部：捕虜というのは何人？
岡本：何人か知りません。みんな外国人に見えますからね。ロシア人であろうとヨーロッパ人であろうと、アメリカ人であろうとね。
渡部：白人集団？
岡本：そうですそうです。区別はつきませんでした。　捕虜が働いているんだということは聞きましたけれどもね。
渡部：お父さんはここら辺で働きに行って、お母さんはずっとお家に？
岡本：家庭人でした。親父は鉄路警護隊の軍司令部で覚えさせられたけれども、どうもね、今で言ったら鑑識みたいなのではなかったかと思います。というのもしょっちゅう写真をやってましたしね、「これがスパイの写真だ」とかね、「これがどうかしたところの指紋だ」とか言ってましたのでね。それから終戦になったときにうちに映写機ですかね、映写機が 7 台かそれくらいありましたのでね。親父は相当好きだったもんですね、そういうのは。　だから私の子供の時は、ずっと小さい時から映っているんです。しょっちゅうトーキーじゃないですけれどもね、無声ですけれどもね、それはずっと見せられました。　大きくなってからね、子供の時はこうだった、こうだったってね、見せられましたけれどもね、それはもう終戦と同時にぽいですわね。
﨑山　この写真はみんな実家の日本へ送っている方が結構いらっしゃるから、おじいさんおばあさんが大連じゃ・・。
岡本：本当にね、たった一人親父の弟が熊本に残っていましたので、そこへ送ったのがかろうじて残っているぐらいのもんで。あと母方は、じいさんばあさんはみんな向こうへ行っていますのでね。
渡部：あまり残っていないんですか。
岡本：残っていないんです。　私のいとこ、母の兄の子供が日本へ早く帰っておって、そこへ行った写真なんかがぽつぽつ帰ってきて、私は敏之ですが、敏坊と言っていましたが、敏坊に戻してやろうという写真をね、戻してもらったのがね、何枚かはうちにあります。
渡部：小学校はそこら辺は何小学校?
岡本：葵小学校。葵在満国民学校ですわね。
渡部：大きい学校です？
岡本：7 クラスありましたからね。40 人ぐらいおったんでしょうかね。
﨑山：50 人ぐらいがザラでしたもんね。
岡本：7 クラスあったから。1 学年で 350 から 400 人ぐらいだから、4×6＝24。　大きいですね。ちょっと辺鄙の方の学校だけれども、それぐらいありましたね。
渡部：やはり満洲で生まれた人と、日本から来た人もだいぶずっと・・・。
岡本：私は学校ではね、日本から来た人は言葉が違うから分かるんですよね。それはね、クラスに何人かいたぐらいでした。みんな向こうで生まれたんじゃないでしょうかね。いわゆる標準語かどうか分からんけど、標準語ですよね。例えば、お弁当へ握り飯持ってきておいて、もういけんとか言う友達がおったら、もう食べられんということだよね、お腹いっぱいで。そんなの面白かったんですよね。そういうね、日本から来た人はちょっと、東京とは限りませんのでね。九州とか四国とかそういうところはやっぱり多かったんだろうと思いますよ、満洲に行ったのはね。　言葉が違うから面白くて。そんなのは分かりましたけど、だいたいは向こうで生まれた人だと思います。先生はね、先生はぽつぽつありました。例えば、東北の先生だったら、歌を歌うのに、「えもんぶくろのふいふいて」、慰問袋の笛吹いてというのもね、そういうのですよね。みんなが真似してね。だから東北の先生がおったり、九州の鹿児島の先生がおったりして、それはね、標準語を使ってもやっぱり違いますよね。みんなが先生の真似をしたんですよね。
渡部：引き揚げの前に日本に来たことはあったんですか?
岡本：いや、私はないです。
﨑山：お父さんのご両親は熊本にいらしたんですか?
岡本：引き揚げたときはね、もうばあさんだけしかおりませんでした。

﨑山：そしたらおじいさんおばあさんというのは、大連にいらっしゃるおじいさんおばあさんが身近な方なんでしょうね。
岡本：父が明治 35 年生まれですのでね、母が 42 年ですので。 じいさんばあさんは何年後でしょうね。 どうせ明治は明治だろうけれども。
﨑山：大連のおじいさんおばあさんも引き揚げていらっしゃいましたか?
岡本：いやいや、大連で亡くなりました。 私もうろ覚えに覚えているぐらいです。じいさんの亡くなったときの葬式とか、ばあさんの亡くなったときの葬式とかいうのはね、覚えています。でもね、行ったことは覚えていますけれども、それが何年だったか知りません。 相当大きい葬式したなという。その母の兄弟の一番上の兄弟が、 割合手広くお醤油とかそんなものお味噌とかを作っていましたのでね。 国司といいますが、日本の国の国という字に司と書いて、その嫁が光といいますが、この光おばあさんは須賀から来ているんです。 須賀から。としろうさんの姉になるのかな。
﨑山：え、本当に?
岡本：須賀から来ているんです。国司と光とが作った会社だから、国光コンス(公司)、向こうは公司言うんですかね。
﨑山：公司、はい。中国はね。
岡本：公の司と書いて国光公司というのを作りましてね。 で、お醤油やらお味噌やら作って売って、で、かなり幅広くこっちから逃げていったわけだけど、向こうではそうやって事業を起こして、上海にも店を持つという話ですよね。 だから、じいさん、ばあさんの家に行った時には、家の周りでいっつもクーリー…クーリーとどんな字が書いてますか?
﨑山：クーリー(苦力)、労働者のことね。
岡本：クーリーがね、いっつも仕事をしとったんです、家の仕事をね。
﨑山：苦労の苦という字に力という字が書いてある。
渡部：子どもの頃は内地ではだんだん厳しい生活になるんですけど、奉天は戦争の雰囲気というのはだんだん…。
岡本：代用食にバナナを食べるというのは贅沢だねと言われましたから。昔はバナナは今でこそ安いけど、昔はなかなか高級品でしたからね。で、バナナを代用食にするからね、贅沢だねと言われた覚えがあるし。それから、親父と大連の近くへリンゴ買いに行くことで、休みの時にリンゴ買いに行ったら、こんなかごを二かご、親父が軍人でしたから、どこ行ってもみんながこうやって、かご二かごをひょいと汽車に乗せて持って帰った覚えがありますし。それから、家の中には、ちょっと段ボール箱みたいなこんな箱がありましてね、その中にいつでもお菓子がいっぱいあったんでね。友達が来たときはそっから出してあげたりしたもんだからあんまり窮屈な生活ではなかったように思いますねえ。親父は毎月おふくろのところへ、ばあさんのところへ家へ送金しておったと思いますので。あんまり苦しい生活ではなかったんじゃないかと思います。
渡部：学校とかでは戦争の話とかだんだん増えるとか・・・。
岡本：それはもう毎日毎日敵機を撃墜、何機損害をもたらしたとか、そうやって聞かされて、まあ嘘やったんでしょうけど、おそらく我が方の損害は小さくですよね。敵機を何機撃墜したとか、戦艦を何隻撃沈したとか、そんな話をうんと聞いて。絵を描くいうたら水兵さんの絵か、戦争でこう、船を沈める絵とか、アメリカの飛行機がこう舞い落ちていく絵とか、そんなのばかり描きましたわね。もう決まってましたわね。
渡部：先生たちはだんだん男の先生が少なくなるとかそういう・・・。
岡本：それはね、あんまりね、思わなかったですね。そういうことをね。
渡部：いやまあ、教育とか学校でなるのはやっぱり戦争一色みたいな感じ。
岡本：ええ、厳しくなる前は運動場の周りはずーっとちょっと高いところを作って水を撒いてスケートリンクを。ねえ、天然で凍りますから。スケートリンクでスケートしてましたから。ちょっと厳しくなってきてからはずっとこう、壕、防空壕を掘りまして、壕を掘って敵と味方に分かれて戦争ごっこ、あの、囲み合いをしたり、あるいはその、藁人形を銃剣で突く、そんな練習をしたり、そんなことをやりましたねえ。学生の頃、3 年生のころ、木剣振り、それから銃剣突き、そんなことはやりましたね。歌はだいたい軍歌です。
渡部：日本に来たことがなくて、教科書は日本の教科書ですよね。
岡本：そうです。
渡部：そうするといろいろ見たことがない内容とか、日本のお話といってもピンと来ないとか、そういうのはなかったです？

岡本：何とも思いませんでしたねえ。「あかい　あかい　あさひ　あさひ　こまいぬさんあ　こまいぬさん　うん」あの教科書ですかねえ。
﨑山：私は 1 つ違う。私らあは「さいた　さいた・・」。その後が「あかい　あかい・・」
岡本：「さいた　さいた　さくらがさいた」ですね。
渡部：例えば小学校も上級生になるとその先はみんな地元の中学とか女学校へと？
岡本：そうです。中学校は４年生ですか、５年生ですか・・。中学校の４年生がね、よく挨拶に来ました。挨拶に来たというのはね、予科練に行くわけですね、中学４年生。だから６年済んで４年だから、高校の１年くらいですか、今で言えば。４年生が「にっくき米英をやっつけて参ります」言うてからね、小学校へ。いわゆる出身校へね、挨拶に来ましたがね。出征の前にだから、「ああ、兄さんたちは行くんだなあ」思うてね。自分も中学校の４年か５年になったら行くぞ、ということですわね。
渡部：奉天では中学校とか女学校とかそれなりの数はあるんでしょうね。
﨑山：ありますよ。
岡本：中学校、女学校どれくらいあったか知らんのですよ、私。そこまでね、やっぱり３年生だからね。
﨑山：奉天の日本人の人口は多かったと思いますから、だから新京よりももっと多かったんじゃないでしょうかねえ。
渡部：ソ連が入ってくるとかいう話はどういう形で耳にしたり現実が変わっていったりしたのか・・
岡本：いや、それはね、終戦になったのは８月ですわね、ちょうど学校は夏休みで。３年生から中国語があったんですよ。いわゆる「センション　ライラマー」から習うんです。先生がおいでになったという・・。それからなんですが、それを習い始めてすぐ夏休みになって終戦になったわけですね。それで終戦になってしばらくしてまだ夏休みが明けないうちにですね、行進の音が聞こえだしたんです。いわゆる「トラスパー　トラスパー」という、ソ連兵が行進をするね、靴音が聞こえだしたんですよ。入って来たなと思って隠れて見ておったんですよ。そしたらそういうソ連兵の行進がありますし、戦車が入ってきますし。私、奉天におるときに空襲 2 回しか知らんのです。2 回、B29 が来たというので、爆弾落としたというので、破片をね拾いに行ったんです。破片が落ちてるということでね。空襲警報があったのは 2 回だけで実際 B29 の飛行機は見なかったんです。それくらいのもんでした、空襲というのはね。そんなにやられんうちに終戦になってしもうた。ま。ソ連兵がそうやって入ってきて、やがてしたら時計取られる。ダワイダワイというのは来いっていうこと？くれということか知らんけどダワイって言うてからチャスイって言うんで時計を取られるいうから、時計したらいかんと。そのうち女は引っ張られるから女はみんな丸刈りになって。丸刈りになっても分かりますわね、男か女か。それで畳を上げて畳の下へ隠れるようにしてましたがね。もし家に入られてもその前に畳の中へ隠れるようにと。それからまず、ビルの中に入ってこないように枕木で高い塀をこしらえて、その上に鉄条網を張ってですね。そういうことをしてましたけれどもね、時々入られましたね。どうかした拍子に入って来る。やられたってね、何か取られたっていう話を聞きましたけんど。まあ 子どもですから、それ以上のことは聞いてないんです。
渡部：終戦というか、戦争が終わったとか負けたとかいうのはどうやって知ったんですか?
岡本：それは、　近所にずっと軍人の家庭がありましてね。友達に、上級生に、日本負けたらしいよって聞いて、そんなことあるかいというようなことで聞いたけど。負けたらしいということを聞いたし。ロスケが、ソ連兵が入ってきだしたら、もうどうしようもないですわね。それから、中国人の暴動が起きているとか、国府軍がいるところへ八路軍が入ってきたんですがね。いわゆる共産党の兵隊が入ってきて、国府軍が逃げたとかで、　八路軍が入ってきたから、これはまた悪いことをするだろうと、私らも疎開したことがありましたがね、疎開というのは、学校へ避難するわけです。学校へ避難したことはありました。まあ学校へ避難しても、食べるのも大変ですわね。分からんけど大変だったと思いますが、それをどういうふうにしておったかということは、私は知りません。子どもでしたから。ちょっと衝撃的なのは、中国人が入ろうとして、刀で峰打ち、峰打ちと言いますかね、刃のないほうで。峰打ちをした、私それを見よったんです、遠くからですけどね。切ったかなと思ったところが、あれは峰打ちだったということでね。けど、負けたとはいえ、やっぱり中国人はやしべられとったんですね。中国人はそれなりに偉くなって、日本人に仕返しをしようと考える人もいるかもしれんし、日本人に世話になったからという人もいるかもしれんし、そこら辺り

はどういう風なのか分かりませんけれどもね。一時的に学校へ避難して、暴動が収まったから、家へ帰ってもいいということで帰った覚えはあります。それから、ハルピンとか新京とかにいた人がだんだん南下をしてきて、大連あたりから船に乗りますからね。だんだん南下をしてきて、家がないというので、家へ入らせてくださいと言うてね。私のところへも、もう全然身内がない人ですけれどもね、避難をして入ってきたことがありましたね。ちょっとお話をしたように、一家全員がパラチフスになりましたので、寝たきりになって、それでちょっとよくなりかけたところに病院船が出るということで、病気の人を先引き揚げさせたんですね。その病院船に乗りましたのでね、逃げてきて疎開して入っとった人のもんですわ。どうなったか知らん言うてね、もう何もかもほったらかして、リュックサック一つで。あれリュックサックは近所の奥さんが帯芯で作ってくれましてね。もう汚いから家内が捨てようとか言うんですけれども、私の思い出はもうそれだけしかないですからね。
渡部：まだあるんですね?
岡本：あるんですよ。
﨑山：いずれいただきに行きます。
岡本：いかんいかん。それだけは置いといてくれ言うてね。小学校 4 年生の時にね、持てるだけで。相当きつかったですがね、もういっぱい持たされてね。母は歩けなくなった子どもを抱いたので、荷物がそう持てませんしね。もう親父はリュックの上に毛布をかけて、 ようやく持てるぐらいで、私の妹や弟らあもみんなリュックを背負わされて帰ってきましたがね。
﨑山：何月かしら、ごめんなさい。
岡本：7 月に出ました。
﨑山：翌年の?
岡本：ええ、翌年の 7 月に出ました。7 月に出て、8 月に日本へ帰り着きましたね。いや、大した・・1 週間ちょっとだったと思います。「見えたぞ、見えたぞ」と言ってみんなが喜んでね。こんなにこの日本の国は緑の島だと言って。向こうでは、私は太陽は地平線から昇って、地平線に沈むと思ってましたからね。緑の島だと言って、緑の島が見えたぞと言うので、船の中でみんなが喜びましたのでね。そんなに嬉しいもんかなと思ったんですけれどもね、みんなが泣いてね。バンザイバンザイ言ってたんですが、その病院船で帰ってきました。だいたいは、佐世保へ上がりましたけれども 検疫を受けますわね、病気がないかというのを検疫を受けて。病気を持っとったら船ごと停泊させられるわけですよね。上陸できんわけですよね。まあ幸いなことに一人もなくて、あれお尻へ妙なもの突っ込みますがね、 ガラスのね、突っ込んで便をちょっと取るんですがね。それで検便をして、OK だったら上がれるわけですが、 まあ幸いなことに、それが一週間くらい、一週間もかからなかったですかね、4、5 日でできたんでしょうかね。だから何日かかかって日本に来て、そこで検疫を済まして上陸。 とにかく 7 月に出て、8 月に上陸しました。
渡部：それは、奉天からどこに南下をしていくんですか?
岡本：大連の近くに、大連の近くに葫蘆島（コロトウ）というところがありましたからね。ここでしたかね、葫蘆島は。
渡部： こっちは大連で、ここは葫蘆島。
﨑山：新京から錦州へ寄って、葫蘆島から帰りました？
岡本：葫蘆島から出ました。
﨑山：近くてよかったですね。ハルピンなんかからはね、大変だったんですけどね。無蓋車ですね。
岡本：もちろん無蓋車です。
渡部：チフスというのはどういう風になるんですか?熱が出るんですか?
岡本：熱が出て、発疹が出てですね。
﨑山：パラチフスというのは発疹ですね。
岡本：下痢をして力がなくなるんですね。 同じ家におったので、おじは死にましたけどね。他、親父もお袋も、私たち兄弟 4 人、助かって。親父は一回引っ張られたんですよ、終戦になって。
渡部：私も軍の関係なので、終戦後どうなっただろうと思ったんですけど。
岡本：写真をやってましたので、もうすぐ引っ張られました。終戦になってからね、何日かということでもなかったけど、ちょっとひと月してから引っ張られて。どこへ行ったか全然、音沙汰なしですかね。さあ、どれくらいしてだったろう。ひと月くらいしてひょこっと帰っ

てきました。 どうしてたかと言うと、奉天の近くの北稜というところにおったと。そこに、北稜におって、それでシベリアへ送られるところだった。親父が病気になったもんだから、もう立ちも這いもできないようになって、捨てられたわけですね。これは病院に連れて行っても仕方ないというので、捨てられたわけですね。それでようやく帰り着いたんですね。 帰りついても家ではずっと寝てましたからね。 親父はあべかわ餅が好きだったから、私ほとんど毎日あべかわ餅を買いに行ったんですよね。終戦後、みんな働かんと食えんというので、物を売ったり、それから商売したり、タバコを売ったり、こんなこともしよったから、お餅を作る人がおって、それをあべかわ餅が、高かったですかね、あべかわ餅が 1 円かしらでしたが、よう買いに行きました。それから、晩は代用食のチェンピン。
渡部：チェンピンは何?
﨑山：さっきの文章にも書いてますけどね。このぐらいの大きさ、広い鉄板があって、その上に高粱をひいて粉にして、それを水でとろとろにして、それをこういうのに竹の柄があって、それをうまいことね。竹トンボみたいなので、シューッと広げて、丸くして、鉄板の上で焼くんですよね。だいたい焼けてきたら、パッとひっくり返して、ネギとかね。その頃は、うちは書いてらっしゃるような、ソーセージなんかなかったから、ネギとお味噌を巻いて食べて。それが懐かしいんですよ。書いてらっしゃるけど。ところがね、私も戦後に行って、あれを食べてみたいと思ったけど、それは貧乏人の下層の身分の人しか食べないから、そんなもの売ってないと言われて。同じことを書いてらっしゃるから、ああ、そうなんだと思ってね。
岡本：ちょっといいのはね、大豆がたくさん入ってるんですよ。 安いのはね、高粱とか。
﨑山：今だったら、メリケン粉のクレープですよ、あんなの。メリケン粉だね。
岡本：そう、あれを毎日毎日買いに行きましてね、中国人が焼いておったんですよね。買いに行った思いがあります。それは懐かしいんですよ。
﨑山：懐かしいからってみんな言って、どこかで買って食べたりしても、なんだ、こんなにまずいかったのかって。
岡本：私、香港に行った時に、チェンピンありませんかって聞いたら、あんなのはないって。東北のほうの貧しい家しかないから食べてないよね。それで、2 回、香港に行ったら 2 回ともそう言われて、今度、ハルピンに行った時に、ハルピンへ飛行機で飛びましてね。ハルピンを見て、新京を見て、奉天を見て、大連を見て、順々に南下してきたわけですが。ハルピンから汽車に乗って新京へ行く途中で、見渡す限りこう、高粱畑がありますわね。広いだろうと家内に見せて、もちろん家内は初めてですからね。
﨑山：奥さんと一緒にいらして。
岡本：こんなかった、こんなかったと思って。それで、ひょっと見たら、筋向かいの席で、中国人がチェンピンを食べているんですよ。 めずらしいなと思ってそばへ行って、「それチェンピンですか」「そうですよ、あげましょうか」と言ってくれたんですよ。「こうやってね、ソーセージを巻いて食べたらおいしいですよ」。そんなことは言われんち、わかっちゅうけどね。わかっちゅうけどね、ソーセージなんか食べたいことない。このチェンピンの匂いがね、もうたまらんと思ってね。こうやったなりね、もう泣き崩れましてね、懐かしくて。そうしたところが周りの中国人がみんなどうしたかどうしたかって。実はこうこうで懐かしいんだって言ったらみんなが一緒に泣いてくれましたね。そしたら、もうずっと後になって、家内がひょっこり、池川かどっかでね、ニッケイってわかります? ニッケイの入った飲み物ですかね、ひょうたん型になった。ニッケイをね、こうやって抱えて来たんですよ。「あんたどうしよう」と言ったとこが、「私はこれをね、兄弟で分けずにね、水でうまえんずつにね、飲みたかった。それで、祭りのときにニッケイをこうやってもらったけどね、兄弟で分けてね、飲まなきゃいけなかったからね。 分けて飲むのにね、じきのうなるからね、水でうまえてね、それで飲んだ」と。「うまえんずつ飲みたかった」と言うわけですよ。それで、私も知らんことはないニッケイは知ってるけれどもね、「どりゃあ」と言って。「あんまりそううまいもんでもないね」言うたところが家内が「何を言うぞね、あんたの言うチェンピンじゃってひとつもおいしいことないじゃないか」と逆襲が来て。
渡部：いや、なんかひとつでザーッと全部思い出がありますよね。
岡本：そう。私今、話をしても涙が出るわ。
﨑山：本当に満洲の人たちが集まったら、大抵食べ物なんですよ。あれを食べたね、これを食べたね、おいしかったね、タンフォロー、さんざしを食べました。
岡本：はい、甘く。

﨑山：そうそう、飴が。
岡本：赤色でしょ。それはね、今度大連行ってからね、もうさんざしを食べたいって行ったところは、大連へ行きましてね、 明日帰るという交通事故におうたんですよ。で、バスが向こうから来ておって渡ろうと思ったけど、バスが来るからやめておかなきゃと思ったら、私の前に 5、6 人が道路を渡りましてね。で、バスが止まったから、あ、こんなら僕も渡ろうと思って渡りかけたところが、その運転手は、この 5、6 人は見とったけど私は見てなかったんですね。で、ずーっと動き出して、これ危ないと思って引っ返そうと思ったけど間に合わずに、ここへバスのライトがトンと当たったけれども、まあ強く当たらんでよかったなと。思ったところまでは覚えてるんですよ。カメラをこう持ってましたからね。カメラを放ったらいかんところですから。このまま後ろへ、たんと打ったんですね。で、硬膜下出血をやって。で、それから 16 日間私知らんのです。けれども、途中で私どうしましたか、事故しましたかとかいうようなことをね、言うたそうですがね。そういうようなことはもう全然知らんのです。で、とにかく 16 日間頭が痛い痛い言い通して。で 16 日か 17 日目にぽっとこう気が付いたら、家内が言うに、もう少しでも食べさせないかんと思って、ぶどうの種を取って皮を剥いでやろうとするけれども、もう一口食べたらもうあと食べん。とにかく 16 日で 10 キロ痩せますね、人間というのは。痩せたい人は 16 日間食べざったらいいと思う。それで、よう立たんようになって、16 日寝たら立たんようになりますね。歩く練習をぼつぼつしたりして、私、教育委員会におったんですから、仕事がいろいろあるのが気になって。全部電話で連絡をして、こうやってくれこうやってくれということをお願いをしましてね、それでとうとう 3 ヶ月おりました。9 月に行ってから 12 月まで。
渡部：中国の病院に?
岡本：大連の病院におりました。それはやっぱり外国人専用の病院でしてね、とっても丁重に扱ってくれました。というのはね、そのバスがね、向こうは公務員が多いんですよ。お店の店員とか、そのようなのみんな公務員だったんですね。 その公務員が少し偉くなったら、共産党学校へ入れるわけですね。マルクス・レーニンから始まって、叩き直して出すのかどうか知らんけれども、とにかく共産党スクールというのは党校といいますかね。党の学校と書いて、党校のスクールバスだったんですよ。それだから、いわゆるその共産党学校の人がお見舞いに来ましてね、運転手も共産党学校の運転手だったんですよ。それで双方が交通裁判を受けなきゃいけないんです。私は「いや、どうぞ穏便にしてください。私もずいぶん悪いわけだし、どうぞ穏便にしてください。運転手はちょっと気がつかなかっただけで、前の人ばっかり見よったんだと思うから。運転手が特別悪いということはないから、どうぞ穏便にしてください」と申しますとそれは非常に喜んでくれましてね。 そんなに言うてくれるかということで。それでとっても大事にしてくれました。通訳の話によると、日本人を怪我させたら、おそらく一生運転手はできんだろうという話でね。これは気の毒なことをしたと思うんだよ、こっちは。ただ、外国人を交通事故にあわせたのは、近年初めてだという大連でね。 それで、いちいち聞かないといけないんですよね、北京へ。どうするかということをいちいち聞かないといけないという話でしたがね。その運転手の家族の人は、市場へ出よるとかでね、トマトなんかを持ってきてね、見舞いに来てくれましたがね。とってもありがたかったです。 お金のことも心配したんですが、 結局、居る間の滞在費、治療費、家内の滞在費、全部党校が払えという判決がおりましてね。フライトが、日本へ帰国するフライトが決まるまで病院におりなさいと。出てホテルへ行きたかったら、そのホテルの代金は自分で払いなさい、こういうことでしたね。

私はしょっちゅう国際電話をかけて、仕事の指示をしてましたので、電話料を払わないといけないことになりました。「電話料は払おうと思っていたんですから」と向こうが言いましたがね。それは当然自分が払わないといけないと思っていたから、電話料払いに行ったんですが、電話料が 5 万いくらかでした。そしたら向こうがびっくりしました。電話料 5 万いくらも払わないかんかと。その当時の医師、お医者さんの月給が 5000 円台でした。だからかなりなもんだったんですよね。急にあれから経済が発展しましたのでね。看護婦士長(フーシーチョン)さんがいろいろ相談に乗ってくれたんですが、明日は日本からツアーが来ますよって。なんで病院にツアーが来るかって言ったら、ハリの治療とか、それらの治療に団体でやってきますよって。みんなソワソワして何しよるかと思うと掃除しよるんですね。そしたら婦士長も医者もないですよ。 医者もみんなかかって掃除しよる。 日本は絶対こんなことはないなと思ってね。まどろこしかったのは、回診にくるわけですが、7、8 人多い時には 10 人くらい回診にくるわけです。なんでこんなに、日本だったら一人の先生が来て、

ちょっとお付きの人が来たり、看護士がついてきたりするけど、どうしてこんなに来るかと言ったら、外科医が来たり、神経の医者が来たり、ハリの医者が来たり、アンマが来たり、ずっとついてくるんですね。「どうですか」と言うと、言わんのですよ。別室へ行って合同談議をして、それでその結果が。まどろっこしいという、今聞いたが、返事がない。これは仕方がないかなと思って。CT 検査を受けるのに、そこの病院には CT 検査の機械がなくて、大学病院に行かないかんかった。大学病院まで車で連れて行ってくれまして、そしたら CT 検査を受ける人がずらーっと廊下に並んでいるんですよ。悪いというたち、その中をずっと通っていて、先受けるわけですね。いわゆる党校がえらいんですね、それは。そうやって優先的に検査をしてくれて、「どうですか」と言ったら、「お箸の先ぐらい、これぐらい血液が残ってます。もう一回また検査をしましょう。2 週間か 1 ヶ月先にもう一回検査をしましょう」「あんたね、2 週間と 1 ヶ月は全然違いますよ」。そう言ったら、「まあそう、慌てないで」「あんたね、2 週間か半月というのはね。15 日やからね、一日違いでね、分かるけれどもね 2 週間か 1 ヶ月先に言うたらね、全然違うじゃないですか 」そこらがやっぱりこの感覚が違うんですね 。
﨑山：マンマンデー(漫々的)
岡本：本当にマンマンデーでね あの…腹立ったこともあったけれども。これも仕方がないと思ってね、親切にはしてくれるわけだから。
﨑山：脳内出血してるんですよね。
岡本：そうです。
﨑山：それは血は取らなかったんですか？
岡本：「日本なら取りますよ。 ここでも取れますよ」と。「でもね、自然に毛細血管がこういってね 自然に取れるのは一番いいですよ」と言われてね。それもそうかなと思ってね。
﨑山：3 ヶ月かかったね。
岡本：早く帰りたいという気はありましたけどね。完全に良くなったというので帰ってきて帰国してからね、車を運転すると白線がこんなに見えたりね。それから耳がシャワシャワ、シャワシャワ鳴る。耳のそばの血が流れてる音が聞こえてるんだそうですがね 血流音が、それがシャワシャワ聞こえたり。目が、白い線がこんなになるから、車どこ行ってやらわからんから乗れんようになってですね。それは治りましたね、2 週間くらいで。じーっと治って、耳のシャワシャワするのもある日突然、おーっと天井が揺らぐみたいな感じがして治ったら、あ、聞こえない、聞こえないようになったと思うので。
渡部：外国で交通事故ってのは怖いですね。話は元に戻りますけど 満洲から戻って佐世保に上陸をして、ずっと熊本にまずは戻るんですか。
岡本：汽車で熊本へ行きまして。その駅へはおじなんかが迎えに来てくれてましたので、おじとおじの家へ厄介になって行って。ところが、ハルピンのおじもそこの家に帰って来たんですね。それから新京の、おじは引っ張られましたけどね。おじはシベリアへ行ったけれども、その家族はやっぱりそこの家へ。結局 4 家族ですか。家族は一緒の家で生活しておったもんだからね、生活ができなくなりましてね。それで 母方の親戚は、遠い親戚はあったんだけれども、親戚を頼って高知県へやってきたわけです。でもそれが小学校の 5 年生の時ですから、1 年余りしか熊本にいなくて高知県へやってきた。
渡部：お父さんとも一緒に全員で。
岡本：そうです。ついでに話をしますと 安芸へ行って、安芸の親戚の人で世話してくれる人がいて、専売公社の門番に入りましてね。いわゆる守衛ですか、守衛に入って。それから字が書けるということで、事務員になって。それから須崎の販売課長になるということで一家が須崎へ移ったわけです。そんな関係で私は中学校まで安芸におって、高校から須崎へ移りました。だから小学校 5 年生の時から来てますので、すっかり土佐弁になって。もっと今の若い人よりもずっと土佐弁話して。私ちょっと校長してましたけれども、先生が「校長今何言いました？」。古い言葉をね、何を言うのか忘れたけれども 「今何言いました？」ということをちょいちょいやったんですがね。もうすっかり高知県人になってます。
渡部：じゃあ高知に来たのが昭和 24 年ぐらいですか。
岡本：ちょっと待ってくださいよ 、20、21 年、22 年ですね。地震があったのが 21 年ですかね。 その翌年ですからね。 あの時に高知へ行こうと言ったのが地震があって来れんようになって、それで翌年に来ましたので 22 年の夏休みに来ましたね。
渡部：安芸は特に空襲を受けたりとかしてないもんで。町はもうそのままだったという・・。
岡本：安芸の町よりもね ずっと奥へ入った栃ノ木というところ あそこへ行きました。

渡部：ずっと入って行きますね。
岡本：畑山第一小学校、 畑山第一中学校でしたからね。みんな栃ノ木の畑山第一中でしたからね。第二というのが畑山の本村の方に。あそこからずっと三里ぐらい入ったところが畑山というところがありましたね。そこは第二でしたからね。
渡部：その新京だと北の方から引き揚げてきた人たちも、特に犠牲者というか、みんなは無事。おじさん一人亡くなったんですか。
岡本：一番下のおじがね。朝、頓狂なことを言うのかと思ったら、そのまま亡くなりましたね。そのおじだけで、あとは新京のおじも、シベリアに引っ張られたけれども帰ってきましたしね。ずっと遅れて帰ってきましたけど。
﨑山：30 年ぐらい前に満洲になっちゃって その頃まであんまり変わらずにあったのは。
岡本：そうらしいです。
﨑山：それからも新京はちょっと遅れてましたけど、大連が一番最初にだーっと変わってきましたね。それから奉天が変わってきて、新京も変わってきて。今奉天行ったらすっごい綺麗な町になってます、びっくりするぐらい。
岡本：行きたいなあ。
﨑山：道路も広くなって、塔が建ってますけどね。高い塔が、東京タワーほど高くないけどああいったような古い建物のある地区が一地区あるだけで。あとみんなすっごい綺麗になってましたね。行ってみたいなあ。 新京は変わった頃 今奉天はお金ができてから変わってるからね。立派です。新京は変わってきてまだお金のない頃だから もうそれこそちゃっちいビルというか なんかピラピラで 次行った時にはそのビルが壊れかかってたとか 酷い感じでしたけどね。今は随分綺麗になってきてますけどね 昔の官公庁は全部 吉林大学の経済学部とか 法学部ですとか 医学部とか 官公庁は全部大学の校舎になってますけどね綺麗になってます。
岡本：近所の子どもが道路の真ん中でこう座って 遊んでたのを覚えてますが、馬車が通ったり 時々車が通ったりしても避けて通ってくれる。私覚えてるのは、五つの時にね。石を放っちゃろうと思って、道路の向こう側へ思い切って石を放って。届かんだろうと思って思い切って石を放ったときは、向かい側の家のガラスがあって。それぐらいの道路幅だったということですね。
渡部：奉天とかで生まれて育って 急に栃ノ木に戻ったらびっくりしたんじゃないですか。
岡本：熊本へ帰りましたけどね。とにかく稲を初めて見ましたからね。夏休みに引き揚げてきたから、8 月に引き揚げたから。ちょっと稲の穂が付きかかったところ。あれ何かって言ったら稲だろうなと思いましたけどね。それから、薪で炊事をせないかん、お風呂は薪ですね。それにトイレはポットンですしね。満洲では水洗ですからね、下水がちゃんとついてますから、日本人が作った町なんでしょうね。
﨑山：本当に原始時代に戻ったみたいな感じでしたね。
岡本：ギャップはありましたね。
﨑山：熊本県の熊本弁でまたそれも大変だったんですよね。
岡本：私、今熊本へ行ってもね。向こうの言葉を聞くのは何の不自由もありません。熊本人同士が熊本弁で話すのはね、もう何でもわかりますしね、何の不自由もありません。私が言うとちょっと話し方がつっけんどんな。
﨑山：高知へ引き揚げてきた頃の土佐弁と、今はもう昔の土佐弁使いませんからね。 妹が、「子どもがいっぱい。そんなにもぶれついて大変」とか言ったら、もぶれついてなんて感じでね。昔の土佐弁使ってないですからね。あれテレビのせいでしょうね。
岡本：そうでしょうね。もぶれるとか、ささがる。ささがる言いません？こうやって。ささがるのはね、あんまり崖の縁っことささがったら怖いですから。人が集まって頭を寄せるのもささがる言いますけれどもね。
﨑山：中村さんは高知の方だけど、県外に出てらっしゃることが長いから、あんまり土佐弁使いませんね。
中村：そうですね。県外で土佐弁使っても通じないので。
﨑山：渡部館長も高知の方じゃないから。私お話聞きながら共通して、館長のおじいさんおばあさんお父さんお母さんも大連だったんです。
渡部：アルバムの中はみんな大連で。奉天神社もあったと思う。
岡本：奉天神社で私の親父は結婚式をしてますから。
﨑山：神社はどこ？ 大連神社もあるし、新京神社もあるしね。神社はどこでもありました

ね。
渡部：大連の大和ホテルと中央郵便局を作りまして。 満鉄の本社によって。みんなうちのおじ、おば連中は大連生まれ。だから言葉が大分なんですけど、大分弁しゃべれん。
岡本：大分ですか。
渡部：昭和、大正ぐらいに大連に行ったんじゃないですかね。それでみんな兄弟を呼び寄せて行ってどんどん大連に行きました。
岡本：母が大連の神明女学校に出てますけどね。神明女学校を見ていこうと思って見に行ってきましたが、「あんたいいところ来た」みたいで、「もう二ヶ月ぐらいしたらこれ壊しますよ」って言ってました。
﨑山：神明女学校の英語の先生が、今の丸の内、私なんかの頃は高知高女って言ってましたけど、 そこの英語の先生になってたんですよ。
岡本：あ、そうですか。
﨑山：神明女学校自慢して自慢して。
岡本：あ、本当。
﨑山：そこは優秀な生徒だったとよく言われました。それこそ高知教会の信者で。
岡本：あ、そうですか。
﨑山：もうね、お話してたらね、共通のお話がいっぱいあってね。教会のこともですし、それからフラワーソンクラブ合唱団も一緒だった。妹さんもそうだったとかね。もうなんかね、いろんな、お互いに気がついてないだけで、あっちこっちで共通なお話があって、すごい面白かったです。
渡部：こういう満洲の話とか、ご家族とかにお話はすることは?
岡本：いや、しませんね。
﨑山：ご両親から聞くことってあんまりありませんでした？
岡本：ないですね。家内が、こんばんは粗末なご飯ですみません、と言うから、何が粗末なことがあるか。もう引き揚げてから苦労してから、全然そんな思ったこともない。それで引き揚げの話をしたり、満洲での話をしたりはしますけれどもね、その他特別にすることはありません。 家内のうちは、裕福な生活はしてないんですね。 彼女のところはね、私たちのお家に帰ったら何にも食べ物がなかったので、塩漬けのブリしかなかったというか。
﨑山：館長はいつから高知ですか、高知にいらしたの?
渡部：大学で最初高知来に来て、それで 10 年外に出て、また戻ってきて、全部で 27 年くらい高知に。でも土佐弁は喋れない。本当に喋れない。相当努力しましたけど喋れない。
﨑山：発音が違うんですからね。
渡部：アクセントがね。
﨑山：そう、アクセントが違う。だから私なんかも土佐弁ずいぶん使いますから、だいぶアクセントも似てきましたけど、やっぱり違う。
岡本：ちょっと標準語的なね。
﨑山：言われますね。そうかといって東京行ってちょっと気取ってね、同級生なんかだったら標準語で喋ろうって、でも ちょっとやっぱりアクセントがおかしい。もう中途半端ですね、両方ともが。
渡部：うちの学芸員で東京から来てる学芸員が、2 年くらい経って東京の同窓会に出ると、どうしたの、そのアクセント。どんどんそのアクセントが入ってくる。僕ら一生懸命土佐弁で喋ると、幡多の方ですかと言われます。今日はどうもありがとうございました。
岡本：いやいや、どうも。もう話すべきものがあんまりなくて。
渡部：いやいや、もう。ありがとうございました。まあみんなそれぞれの環境、それぞれの状況で、引き揚げなんかは本当に大変なお話とか言って、本当こちらの線路に乗ったために戻ってこなかった。 乗れなかったものでこっちに行ったから助かった。本当に運みたいな。
﨑山：そしたら奉天を出てからもうそのまま葫蘆島で病院船ですか。
岡本：そうです。錦州でもう長かった。止められて。止められて。それは一晩ぐらいずっとあったかもしれんけどもね。それはね、どこでどういうふうに止まったか分かりません。だけどもね。そんなに何日も止められたというようなことはなかったです。無蓋車は無蓋車でした。何にもない無蓋車で。おしっこするときが汽車と汽車の間のね、つなぎ目のところ。
﨑山：あんなとこで。
岡本：そうそう。
中村：安芸のお母様の実家が国司さんですか。

岡本：それはね、母の兄弟のうちの一番上の兄ですが国司です。国司の墓は安芸にありますがね、はい。もっと聞いたほうがよかったですね。なんで満洲に行かないといけなかったかというと。
渡部：いや、うちもおじ連中から一切聞かないままだったもんね、それも。ほんと後悔しますね。
岡本：なんかいとこの話によると、大連行って棒でこうやって「ここがうちよ」と言ったらうちになったというわけです。 そんなこともあるのかどうか。
中村：あまり高知の東のほうって、外地とかいろんなところに出ている方が西に比べると少ない。
岡本：そうですかね。
中村：今まで聞いたことはない。
﨑山：安田の教育委員会にいらっしゃる。
岡本：安田の 安田の向こうですかね、名村は いや、こっちか、手前 手前ですかね、名村は手前ですかね はい 伊与木の次。 あのね 私のおじがね、ずっと長い間安田におったんですがね あの安田の橋を渡って向こう側のね あそこに不動、不動です。それであそこで 親戚が製材をしよったんです。
中村：いっぱいあります。もう今一軒しかなくなって、森林鉄道の駅が。
岡本：そうそう 私のいとこが悪いことしてあの鉄道を盗んでねえ、鉄道盗んでから捕まったという話。
﨑山：森林鉄道のレールを？
岡本：そう、子供の時の話よねえ。
﨑山：けど子どもの時にそんなはずせます?
岡本：子どもの時に要は鉄道に乗って行ったもんですね。あのですね、柳瀬まででですかね。柳瀬の要は、あっち行ったこっち行った。遊んでその端っこの方がこれは使わんけに構うまいというもんで、どうも盗んでトラックに積んでもらって、売ったもんじゃねえ。
﨑山： 森林鉄道の研究者。
岡本：そう、バレて怒られたという話を。もう亡くなりました。

（中略）

岡本：ハルピンやら新京の方からずっと南下をしてきた方にはずいぶん苦労した方がおったようですね。 私らも街で死んだ子どもを背負って歩いているのを見たし、それから道路の縁へ麻袋、マアタイへ死骸を積んであったのを私らは見ましたからね。だから避難した人はね。仕方なし、子供が死んで置いていったというようなことはあったんだと思いますよねうちのお袋の話によると 親父が私の一番下の妹を置いていこうかって言うんだけど、いやいや、置いていかんよって 抱いて帰ったと言って。
﨑山：1 歳ぐらい 頼んで帰ったら荷物が持てるわけね。
岡本：ある程度 子供を抱いたらほとんど荷物が持てないわけよね。
﨑山：それが母親よね。
岡本：預けていこうかって言ったけど。いやいや連れて帰るって連れて帰ったという話をね 1 回聞いたことがある。
﨑山：すみません、ありがとうございました。
岡本：ひとつもまとまった話にならんで。
渡部：ありがとうございました。

【聞き取り記録】

「満洲高校生技術生訓練所・通化事件・昭和 28 年の引き揚げの記憶（片岡盛政）」

文字起こし：織田千代子

（校正：楠瀬慶太、﨑山ひろみ）

聞き取り対象者　片岡盛政さん（昭和 4 年仁淀川町生まれ）

聞き手	高知城歴史博物館館長	渡部　淳
	満洲の歴史を語り継ぐ高知の会	﨑山　ひろみ
	高知大学教授（当時）	吉尾　寛
同伴者	満洲帰国者	明神　輝男

片岡盛政さん（左）と明神輝男さん（右）

渡部：じゃ、今日はどうぞよろしくお願いします。もうどれくらい 2 年前、もうちょっと前ですかねえ、始まったのは？
﨑山：ええ、もう、5 年に。
渡部：え一、5 年！（笑）
﨑山：今 49 人年目。
渡部：49 人目ですか！満洲からお帰りになった人たちが、あまり向こうの資料とかを持って帰れなかったとかを話をお聞きして、で、向こうで見たこととかを記録にしておかないと、満洲の世界というのは、もう、みんな忘れてしまうもんでということで、まあ、あの、一人ひとりお伺いしてます。それで今日だいたい伺うのは、高知のどこでお生まれになったということ、ご家族のことから渡満するのはどういう契機だったのかと、満洲でどういう経験をされたとか、どういうものを見た、どういうことを考えたかというのも、何でも結構です。いろいろお話をしていただいて、それから引き揚げのお話をということでお聞きしたいと思います。よろしくお願いします。で、ビデオと録音を撮らせてもらいますので、よろしくお願いします。じゃあ、まずはお名前から教えていただけますか？
片岡：はい。片岡盛政。昭和 4 年 12 月の 18 日生まれ。生まれは農、農家で。
渡部：はい。
片岡：ほんで、昭和 4 年の 12 月の 18 日生まれで、いうたら昭和の、昭和恐慌の真っ最中で、大変な、親が大変な時だったと思うんです。ほんで、米の飯は食えなんだけど、腹の空いた状態は子供の時から、高知におる時からなかったんです。ほんで、満洲行って、高粱やら、とうもろこしやら、ちょっと質は落ちるけど。ああ。満洲へ行って 2 合 3 杓に往生しまして。飯が終わっても、ちんまい茶碗一杯じゃで、食い盛りの時にひもじい思いを随分しました。ほんで、終戦してからはこの本には細かーいことがよう出てますけんど。2・3 事件の暴動に遭う前に。
明神：通化事件？通化事件ですね。
片岡：地方の暴動に遭いましてねえ。
渡部：はい。
片岡：あのー、よそ、よそではあんまり暴動と言う話は聞かんけんどいうて、車の中でさっき言われましたけんど。通化地区言ったら、金日成や楊虎城のパルチザンの活動をしとった

所なので、治安状態というのが急速に悪くなって。もう、石炭の工業所と鉄山の工業所、田舎はやられてない所がない。全部取られまし、全部取られたいうんですか、剥がれたというんですか。それでも、すってんてんに下着まで取られた所もありますけんど。私どもおった所はそこまではない。ほんで、終戦した時に6か月分の給料ですか、日本人は支給されてねえ。その現金はなんだかんだですっかり取られましたけど、着るものは取られてないし、それから、いうたら会社組織が残ってたもんで、食糧やとか、その他は苦労したと思いますけど、終戦前からの食うもんの苦労て言うのはなかったです。
渡部：もともとは高知のお生まれです？
片岡：お、大崎で。
渡部：大崎で。ああ、お生まれになった。で、ご家族はあれですか？ああ。
片岡： 6人兄弟の下から2番目。上は男3人、男、女3人で、上2人は海軍へ入ってね。ほんで、3人とも帰って来まして、
渡部：ああ、そうですか。
片岡：はい。
渡部：海軍は召集で行ったんですか？志願で？
片岡：1番上は志願です。
渡部：ああー、ちなみにその1番上のお兄さんというのは、どこで終戦を迎えられました？
片岡：上海です。
渡部：ああ、上海で。
片岡：ほんで2番目は召集で。
渡部：はい。
片岡：えー、奄美大島で終戦して。ほんで2番目は、こんなに苦労するんやったら死んだ方がましか言う話を帰って来てからねえ、してました。1番上は上等兵曹で苦労を通り抜けて、なんか慣れた状態で。
渡部：はい。
片岡：それでも、ほんと、長男、農家の長男やから、帰国するようにだいぶんあちこち文句言いに行ったらしいんですけどね。ほんで、本人にいわせたら、海軍におった方が恩給がついて、田舎の百姓よりもうちょっと楽やったはずや言うて、親父に文句を言うてましたけどね。
渡部：でも、まあ皆さん、あれですねえ。帰還してよかったですわねえ。
片岡： 3人とも元気で帰ってきたのは。3人とも死んどる人も、おりますけどね。うちは3人とも、それも朝鮮戦争で通信不能のところから、生きたやら死んだやらわからん状態で帰ってきましてねえ。みんな喜んでくれました。
渡部：はあー、じゃ、それでご両親がいらっしゃって、で、満洲に行かれたのは片岡さん一人で。家族ですか？
片岡：えーとね。昭和19年いうたら、6年生の修学旅行もないし、高等2年卒業しても、旅行はない。
渡部：はい。
片岡：ほんで、自分の職業と住居、自分の希望ってのがあるのが当たり前やったけんど、昭和19年なかったです。ほんで、農家の二男三男はあっち行けこっち行けでね。配給制度で。満洲へ行かされてねえ。ほんで、うちから4人行ったんやけど、東辺道へは2人で。この本の主人公の井上輝美君と私と小学校から終戦までずーと一緒で。終戦って 1 年は一緒やったけど、それ以降は、彼は15年居ったけどねえ。全然別々で。ほんで、暴動のことは参考にすればねえ、細かーいことがこれよく出てるんです。ほんで、人によって、場所によって、言うことが3000人死んだとか、1000人死んだとか、状況が、あのバラバラでねえ、地区によってみな状況が違うてねえ。みんな随分ひどい目におうて。

明神：暴動っていうのは通化事件のことやね。
片岡：そうです。
明神：2・3 事件、手前の 9 月の暴動とはまた違うのよね。中国人襲撃受けて？
片岡：そ、そうですね。農民に襲われたのは 20 年の 9 月やけど。20 年の 2 月の 3 日は日本軍と。
明神：21 年ね。21 年の 2 月 3 日。
片岡：あ、21 年の 2 月の 3 日は、
明神：通化事件。通称。
片岡：日本人が中共軍の本部を襲撃してねえ。ほんで、3000 人死んだとか、これも記事によって人によってみな違うし、状況が混乱してるから正確な数字っていうのはないと思うんです。
明神：山田一郎さんが一番詳しい言うてこの本に書いちゅうね。通化事件は。
渡部：その満洲に行った時は、まずどこに行って、何をされたんですか？
片岡：ほんで、内原の訓練所っていうのが。
渡部：はい。
片岡：義勇軍で
渡部：はい。
片岡：の開拓団に行きましてねえ。
渡部：はい。
片岡：私どもが行ったのは「高校生訓練所」いうんで。満鉄やとか、あの、満行いうのがコークス作って鉄、鉄鉱石を溶かして、言うたら製鉄ですねえ。その関係やとか満洲飛行機やとか、満洲自動車やとか、
渡部：はい。
片岡：会社関係の養成所へ送り込まれてねえ。
明神：内原の隣に鯉渕村言うてあってね、そこへ似いたような建物ができちょったね。
片岡：義勇軍の宿舎が丸い屋根でねえ。訓練所の高校生訓練所ゆったら普通の平屋建ての普通の三角の屋根でしたけどねえ。
渡部：あああ、そこでどれぐらい、訓練を受けます？
片岡：期間は 2 月弱やけど訓練て何もなくてね。
渡部：はい。
片岡：ほんで、あの、車の中で話してたけんど、何の訓練でも何でもない。親離れした子供がねえ、いきなり満洲行ったらどうしても家が恋しくて逃げると。満洲やったら犠牲が出るけ、ほら、内原で 1 月、2 月慣らしたら逃げても捕まるし、事故は起きんと家元へ帰されるから。それを、それの慣らしみたいな事やろうなあ思うてます。
渡部：じゃ、そこで、中国語を習うとかそういう、こう、具体的なものとかは特になくて？
片岡：何にもない。
渡部：うーん。
﨑山：東辺道と言うと延吉の方ですか？
片岡：東辺道言うとね。
﨑山：あの、延吉？
片岡：通化省。
﨑山：あ、通化省ですか？あああ。
渡部：あ、通化省。
片岡：ほんで、延吉の方は東辺道言わないと思うんです。
﨑山：ああ、朝鮮自治区だからね。
渡部：じゃ、そこの、なんか、会社に入るわけですか？

片岡：会社のねえ。
渡部：はい、
片岡：鉄山と炭鉱があちこちにあるんです。大倉喜八郎の銅像が。記念碑が本渓湖の公園に大っきなのが建ってますけんど。満洲へ行って西を見たら黒い山があるき、石炭の山や。ほんで、東を見たら赤い山があるき、鉄山の山やし。まあ、話が、ま、大きいのは珍しい事じゃないけどねえ。ほんで、あちこちに石炭の山が多いんですけどね。そこへ苦力（クーリー）がようけ居るから、その苦力を石炭掘る言うたら、指導者の養成所みたいな植民地政策の会社やから。だから、穴を掘って枠を組んで測量して、ほんで、搬出する施設造りでねえ。
渡部：はい。ああ、でも、片岡さん達が何をするわけで、そういう仕事をするのは苦力がやって、それらを指導していったり管理するような感じですか？
片岡：そうです。指導者の養成所。
渡部：そこにどれぐらいおいでました？
片岡：えーと、4 月に卒業、小学校出てて、ほんで、6 月に満洲行って、ほんで、期間は 2 年ですけど 1 年半で終戦で、卒業してないんです。
渡部：ああ、そうか。
片岡：その時代の年恰好の私どもいうたら、同級生日本におったら学校どころじゃないんで。
渡部：そうですよね。
片岡：はい。満洲では、あの、日本と違うて平穏でねえ。空襲もないし、爆弾落ちてけえへんし、飯が少ないだけで。
渡部：ええ、その訓練所と言うのは、1 学年はどれくらいの人数おる？
片岡：えーと、義勇軍が 5000 人で、訓練生が 3000 人て言う。これはええかげんな話ですけんど、私の頭に入っている、資料言うたらそういうことでした。だいたい義勇軍が年に 5000 人か、高校訓練生が 3000 人。
渡部：3000 人ぐらい。
片岡：言うことでねえ。
渡部：で、その、満洲の行った所の、その訓練所のね、名前というのは何という名前です？
片岡：えーと、「満洲高校生技術生訓練所」言う。
渡部：それはもう、内地でその内原で、訓練を受けたら、もう強制的にとか、お前はここに行けと言うように割り当てられて行くんですか？
片岡：そうです。ほんで、私は行くのが嫌で、ほんで、この井上輝美、同級生やけど「帰ろう」言うたら帰らん。「俺、田舎でこのままやったら 7 人兄弟で弟の面倒をみて、田舎の坂、旧坂の畑の百姓で、見込みはないから嫌やから俺は行く」言うて。私は 6 人兄弟で下から二番目で子守せんでええし、百姓も親にやらされたことないし、鮎を採りよったら日が暮れるんで。私は帰りたくて、帰りたくて仕方がなくて。ほんで、何とかして病気、病院へ入って、行くの抜けろう思って、ほんで、「場所が変わったら水を飲んだら腹壊すから生水飲むな」って言う。ほんで、私、生水じゃんじゃん飲んだけど腹壊れない。
渡部：ははは。
片岡：ほんで、汽車に乗って満洲行くようになって、汽車の中へ腐った弁当持ち込んでそれ食うて腹壊して、病院へ担ぎこんでもらおう思うて、腐った飯食うたけんど腹壊さない。それでもう一つは「セネンゲン」って言うて虫下しの薬があるんです。あれも、あの、決められた量以上に飲んだらとんでもない腹壊して入院せなあいかんて。送ってもらって。倍も三倍も飲んだけんど腹壊さない。困ったもんでした。
渡部：はは、それはですか？ここでいうのは、ほら、朝鮮半島をずっと?
片岡：そうです。その当時は、もう関門海峡を抜けるときに潜水艦が出没するいうことでねえ。
渡部：はい。

片岡：上から飛行機で。空襲には遭わなかったけんど、そういう緊張感はありました。
渡部：うーん、じゃあ技術訓練所での生活というのは、あれですか、授業が決まっちょって、ずっと？
片岡：そうです。はい。
渡部：それはどういう内容を習うんですか?
片岡：えーとねえ。穴掘るのに“ジャックハンマー”とか“コールピック”とかいう機械が昭和 19 年にもうありましてねえ。
渡部：はい。
片岡：ほんで、穴掘って火薬詰めて爆破して。ほんで、穴掘るのに深くなるのに従って、あの、奥へ行くやけんど、レールを敷いて、ほんで、貨車で押して出してましたけどねえ。勾配がついてるから人の力で動いてたみたいです。それから測量と枠とを掘るのと、穴掘って進めて行くのんと。ほんで、「発破かけろ」言ったら“ジャックハンマー”で穴掘って火薬詰めて、粘土で詰めておいて導火線に火いつけて。ほんで、穴掘りの道具習ったことは覚えてます。そ、測量だけは三角関数使うんでね。私はもともとやる気なかったから、そんなん初めから教え込まれても覚える気なくって、先生困ってました。
渡部：で、その訓練所は、もう、日本人だけでとにかく、その、技術を身に付けるようという学校ですか?
片岡：えーと、それはねえ。日本人の学級と中国人もおんなじ年恰好でねえ。はい。中国人の方が、量がちょっと多かったです。
渡部：ああ、そうですか。で、それは、日本人と中国人の訓練生は一緒に交流はあるんですか?
片岡：ない。
渡部：ないですか。建物も違うとか?
片岡：全部違います。
渡部：ああ、じゃ、そこでまあ、2 年で終了の予定が、ソ連が攻めて来たもんで、もう、それが閉鎖になったと言うことですねえ。で、どうですか、学校は。まあ、その、お腹は多少すいたけれども、まあ、平穏無事な 1 年半ということだったですか。ああ。
片岡：はい。「2 合 3 杓はいかさま腹減った」言うて。
渡部：ははは。そうですか。はは。
片岡：ほんで、日曜日にあのー、山の上の中国人の家へねえ。
渡部：はい、
片岡：中国人の食料言うたら、トウモロコシが主やったけど。粉にしたものをふかして蒸してねえ。“タービンズ”言うんやけんど、それを買いに行ったりねえ。それから粉を水で練ってドロドロになったのを鍋の上で焼いて、卵焼きみたな状態でねえ。ほんで、鴨緑江越して満洲領行ったら、汽車の中で中国人がそれを食てるから、「ひやー、たま。ニワトリよーくおるんやな。卵焼きが飯かえ」言うてたら、卵焼きじゃなし、それ“チェンビン”言ってね。あの、餅の弁当の弁に“チェンビン”いううんやけんど。ええ、ほんで、関東軍と、関東軍も一緒にいたから、馬が、軍隊が馬持ってるから馬の餌に高粱食わせてねえ。ほんで、「中国人が馬の餌を食いよるばい」言いよったら、自分らも腹減って腹減って馬の餌の高粱食いに行ったことがあります。
渡部：あ、そう。
片岡：それと、中国人のお百姓さんいったら、親より先に死んだものを「不幸者」や言うんで。棺桶せんと山へほっぱらかすんですかね。ほんで、それを狼が食うんです。ほんで、天気の悪い日、雨の日、いうたら湿気のある日、山を人を食わえてうろうろするのがねえ。山で青い火が見えるわね。あれを、「狼が人を食わえて走りゆうんやぞう」言うて。その道を中国人の家へ“チェンビン”や“タービンズ”を買いに行くのにねえ。惨めというんか哀れ

というんか、腹減ったら怖いもの知らずいうか、
渡部：はは、へへ。
片岡：そういう経験もあります。その代わり靴下や手袋や下着類をねえ、持って行ったら、お百姓さんが喜んでくれて交換するのにねえ。小遣いはどうせ給料ないんやから。金は持ってないけんど、それを喜んでくれて交換してくれましてねえ。
渡部：ああ、そう。
片岡：ほんで、取柄はそんなことで中国人と付き合う、もの言うから、中国語を覚えないかんという。こら切実感のほうが手伝どうてくれてねえ。それはプラスになったかなと、思います。
渡部：じゃ、訓練所は特に給料があるわけでなく、まあ、授業料とかもないけれどもまあ、物資の支給があったと言うことですか？
片岡：そうです。
渡部：で、それで今度、次は。今度ソ連が攻めて来たんですか？戦争の終わり具合はどういう感じで？
片岡：それでねえ。後で今になって、中国の記録を見たら、終戦時の国民党軍が 300 万人いてねえ。ほんで、駐留軍が山東方面から 13 万入って来たいう記録になってますけんどね。10 月頃ソ連兵がまだ居るときに、先に中共軍が入って来てねえ。ほんで、その時はまだ昔の公安隊言うんですか警察がねえ。公安隊が国民党の系列だったと思うんです、日本人がやりよったんやから。
渡部：はい。
片岡：共産党が入って来たからいって手が回らんでね。警察関係は満洲国のやつがそのまま、国民党系でもあり、前の系列の日本軍のお下がりみたな感じもあってねえ。ほれで、中共軍と国民党が小競り合いやってねえ。頭の上で鉄砲の弾飛んだことも 1 回だけ経験してます。
　それから、3 月になってソ連軍が引き揚げるちゅう話やけど、実際に引き揚げるのはなんか 6 月になったとか、なんとかかんとか言うて。そこの辺もねえ、書いた人の記事によっていろいろやけど。はじめは中共軍が、ソ連軍が入って来たのは、一番がソ連軍やけんど、それから駐留軍が先に入って来てねえ、国民党が後から入って来て。ほんで、２・３事件があった、暴動があった時の通化の状態言うたら、中共軍が多かったんです。通化いう特定の所はねえ。
渡部：はい。
片岡：中共軍が初めからあの、勢力があったみたいで、公安隊も国民党もこんもうなってましたよ。それで本格的に、国民党は飛行機も船も軍艦も大砲も何でもありやで。ほんで、どんどん押してこられてねえ。ほんで、私どもは 21 年の 3 月に、あのー、軍工場、軍工廠や集団で入って。ほんで、第一線に近いのはかなわんから、第一線からちょっと離れたとこへ離れたとこへ撤退して行ってねえ。ほんで、通化から輯安（しゅうあん）ていう 1800 年前の都ですか、古墳がいっぱいある所ですけんどねえ。輯安へ移転して、それから輯安から、輯安も 20 年の 11 月に占領されたんですか。ほんで 11 月に満浦鎮（マンポウチン）へ逃げて、ほんで。貨物列車で 18 日かけて図們（ともん）へ移動しまして。
渡部：はい。そのへんの位置関係がどうなっているのか、ちょっと、
﨑山：延吉の近く？
片岡：朝鮮通って元山（げんざん）へ抜けてねえ。
渡部：あー。
明神：それは 21 年のこと?
片岡：21 年の。
﨑山： 3 月ですか？
片岡：はい。

﨑山：輯安ってどの地か分からない？
吉尾：通化の南、ありませんかねえ。
﨑山：通化の近く？
吉尾：輯安、これじゃないかな。
片岡：通化の先が輯安になって、輯安の鴨緑江（おうりょくこう）の向こうが満浦鎮言いましてねえ。満浦鎮にひと月おって。ほんで、国境を渡るときにソ連兵がおるから頭出すな、貨物列車の中でね。へへ、おんなじ身内やのに、なんでそんな気使うんやろう思いましたけんど。とにかく引っ込んどけということで。国境越えしまして。
﨑山：周安の周は円周率の周に安いという字かねえ？
片岡：輯安の輯は車へんにね。
？吉尾：そうです、車へんに口の耳です。
片岡：口に耳です。
﨑山：ああ、ああ、ああ。
吉尾：だから、通化の南のほうに、もうちょっと国境沿い…
片岡：そうです。
﨑山：通化の。
吉尾：鴨緑江の沿いにあるんじゃないかな。
﨑山：ああ、そうです。
片岡：いま集めるっていう字になって。
吉尾：ええ。
片岡：集安やけど、
吉尾：そうそう。
片岡：中国ではつまりシーアンですね。
吉尾：：ええ、そうそう、そうですね、シーかジーですね。ええ、このね、ちょうどこのあたり、ちょっとこのあたりあると思うんですが。
渡部：一番最初、その、ソ連兵が入って来てから、学校はもうすぐ閉鎖になって、その、訓練所の中にじっとしとるんですか？
片岡：学校関係は終戦でねえ。あのう、全部なくなりましてね。
渡部：はい。
片岡：ほんで、えーと、「通化省臨江県延東校」言いましてね、学校の名前が。そこの総務部長が、日本人が 250 人と、中国人の苦力が何千人も入って来て、正月過ぎるのに、金がいるから言うんで、本社へ取りに行ってね。もらいに行って、 ほんで、100 万円もろてきて。ほんで、日本人には半年分の給料が出まして。ほんで、中国人にもそれ相応の金額渡してねえ。
渡部：はい。
片岡：すぐ暴動起こす、この連中らに暴動起こされたら、かなわんから食うものを与えとこう言うことで。
渡部：で、そういう状況のところにソ連が入って来るわけですか？
片岡：ソ連が入って来たのは、東満と違ごうて、ちょっと遅いんです。東満や新京やハルピンは早く入ってこられたけど、ほら。ほんで、ソ連軍の悲劇いうのは、戦争には巻き込まれてないです。ただし、中共軍はしつけがねえ、厳しいから、暴行話がない。だけど、ソ連軍はずいぶんデタラメでねえ、病院の玄関でご主人のおる前で婦人が暴行されてね。そのまま自殺してるのが病院の中でやから、みな知ってますわねえ。それが、朝鮮人も中国人も日本人も、国の差別がないちゅうのはええことやけんど。悪いことをするのは、だから、所かまわず、誰かまわず、暴行が。
渡部：ああ。

片岡：それ、私どもは現地にいたから、ただ話だけじゃなしに、見た連中らあの話ですけどねえ。
明神：あんまりソ連軍の姿は見てないわけよねえ。
片岡：ソ連軍の姿はねえ。まだ通化へ避難する前の養成所で、臨江へなんか、一個小隊くらい来て、それが時々視察や言いに来て、「金出せ」「女出せ」言うんで。それも時々、1 回か 2 回かあったいうことで。帰国問題で、総務部長をやりよった人がねえ、その記録を細こう出してねえ。ほんで、そういうそんな本は知りませんか？私ねえ、一部手に入ったやつを会社におる時にねえ。本渓湖（ほんけいこ）から帰ってきた連中にコピー、印刷してみなに渡して。肝心の私の手元に無くなっちゃってねえ。はは。おたくの手元へなんか届くように、手はずしよう思うんやけどねえ。あれ、養成所の運営状態から終戦した時の状況、ソ連軍が入って来た状況、それから、いうたら、引き揚げてくるまでの後 4 月とっても面白い本で。
渡部：ああ、そうですか。
片岡：だから、うーんと。大阪におる時にね。あれが出たのが、帰ったのが 28 年やから、昭和 30 年頃にねえ。みんなに渡るように会社に頼んで印刷させてもろてねえ。いや、私が会社に頼んだら金いらん言うて。へへ。やってくれてね。
渡部：ええ。
片岡：ほんで、沖縄も人数だけのやつを送ったんやから。誰かのやつを借りてきたら、印刷し直したら増えると思うんです。
﨑山：ソ連軍が入ってきたのは、9 月頃ですか?
片岡：それ、所によっていろいろやけどねえ。
﨑山：はい。
片岡：通化へ入って来たのが 10 日ぐらい経った、経ってから。
﨑山：じゃあ、8 月の末ぐらいですねえ。
片岡：はい。
渡部：日本が負けたと言う終戦は、どうやって知ったんですか?
片岡：終戦はねえ。
渡部：はい。
片岡：学校にラジオもないし、新聞もないし。
渡部：はい。
片岡：知らない。ほんで、学校の先生がねえ、
渡部：はい。
片岡：8 月の 9 日に、ソ連とドンパチが始まった言うて。ほんで、教室に行って、教壇の上でね、今頃日本軍がウラジオストク占領しとるはずや言うて。今で考えたら、学校の先生言ったら、いうたら教養があり通信状態も我々一般と違うはずやのに、おかしな話やったなあ思うてます。
渡部：じゃあ、8 月 15 日のその、玉音放送とか言う話とかはどうやって?
片岡：聞いてません。はい。この本の主が、これへ書いてるやつは。満洲国の皇帝が太栗子(ターリューズ)という鉄山、有名な石炭、質も量もねえ、有名な所やけど。そこに日本人ももちろん多かったから、設備があったからね。あの、新京から太栗子に引っ越して来てね。そこで、これは私の口やけどねえ。こっちの方が資料前にして書いとるから。これ、こちらが持ってるんやから。
渡部：へへへ。へへ。
片岡：何とか、利用してほしい。ほんで、通化の引き揚げ記録ってやつは、私が何とか、もうだいぶになるから。俺も持っとる俺も持ってる状態やないから大変だと思うんですけんどね。何とかして。
渡部：ああ、それは。

片岡：みよう思います。
渡部：で、ソ連が来て、その後に、中共が入ってきて。
片岡：そうです。
渡部：それから基本、ずっと朝鮮の方に、ま、逃げて行くということになるんですかか?
片岡：移動ですねえ。
渡部：移動です。
片岡：ほんで、その移動の時もねえ。もう通化へ国民党が入って来て、輯安言うたら山越えの鴨緑江やからねえ。ほんで、鴨緑江、輯安へ逃げて来てるのが近くへ来たから鉄道で川を越して。ほんで、輯安におったっていう状況やからねえ。ほんで、面白いことに、その当時、まだ、私は子供の時にひとっつも本なんか読んでない。勉強もしてない。中共軍と暮らしだしてから、俺たちの勉強ちゅうのは一体何やってんねん。もう一回勉強し直したろう思うて、やる気出した時には本が無いしねえ。　日本語の本が。
渡部：中共軍と一緒にというのはなんか、役目が与えられるんですか? やっぱり。
片岡：えーとね、食わんがために。いうたら暴動に遭うた所はもう山奥やから。ほら、どっちにしても。鉄道から輸送から通信から色々不便なところがあるわけで。ほんで、ソ連のあの司令官が、「このままじゃ正月になったら死人が出るから、通化へでも送り込んだら何とかなる」言うことで、250 人の煙筒溝（エントウコウ）言う所へ。えーと、周辺の山からみな避難して来たのが 6000 人か全部が集まったんです。ほんで、その理由は、中国人の住んどるとこと、日本人の住んどるとことかが、別やからやられ方がねえ、少ないし。ほんで、関東軍のいうたら、炭鉱の坑道をねえ。要塞にして立て篭もると言うことで、物資がどっさり入っておった。だから、周辺の日本人が、皆来たんやと思いますけんどねえ。このままじゃ、だけど、そこでちっちゃな所で、なんぼ何でも長持ちしないからいうことで通化へ出て行って。ほんで、食わんがために難民対策いうんで、光建設言うて山をくり抜いて、安山がやられるから、ほら。空襲対策で山の中へ工場たてる言うことで、大工事が始まっておったんです。ほんで、それの解体工事いうたら、そこで、使うて飯代のいくばくかを世話になってる言うたら、暴動に遭うている、遭うてない日本人の社宅へ 3 人ずつ配給されてねえ。
渡部：はい。
片岡：世話になっとったんです。その食いぶちにそれ当てとったんやけんど、そんなことも長続きせえへんしねえ。ほんで、工場が若いのがまとまっておるっていうことは条件がぴったりで。ほんで、まとめて中共軍が入って。ほんで、関東軍の仕事の残りですねえ。地雷の、火薬を詰めて雷管詰めて、ほんで、手榴弾の半成品を完成品にして。人手がなんぼでもいる、戦争はなんぼでも近くにあるから、ほら。うってつけの条件で。ほんで、車の中でちょうど話した内容ですけんど、自分たちに何百人もの日本人の若いもんと付き合うったら、ハシカイ連中はどうも、別口になったんやと思う。みんなできたんばっかりでねえ。ほんで、共産党言ってもその当時はもう聞く耳持たないですわね。だけど、「戦争はなんで起こるんやで。鉄砲の弾、大砲の弾、よーけ使こうたら儲かるやつがおるから、戦争は起こるんじゃい」俺そんな話聞いたことがない。ほいたら、だんだん付き合いよったら、あのー、様子が分かってきますわねえ。おらあ勉強のし直しや言うたら、本がない。日本語の本ちゅうのは。トルストイの『復活』なんかが、なんかの拍子に回ってきたら、みんな徹夜で奪い合いして読んでましたけどねえ。それと、奉天に監獄があったから、奉天の監獄と満鉄の、えーと、研究室みたな所があって、あそこには本がある言うてたけんどね。そんなのが間違ごうてちょこちょこ来よったけんど。
　実際一緒に暮らしだして、ほんで、頭から共産主義がどうや、社会主義がどうやいうたら受け付けないけれど、一緒に暮らしてたら、みんな人間ができてるのと、日本人言うたら、なんでかんでも一年古かったのと、一つ星が違ごうとったら、もう暴力団顔負けの、言うたら日常生活がそうでしてねえ。軍隊なんか強くなろう思うたら、「どついてどついてどつき

まくって」命令通りに動けばええんや言うことで、考えるっていうことですか。教育いうたらいろんな条件比較して、どこがどう違うんやいう判断で思想が生まれて、主義をどうとかいうて理屈の上じゃ受け入れないけんど、日常生活の人間関係いったら、出来た人の話は聞きたい。へへ。いう状態ですわね。
渡部：あーあー。
片岡：ほいたら自分がやろうっていうことになったら、徹夜して、徹夜して本を読みだして、昼になったらどうなるかいうたら、体、私の場合は体どないでも壊れんで。ほんで、ろくすっぽ寝んと本を読んだらどうなるか言うたら、昼の日なかに涙がポロポロ出る、体は壊れない、涙が出てくる。ほんで、年寄りが若い時にそんなことしたら、年をとったらろくなことないからやめとけえ。
渡部：そら、中共軍に入るのは、ど、どういう手続きというか、どうやって入って行くんですか？募集が？
片岡：あのね。
渡部：日本人ですからね。
片岡：うん、中共軍に日本の軍隊は建前はおらん。ほんで、国民党の軍隊には日本の 1 個旅団が大原（タイゲン）でね。そのまま国民党に入って、中共軍が占領したらそれを取り返しに行くのにねえ。1 個旅団まとめて。ほんで、その部隊と私どもの昭和 28 年の第 8 次集団帰国のグループがおりましてねえ。
渡部：はい。
片岡：その話聞かしてもろうたし。天津で、お別れの挨拶と、ほんで、それに対する、答礼ですかねえ。
渡部：ああ、はい。
片岡：大原の旅団の捕虜が、挨拶したけんどねあれはもう理屈でもない、何でもない、どういうことかいうたら、日本軍終戦するまでは、「天に代わりて不義を討て」って言うて、集団で向こうへ行って、ほら。お百姓の作ったものを取り上げて、お百姓さん飢え死にした所がようけありますわね。ほんで、取り上げるは「焼・殺・姦」（しょう・さつ・かん）ですか。焼きまくるんと、殺すのと、それから婦女子に対する暴行ね。日本人がやったこと言うたら、何が「天に代わりて不義を討つ」か言うこと。言われたら反発するけんど、実際それが歴史やってることが分かってしもうたらねえ。ちょっと変わってきますわねえ。
明神：片岡さんがねえ。中共軍へ結局入るわけやろ。
片岡：えーと、私の場合は軍組織じゃない。
明神：うん、中共軍に入らざった？
片岡：軍事工場。
明神：軍事工場へ行ったわけね。
片岡：ほんで。
明神：そこら辺の具体的な話。
片岡：軍隊に入ったちゅうのはねえ。これ、記録はどうしてもらういうことになったら言うことが適切であるかないかは、まあ、別にしてねえ。航空機がありますわね、日本軍の戦車がありますね。大砲がある。それはねえ、部隊がそっくり入ってます。どういうことか言うたら、使い方知らんのやから。うん、それと医者と鉄道関係。日本人が中共軍に入ってないい言うけんど、相当な貢献をしてると思うんです。
渡部：まあ、軍隊の本体じゃないけれども、結局、その、中共の組織の中にいろんな形で入って来ると言うことです？
片岡：そうです。「やれ」言われたんじゃない。はは。
明神：片岡さんがどうやって入ったわけ、その、軍属、軍事工場へ？
片岡：それはね、通化に飛行機部隊があった。

明神：うん。
片岡：その通化の内容を書いた本が今、出てるわねえ。いろんな情報が入って来て、その本の中に、その暴動に参加する戦車兵やとか、飛行部隊の、その、連絡の記事が出てるから。
明神：本が別にしてよ。本が別にして、片岡さんはどうやって入って行ったわけ?
片岡：軍には入ってない。
明神：うん、軍事工場かねえ。どういう形で?
片岡：それは流れですわねえ。
明神：流れで。
片岡：満洲行ったのも自分の意思じゃない。終戦も自分の意思じゃない。ほんで、中共軍が入ってきて内戦が始まって、最初は飯のために入ったんやけんど。その意義が分かってきたらねえ、やる気になって入ってるから。舞鶴に父親が迎えに来てねえ、私の顔を見るなり「苦労したのう」言った。私は返事のしようがなくてね、苦労ってものは嫌なことさせられたら誰でも苦労って言う言葉がある。だけど自分でやった仕事ってのは、なんぼ汗が出ようと血が出ようと、自分がやったことは苦労じゃない。
渡部：じゃ、その、中共軍の、中共の人たちと一緒に、もう、結局なんとなく一緒になって、ずうっとその人たちと一緒に動いて行ったという感じなんですねえ。
片岡：そうですねえ。この本の奥さんがねえ、満洲の第 4 野戦軍へ入って。ほんで、鴨緑江を越して間島（かんとん）の方まで行っとるはず。南へ行ったのは、ほら、13 万人入って来たのが 2 年経ったら、100 万人の満洲の部隊が長城越して、天津、北京、ほれから上海、ほれから間島まで満洲の部隊が行ってる。これはすごいことやと思う。13 万人が 2 年で 100 万の軍隊にしてねえ。それも国民党の部隊は、ほら、街でブラブラしよったら捕まえてこられて、服着せられて、鉄砲持たされて。ほんで、中共軍 100 万人の第 4 野戦軍言ったら、土地改革で、ほら、各部落で、地主と小作人いったら、「苦難の時と、不作の年に種を、種がないから借りる、金を借りる」そんで期限が来て返さんことには、貸したもんも飯が、生活が成り立たんし、ほら。そんなことが何回かあって、いうたら、歴史の、なんか、変わり目っていうのは随分なことが、あり得んことがどこにでも起きてくるき、ほら。
明神：片岡さん、ねえ、21 年に通化に居ってよねえ。その次はどこ行ったわけ。通化から？
片岡：通化から輯安、
明神：輯安行って、輯安から、うん。
片岡：輯安から満浦鎮、満浦鎮から元山へ抜けてねえ。
明神：元山へ抜けて。
片岡：ほんで、今度ら図們。
明神：図們。
片岡：図們からねえ、10 里くらい奥へ入った所に日本製紙の。
明神：うん。
片岡：工場があってねえ。
明神：うん、そこで働いた？
片岡：そこに施設があるから。軍工場はそこを間借りしてね。はい。
明神：うん、そこで仕事をしよったわけ。
片岡：はい。
明神：うん、中国人と一緒に。
片岡：そう。
明神：うーん、そこから 8 年経ちゆうわけよね、いうたら 6 年か。その間はずっとあちこち転々した？
片岡：それから 4 年。
明神：4 年、ずっとそこに居った 4 年間。

片岡：4 年でねえ、1949 年の 10 月 1 日建国記念日。
明神：うん。
明神：49 年。
片岡：うん、それがね、もう半年前から手榴弾いらんなってな。満洲の戦争終わったから。
明神：手榴弾ギッチリ作りよったわ最初はね。そこの何とか言うとこで。
片岡：その時はね。
明神：それから、49 年 5 月から。
片岡：迫撃砲。
明神：迫撃砲になったわけ。中共軍の、あの、兵器を作りよったわけね。
渡部：迫撃砲。
片岡：手榴弾が。
明神：それはどこで作りよったわけ。おんなじ所でやりよった？
片岡：それが日本製紙。
明神：日本製紙でやりよった。
片岡：うん、工場の一角でね。ほんで、手榴弾近くで作る必要無くなって。
明神：無くなって。
片岡：うん、迫撃砲弾ばっかり。
明神：うん、弾を作りよったわけ、迫撃の？
片岡：最初は関東軍のお古の半製品を造りよったけどね。そんなに早く品切れになって。ほんだら、中共軍のありあわせの砲弾いうたら、何かいうたらね。砲弾言うたら鋼で殺傷力が強いき、ほら、鋼が常識やのに鋳物で作るわね。
明神：鋳物で！
片岡：鋳物は溶鉱炉簡単にできる。簡単に溶ける。で、できるのは質の悪い製品鋼じゃないけどね。ほんで、日本人は笑いゆう、中共軍の砲弾は鋳物かい。へへ。笑いよるけんど、そんなこと言うちゃおられへんわ。ほら。
明神：手榴弾を鋳物で作りよって、それから迫撃砲弾を鋳物で作りよったわけ。
片岡：そうそう。
渡部：うーん。
明神：それから 1949 年の 5 月にどっかへ移ったわけ？
片岡：それでねえ、どっかへ移る途中が 49 年の 10 月。
明神：10 月の。
片岡：1 日の建国記念日がね、
明神：建国記念日、うん。
片岡：吉林の駅の中。
明神：吉林の駅の中で、うん、そこでまた仕事しよったわけ？
片岡：いや、通過すると。
明神：うん。
片岡：本渓湖へね、抜ける途中、道中の、
明神：本渓湖へ行ったわけか、結局。
片岡：49 年の、
明神：本渓湖で何を作りよったぜよ。
片岡：本渓湖はねえ、機関車の修理工場。
渡部：へへへ、機関車の修理□?
片岡：だから本渓湖の日本人言うたら、病院関係と、それから特殊工、それと運輸関係、病院。一番多いのはやっぱり病院の看護婦さんが一番多かったなあ。
渡部：じゃ、その、本渓湖には、もう大体ずっとその後、居るんですか？

明神：引き揚げまで本溪湖?
片岡：はい。
渡部：ああー。
明神：引き揚げは天津からやったね、確か。
片岡：天津。
渡部：天津から。そうかあ。
明神：本溪湖言うたらどこら辺なんだろうなあー。
﨑山：奉天と安東の間。
明神：ああ。
﨑山：真ん中の奉天に近い所。
渡部：ああ、ありました。
明神：錦州近く。
﨑山：アンポウテン（満浦鎮？）の、ちょっと奉天に近い所です。本溪って書いてある。
明神：ああ、間島の。
片岡：鴨緑江の。
渡部：：炭田か何かが。鉄鋼か炭田か何かがあるんですね？
﨑山：あります、あります。
渡部：それが天津から引き揚げるわけですか？
片岡：そうです。
明神：中共軍は大体天津からよね。ふつうは。
﨑山：そうですねえ。
片岡：満洲帰りはだいたいが葫蘆島（コロトウ）が多いと思う。
﨑山：一般の人は葫蘆島だけど、あの、28 年、昭和 28 年に行ったら天津からが多いですねえ。
渡部：じゃ、その、中共軍と一緒に、こう、動いて行ったり、本溪に行った時には、あれですか、食料はそう困らんかったですか？食べ物は？
片岡：えーとねえ、中共に入ってからひもじい思いというのはないですねえ。
渡部：ないですか。
片岡：ほんで、週に一回高粱飯じゃなしに米飯に豚肉が出るわねえ。ほいたら朝昼は控えよって晩食おう、御馳走食おうぜ言うて。ほんで、段取り狂わせよった。やっぱり米の飯がね、のどの通りがいいわけ。へへ。
明神：へへへ。
渡部：日本人はだいぶん居るんですかね？人数としては？
片岡： 28 年の引き揚げが 3 万人言うてましたね。
渡部：あ、そう。
明神：一緒に行動したのは何人ぐらいで行動しよったわけ？あの、言うたら、製糸工場から本溪湖へ行くのは？
片岡：本溪湖の日本人って大体。
明神：製紙工場、あんたらと一緒に同行しよった人。一緒に吉林を通ってよね。それは一緒に仲間がおるわけやろ？
片岡：とにかく本溪湖の日本人ってのはだいたい 250 人ぐらい。
明神：250 人ぐらいが一緒に行動しよったわけ。吉林経由で？
片岡：。そういうことやねえ。だけど一緒ではない。看護婦さんが全然違う方向から来てる。
明神：うん、本溪湖ではいっぱいおったわけよねえ、いろんな人が。けんど、あんたが行った製紙工場で、ほら鋳物のなに、玉を作りよったそこからずっと移動したのは何人ぐらいで。吉林を通って本溪湖へ行ったのは何百人か一緒にいたわけ。一人じゃないろ思うけど、よく

覚えてない？
片岡：あのな、ここでこんな話が出てくる、あんたは分かっとんやけ、分かっとるやけ。その概要を言うてくれたらな。
明神：いや、分かってないから聞きゆうがよ。はは。
片岡：本渓湖の日本人の写真、ほとんど全部、俺持っとんねん。今。
渡部：あ、そうなんですか！あ、そう、写真とかあるんですねえ。
﨑山：資料持って帰って来てます?
片岡：私は本類は全部持って帰ってます。
渡部：はあ、へええ、
片岡：ほんで、止められました。書いたもんと本持って帰ったらあかんいうねん。
﨑山：引き揚げる時？
片岡：はい。
﨑山：はー、はい。
片岡：帰る時にねえ、だけどその規則もねえ。
﨑山：うん。
片岡：それを調べるのは普通の兵隊やろ。字が読めたり読めんかったりする状態のな、ほんで私、布団の中へそれ全部入れとったから。
渡部：はい。
片岡：普通の人と違うてね。こちゃこちゃ持ってるき、ほら。その書類と私の顔を見比べてねえ。全部一冊も取られてない。
渡部：ええー、
片岡：だから規則はあってないようなもん。
﨑山：うん。
片岡：だから建前上はねえ、あかんぞ言われたらみなやめると思う。私は持て帰って人の迷惑になる思うたら、私は言われんでもやらない。だけど持て帰っても人の迷惑になったり、暮らしの邪魔になったりがね、不都合なことがあると思うたら、言われんでもやらんけんど。こんなもの誰の持ち物でも、俺の持ち物なのに。なんで取り上げる、取り上げんて、裁判所で裁判やるんやったら別やけど。
渡部：へへへ。へへ。
片岡：そんなん違うきな。そんな話は私聞かない。
渡部：天津から日本に引き上げてくる時は、あれですか？いつ頃日本に帰るとか言う、こう、情報とかが、毎年あるとか？
片岡：そんなんない。だから私づけづけ言う方でねえ、悪いこと悪いと思ったらしない、悪うない思ったら、じゃかすかやるロやで。ほんで、戦争が終わって昭和 24 年に終わってねえ。帰れる思ったら本渓湖行ってね。機関車の修理。日本へ帰ってねえ、赤旗の一部でも増やすのは俺の仕事や言うて。なんでこんな所で腐らすねん、なんで帰らんねん。理由は何や、言い返せるき大きい声で言うてた。うん、そのことでは監獄へ入れられた覚えはないけどね。
明神：サムライやね。はは、この人。
片岡：いや、一回だけ私、監獄へ入ってますねん。
明神：へへ。
片岡：これもあんまり、あの、言われんこと。いうたら格好のいいことじゃないけんどねえ。3 万人帰って来て臭い飯食ったの何人もおらんはずや。私は入った。理由はねえ、なんかねえ、喧嘩があって「誰やろが誰やろをどづいた」言うわね。あれは「日本人やが中国人を叩いた」思う。昔は日本人が叩くのは当たり前でねえ。向こうの人間が叩くいうことは絶対にない。そんなことしよったら殺される。ところが、終戦前が日本人がまだ叩くことは、それだけ人間関係がほら、あの、縮まってるって言うことの差別が、ほら。だから、いいことじ

ゃないけんど、それをねえ、「叩き返えせえ」て言うて。「どづかれたもんがどづいたもん叩けばええて」俺はやめとけ言うて。ああ、「叩いたもの叩き返す」言うたら、叩くっていうことは、昔の日本人だったら当たり前で不思議なことじゃない。だけど 理屈に合わんことはしたらあかんての。「道理」っていうことを中国人うんと言うから、ほら。「道理、道理」って言うて、ほんで、私は「叩き返すってのは道理に合わんからやめとけ」言うて。ほいたら、「大衆運動に水を差した」言うて。ほんで、２・３事件の暴動の時は、井上輝美君がひどい目に遭うて、私はなんにも遭うてない。あのー、家のカメラの部品ねえ、あのー、見に来たのんと後で、取りに、来たのと違ごうて。ほんで、取りに、持って行った所へ私案内した。ほなら、ちゃんと送り返してくれて、暴動 2・3 事件関係ない。なんでかいったら背が低かったから子供扱いやった。うん、だけど、叩いたやつ叩き返せ言うのは、こら大っぴらなところで、大っぴらな話やから俺はやめとけ言うた。ほいたら「大衆運動に水差した」言うて。ほんで、ぶち込まれたかて俺はひとつも悪いことしたとは思うてない。なんぼ支持したのが政治員やろうが偉い人やろうが、そんなことは関係あれへん。

渡部：その後、本渓とかでやっぱり政治教育は、やっぱり、あるのはあるんですか？

片岡：それですがねえ。ほんで、あのー、共産党の共産党自体がほら、一番密度が高いのが軍隊や言うわねえ。軍隊の一番密度が高いところが、共産党の割合がどうやいうたらね、三分の一や言う規則があるわね。三分の一越すっていうと先進性がないなるから言うんで。

渡部：ええ、

片岡：ほんでそれを平たく言うたらね。朝鮮戦争行って命の引き換えの、あのー、厳しいところでね。どうやって勝つか言ったらねえ。街でぶらぶらしよる若いしを連れて来て、軍服を着せて鉄砲を持たせた軍隊と、土地改革をやって俺たちの生活は今までと違うんやと。これからこれで頑張ったら生活も国もようなるってんで、やる気出してるグループとねえ。100 万の軍隊と 300 万の軍隊と、軍艦、飛行機、大砲、戦車、何でもありの 300 万が負けるって理由は、私はそこにあると思う。うん。数が問題じゃない。

ほんで面白い話がねえ。ベトナム戦争が始まって、ほら、ベトナム戦争が始まって、あのー、アメリカ軍がどんどん入って来て、口実は駆逐艦を砲撃した言うて。よその国に入って行って港があるからいうて、軍艦が入って行ったらあかんこっちゃ。ほら、それが入ってきて向こうから砲撃して来たって。盧溝橋と一緒やねん。日本軍が軍隊同士やから鉄砲持っとるわ、日本軍が向こうから撃ってきた言うて。戦争言うたらそういうことですわねえ。

渡部：ちょっと、引き上げの話に戻りますけど、天津からの船というのは 、ど、日本の船、中国の船で帰って来るんですか？

片岡：私の船の名前は「高砂丸」。

渡部：「高砂丸」はあ。

崎山：井上さんと一緒でした？

片岡：違う。

崎山：あ、別で？

片岡：あれは十五年、私は九年。

渡部：で、天津からどこに着くんですか？日本は？

片岡：舞鶴。

渡部：舞鶴ですか。そこにお父さんがお迎えに来とったわけですか。

片岡：そう。

渡部：へえー。で、舞鶴からそのまま大崎まで帰るわけですか？

片岡：はい。県庁からねえ。えーと、県のお役人さんが 4 人来とって、高知へ帰って来たのが 4 人おらなんだはずやねん。迎えに来てくれた方が多かった。ほんで 28 年の 10 月の 21 日のね、高知新聞、あのー、新聞社へ行ったらくれるはずやから、それをもろうて来て、その記事を見たろ思うんやけどついつい遠いからねえ。

渡部：はあ、28 年の 11 月、いや、10 月 28 日ですか？
片岡：10 月の 20 日、21 日、22 日の新聞記事を見たらねえ私どもの引き揚げてきたあのー、事情が載っとるわ。
渡部：で、大崎に戻ってからそれからどういうふうに？
片岡：それからねえ。あのー、学校の先生がねえ。
片岡：はい。
片岡：地域の顔役を集めてくれて、満洲から帰って来た話を聞こう言うことで、集まった所で話したことがある。それから 2 ヶ月田舎におって高知出て来て、教員組合関係の先生の集まりにね、呼ばれて。ほんで、先生連中が私らあもそれで行こかいうのが勤務評定。
渡部：はい。
片岡：勤務評定っていうのはね、教室の、教室に居るもんと外の生徒とはね、考え方が違うんやと言う話をしまして。ほんで、中国での勤務評定どうしたかいうたら、職場内でそれぞれの評定させるわけね、給料決める時に。ほいたらねえ、みんなで話合うたらねえ、いうたらみんなに嫌われる人がおるわけ、どこにでも。ほんで、みんなに受けのええのんがおるわけ。ほいたらね、極端に違ごうてくるわけ評価が。ほんで、事務所でやるとね、まるっきり逆が出てくるわけ。ほんで、それを最終的にどこが調整にするかいうたら、現場の資料と教室の資料とつかみ合わせて、「責任を持てって」言うこと。いうたら、人望のあるやつがね。それが査定したらどっちの方もへっこんでしまう、だから角が立たんわね。日本の勤務評定は文部省が校長決めるのに上が決めるから。ほんなら、文部省の言うとおりに教員組合は動かそうとするから、話が合わんわけやねえ。高知は勤務評定での結果は素晴らしいけんど。愛媛県が全然だめやねえ。
渡部：ははは、で、高知に出て来て高知で働くようになったんですか？
片岡：はあ、ミロク。
渡部：ああー。
片岡：ほんでね、29 年のあの、春にねえ。職安の出し取ったやつ、ミロクから募集が来て 7500 円やったら不景気やから仕事はなかなかないけど、職人で 7500 円の給料やったら大抵どこでも雇いよった。ほんで、ミロク入って、ほいたら、4 月の 1 日に久保山愛吉さんビキニで、“ビキニの水爆実験”で。
渡部：はい、ええ、被ばくを。
片岡：ほんで、署名簿を職場で持って回ったわけ。「反対署名してくれ」言うて、事務所へ入って専務からみんなもらおう思って、
渡部：あはは。
片岡：ほいたら、専務にみんなの前で何言われたか、いうたら「俺は共産党の手先にならん」言うて。
渡部：ははは、
片岡：共産党と水爆とどこが違うねえ。へへ。だけどね、結果は日本へ帰ってきて職場の実情、運用が全然素人やったいうことでねえ。だけど、中国の経験とそれからミロクの経験とはねえ。淀川製鋼言うて工事の会社がありますね。西淀川に 2300 人の会社、あそこで十分に発揮されたと思います。うん。
﨑山：ミロク定年退職まで？
片岡：本工にならへん。
﨑山：え！
片岡：：6 か月で本工になる時にクビになって。
﨑山：ありゃ！
片岡：当たり前やん。へへへ。
渡部：へへへ。

﨑山：そう。
片岡：ミロクはねえ、宇田耕一さん。
﨑山：うん。
片岡：社長さんで、あれ、改進党の関係でしょうー。あれ、いうたら“リベラル”。ところが、あれ、次の宇田さん亡くなって。あれ、二代目誰言いよったなあ、やっぱり年寄りやなあ、大抵のことを覚えてるのにな。ミロクの社長よう覚えんで忘れてしもうて。それは宇田耕一さんの書生でねえ。で、大学宇田さんに行かせてもろうて、労働組合敵やで。まあ、宇田さんの時代も違ごうたけんど。ほら、宇田さんが朝鮮戦争で上手く立ち回って儲かったらしい。だから、淀鋼の共産党は宇田さんが作ったんや言うて。ほんで 60 名のレッドパージ言うたら大阪でもおおようだったらしい。ほいたら、私が入った当時の組合長ってのは、ここも人格もね、なかなかの人物やって。ほんで、笑うて「60 人首にしすぎてなあ、代わりに俺が入ったんや」言うて。
渡部：で、それから、結局、大阪に行くわけですか？
片岡：えーと、高知に 2 年居ってねえ。
渡部：ええ。
片岡：ほんで、ミロクで馘になって。「マス製作所」言って。あれは、筆山の西の町の真ん中にある町工場。ソフトクリーム作る機械造ってねえ。あちこち売りさばいていて。それも私が高知に帰るたんびに、みな来てくれてねえ。会いよったんやけんど、「うちも労働組合作ってストライキやったぞ」言われて。ははは。
渡部：ははは、へへ。
片岡：話をしてくれて、ほんで、ミロク、その話ができる前に、ほら。ミロク馘になったから。メーデーに行った時に欠勤したから、「あの男メーデー行ってるぞ」言う噂が職場の話でねえ。会社のメーデーに行ってくるっていう訳ないから。それ知っとって「うちも組合作ってなあ」話してくれました。ほんで、今度、高知帰って来てちょうど 20 年やけど、どないになっておるか気になるけんど、歳とりすぎて 20 年前の友達がもうおらんと思う。ほんで、これも文書にはできない話やけどねえ。日本の国の労働組合運動で、第 2 組合の会社やね。ほら、第 1 組合が冷や飯食いの組合で。ほんで、会社は会社の組織が労働組合、金と人使うてやるんやから、第 1 組合が大体がつぶれてねえ。一つになるいうたら第 2 組合やけど、淀鋼の場合は違う。第 1 組合が第 2 組合ってなんでか言うたら、入ってくる若い連中、高知の会社から高知工業と須崎工業が入って来るわね。県人会やってうちに当って来るわね。
渡部：これ、第 1 組合、ははは。
片岡：はは。若い連中みんな第 1 組合やから。会社が古い第 2 組合しっぽ振る連中。現場でも発言力がなくなるし、ほら。会社がしっぽ巻いてもうた。ほんで、私の家内がねえ、美容師やって。ほんで、会社がなんぼ差別して賞給どん底にどんじりにしても、退職金の計数が給料と関係があるわ、ほら。どんな冷飯食わされても、「私が食わしてやるわ」言うのがおったら。
渡部：たたれますか。ははは。
片岡：へへへ。怖いもんおらへん。ほんで、馬喰町の、御堂筋の馬喰町の本社の会社の労務部長かて元共産党で。だから、私、団体交渉で行ってもの言うたかて、元の先輩言うても辞めて行ったのは、あんまりええカッコ言われへんしねえ。ほんで、私の泉大津と西淀川と呉に 3 つあって 2300 人の会社で、本社が西淀川で 1050 人おって、工場長がねえ、淀綱の会社に吠えつくやつがみなレッドパージで 60 人飛ばされて、尻尾を振るのが残って。ほら、それが労務関係みんなやってるわね。ほんで、工場長ってのは、京都大学出て元の共産党。ほんで、団体交渉で遠慮せんともの言いよったら、「ゆっくり話したいのう」て言いよったけんど。話、辞めたもんに話しても何が出てくるかい。ははは。ほんで、組合の、あのー、職

場の役員と、全体の執行部と違いますけどねえ。会社に吠えてくるやつなんとか馘にしたろ思っていろんな手使こうてたけんど、滑ったことない。ははは。
渡部：あれですか、引き揚げてその後、満洲に行かれたことってあります？
片岡：うーと、友達はねえ。
渡部：はい。
片岡：いろんなグループで 里帰りするけんどねえ。私も行きたいな思ても行けてないんや。
渡部：向こうの、例えば、ずーと本渓とか行った所で、知り合った中国人との交流とか、まだ、あるんですか？
片岡：それはもう年代が違うてくるき、ほら。もう、30 年の 90 年の 60 年いったら、ほとんどが土の中へ潜っているのが。
渡部：ああねー。
片岡：多いと違うやろうか。私「88」言うたら、人が私の顔見て顔の艶が年寄りじゃないわ。ははは。
渡部：ははは。
﨑山：ありがとうございました。どうぞ。
吉尾：共産党軍にですねえ、入る時にですねえ。入ってから、そこで昭和の 28 年に帰国された、引き揚げて来られたんですけど、中にはそのまま中国に留まった方はいらっしゃったんでしょうか？
片岡：私どものグループでねえ、中国人の奥さんもらって子どもができた人がねえ。
吉尾：ええ。
片岡：一人だけ帰って来てます。
吉尾：ああ。
片岡：本渓湖の、あのー、指導的な人やけどねえ。ほんで、大阪の、大阪に領事館があるから、あのー、30 年間本渓湖から帰ってきた連中が、毎年一回集まってまして。日本全国
吉尾：あああ。
片岡：点々としてね。
吉尾：ええ。
片岡：ほんで、大阪に集会があったときに、領事館一回話に行ってみようかと言うたら友達がやめとけやめとけ。
﨑山：その人はあの、奥さんもらったから、遅れて帰って来たんです？
片岡：あらー、どういうことかなあ。まあ、面白い特例いくつか言うたらねえ。ヒサナガシロウ言って終戦時から私より２期先輩でねえ。「人格者やねん」「お人柄やねん」ほいたら、その井上くんのグループで牡丹江行ったんやけんど、「選挙で工場長つうになった」いうて。日本人だけで評判が良かったんと違う。中国人にも面白い話やなあ。
吉尾：それから、当時、その共産党軍ですね、中共の共産党軍でお仕事をされたときに、その時の中国共産党の人達ていうのは、いわゆる何か大学を出たとか、出て、こう、なんとかいうかな、党の仕事をしているような方が多かったのか。普通のなんというんですかね、かつて農民であったり、なんかそういう普通の人が周りには多かったのか、どっちだったですか？
片岡：えーとねえ、私の知っている範囲内でね、あそこの工場長、こっちの工場長言うのは、日本の大学出た人が多かったねえ。
吉尾：はあ。
片岡：それから周恩来は京都大学出て。
吉尾：えええ。
片岡：フランスの。
吉尾：ええ。

片岡：学校出てるわ、ほら。鄧小平やとかなんかね。
吉尾：ええ、そうですね。
片岡：うん、上の方は地主の出身で、外国の大学出たっていうのが珍しゅうないねえ。
吉尾：その、本渓の工場長とかは、やっぱり大学くらい出ておった？
片岡：工場長クラス言うたら、大学に出ていないのはおらん。
吉尾：それから、日本人の人達は、まあ、そうやって残ったんですけど、例えば、アメリカ人だとか、それから、あヨーロッパのそういう人達はいなかったですか？
片岡：“アグネス・スメットレイ”じゃないけど、
吉尾：ええ、ええ。
片岡：そんな連中は見ないねえ。
吉尾：あーあ。
片岡：ほんで、外国人の話をすればねえ。日本に韓国人が 60 万おる言うわ、ほら。延吉の方を延辺(えんぺん)言いますねんな。満洲の東の方あっちは韓国人が多い 80 万人おる言う。だから、こら、アメリカの新聞でも、中国下手につついて朝鮮人を怒らせたら、満洲の問題でもほら、東の方に多いき、ほら。ほんで、昭和 25 年の朝鮮戦争まで南北の朝鮮関係で北へ逃げて行くいったら、南へ逃げていく朝鮮人というのはあまり聞かんね。北へ逃げていく生活のためにね。北へ行くというのは多かったやん。ほんで、逆にドイツは西へ行く言うのが多くて、東へ行くのはなんか言うて、ほら。向こうはまるで地獄みたいなことを言いよったけんどね。庶民が暮らす本当に暮らしやすいいうのは、北朝鮮。差別がない平等やき、ほら。平等やったら、何でもおんなじような平均や言うわ、ほら、「平等言うんと平均」と、違う点では、いろんな話題がありましたねえ。
吉尾：なるほど。
片岡：うん。ほんで、私はえーとねえ、思ってたって、普通に日本人は中国の共産党には入られへんと。ほんで、中国人は日本の共産党には入られへんと決まりがあるらしい。
吉尾：ええ。
片岡：例外もなんか、なんかあるらしいけんど、平たく言うたら我々の頭で中国共産党入ったろう思っても入られへんて。その話を聞いてるからはじめからそんな気いないし、やる気があるか言うたら、やる気はあるけんど。だけど、朝鮮戦争はおっきな戦争がある前には、本渓湖取られて、鉄道が通っとる所やで。一週間前から前、後、機関車付けてね、もう海兵隊がどっさり行きゆう。ほんで、自問自答をするわけ。「お前行けれるか」言うて。「俺は行かない。日本人と、日本で死んでもかまんけんど、朝鮮で命を落とすことは俺は止めや」へ、こっそり。へ。言うたら考え方一緒ですわ。言いますし、俺はそう思った。
﨑山：ああ、そうだ。朝鮮戦争の頃、本渓湖にいらしたんですねえ？
片岡：おった。
﨑山：ねえ。
吉尾：そうですよね。ええ、ええ。
﨑山：そうか、そうか。
片岡：だから、鴨緑江は冬になったら 1 メーター氷が張るから。ほら、
﨑山：そうそう。
片岡：トラックから戦車から。
﨑山：行けるんでね。朝鮮戦争で、あのー、鴨緑江の橋は、あの、壊されたのね。半分だけね残ってるけど。
片岡： B29 がやった。
﨑山：そうそう。
吉尾：本渓湖で、朝鮮戦争の時に何か、身の危険ての感じたことはあったですか?
片岡：ない。

吉尾：ない。
片岡：ほんでねえ、私が 49 年の建国記念日 10 月 1 日に吉林に寄ったいうことは、その次の日に本渓湖に行とるはずやねん。ほんで、本渓湖の丘と山の上、塹壕がどっさりある、1 年前まで国民党がおったんよ。1 年前はそこでドンパチやってた所やき、ほら。ほんで、長いこと一緒に付きおうてる日本人ばっかりが居る所やから、いろんな面白い話があったら話題になりますわなあ。ほんで、日本人の社宅へねえ、朝鮮へ行く兵隊が泊まったんよ。日本人が居ると言うて。行ったら居る。ほんで、「国境がない」「民族平等や差別がない」「暮らしやすい」「付き合いやすい」って言ったかてねえ。こと、殺し合いになって国際問題、ちょっとこれ具合が悪いなあて。だから、あれ、大勢で、ややこしいから、ほら。あれ、選り分けるの間違ごうて入ってるんやろうなあーて。笑うてたけどねえ。ほんで、なんか、後の方になって日本人の捕虜がお互いにあるわ。ほら。
吉尾：はい。
片岡：ほんで、日本人が居ったっていう記事が何か出とった言うけど、私ども見てる。実際行ったのは戦争が始まったら足が悪うて怪我して。日本軍は捕虜がおらんって言うのは、3 日行方不明になって帰って来たら殺されるき、ほら。日本の陸軍は。だから捕虜がおらん。ほんで、中共軍の場合はそんな規則なんかあらへんわねえ。向こうから、奉天が占領された時、北京に 24 万か、奉天に 30 万の国民党そっくり中共軍が 服の印だけ変えて。へへ。おんなじ鉄砲で、あの、中身をほら、「教育したら絶対中共軍入らん」ちゅうのんと、「喜んで入って来る」のとおるき、ほら。だから服だけ着替えて、なに、どっさり使い物になったいう。
吉尾：国民党軍と言うのは、結構、あの、規律は正しい、なんか、きちんとしてたんですか？国民党軍もそうでもないですか?
片岡：国民党軍?
吉尾：ええ、ええ。中共は非常に規律があって。
片岡：厳しい。
吉尾：ええ、国民党軍はどうですか? なにか。
片岡：おんなじ軍隊たったら、会社の組織でも土方の組織でも何でも規則はある。
吉尾：でも、なんか悪さをするということはあんまりない？
片岡：なに?
吉尾：例えばあのー、住民に対して国民党軍というのは何か特別に、こう、悪いことをするとか?
片岡：あるよ！
吉尾：ああ。
片岡：それがなかったらねえ。中国の、昭和 20 年から 2 年間の満洲の動き言うたらものすごいやろう。
吉尾：うん。
片岡：ほんで、中国語でこんな話がある。“マーパーロ”“ダーパーロ”“パーロドーラ““シャンパーロ”言うてね。中共軍が入ってきたら悪口言って、隙間があったら攻撃したって言うのは中国人の普通の話。日本人だけが共産党嫌いと違うんよ。向こうの人間もだいたいそんなのが多い。ところが中共軍が押されて北へ逃げて行ってねえ。国民党が入って来て。ほんで、“パーロドーラ”言うことは八路軍が行って、国民党が入って来たらやっぱりよかったなあと、シャンパーロ言う。面白い言葉や思う。“マーパーロ”“ダーパーロ”“パーロドーラ““シャンパーロ”言う。中国語分かるんでしょう？
吉尾：いえいえ。
﨑山：先生も全部ご存知でしょう?
吉尾：いえいえ。今の言葉私は分かんなかったです。ああ、そうですか。あとですね、すみ

ません、引き揚げた時に天津から舞鶴に降りる時に、特に例えば、引き揚げの手引書みたいなんかもらいました？例えば引き揚げの際にこうこうするとか、どういう手続きをやると言うような、引き揚げの手引書なんかはお持ちではなかったですか? 配給、給付されました？
片岡：引き揚げ証明書をねえ、もらっただけで、そんなものはない。ほんであるのはねえ、あれ、なにいうたろう、農協で本を売ってる。あれ、宗教団体らあの本がおますわねえ、ちょっとまとまった組織の。
渡部：成長の家とか。
片岡：ああ、そうそう、成長の家。ど忘れして出てこん。あれ配ってねえ、中身見たらな、あんなん読めるか。
吉尾：それはどこで。あの、 引き揚げた時に、舞鶴に着いた時に?
片岡：はいはい。
吉尾：ああ、そうですか。それからその天津から舞鶴に着いた時の格好は、どんな格好をして引き揚げられて来られました?
片岡：普通ですね。ええ。
吉尾：普通と言うと、例えば、ええ、どんな服を着ておられました?
片岡：それも、まとめて後で、こっちへ。ここへ渡しとったらここへ行きますわね。
吉尾：：ええ、あ、写真だとか。ああ。
﨑山：一度、片岡さんが持って帰って来たというもの、お家に置いてますか?
片岡：それがねえ。今日あそこへ行って、本 5、6 冊。
明神：祭りでね。古本をあさりゆうわけ、へへ。古本を 1 冊 50 円のやつをね。
﨑山：あああ。
明神：他の店へ寄らんがぜよ。彼はね、古本屋平凡なんだろ。古本を陳列してあったらそれを。ここに 8 冊くらいあります。ははは。
﨑山：片岡さんが、天津からね、帰って来る時に持って来た資料、なんか、いろんなものを持って帰って来たという、それを今も持ってますか?
片岡：えーとねえ、仕事関係の本一番先取られるかなあと思ったけんど。全部持ってきたけどねえ。
﨑山：うん、
片岡：私んところの本、本棚にどっさりあるけどね、ない。
﨑山：本じゃなくっても何でも、証明書とか。
明神：写真とか？
﨑山：写真とか？
片岡：あんたとこが集めよう話と。
﨑山：はい。
片岡：新聞へどっかの大学へ寄付してるわ。ほら、
﨑山：はい。
片岡：あの手続きあるから。私ももう、10 年も生きとらへんせきに、ほら。なんぼ、私の兄弟がみんな長生き言うても。
﨑山：私もそうやけど。はは。
片岡：へへへ、おんなじやん。
明神：全部まとめてここにやるかよ。へへ。
﨑山：まとめてくださいますか?
片岡：ほんま言うたらねえ。俺死んだら、あれ、整理する人が迷惑すると思う。だからなんとかせないかん思う。
﨑山：なんとかしてください。ははは。

片岡：うん、ほんで、あんな紙幣なんかねえ。
﨑山：うん。
片岡：用事のないもん。
﨑山：うん。
片岡：あれはねえ、開拓、開拓団でおじさんが行ったやつがねえ、何でか知らん、私の所へそっくり来ちょるのねえ。家、家が何軒も建ちそうや。はは。
﨑山：また、明神さんを経由で。それこそ戦争資料保存ネットワークでもデータベース入れたりしてますからね。そう言う所にも役に立つから、まあ、そのうち。
明神：いやー、ものすごい。あの、須崎の明神嘉照さん所。あれ、ものすごいありますよ。おおかた﨑山さんの高知大学のみたいに。あれぐらいありますよ。
吉尾：へえー。
明神：あれ、全部。
﨑山：もらってもらおうか？
明神：話してねえ、どうしようもないがよ、たぶん、近頃会わないけど、元気だし、元気だと思います。
﨑山：（高知資料ネットの）楠瀬さんと一緒に、もらっても来ようか？けど、お元気ですか?
明神：元気やろうと思うんだけどねえ、あの人、わりに丈夫いきねえ。
﨑山：耳がねえ、
明神：耳がちょっと遠いけねえ。須崎に明神嘉照言う人が居るわけよ。あんたと同じ年や、多分。うん、その人は満鉄の義勇軍に入っちゅうが。うん、それがねえ、「本屋約束してねえ、本屋と契約してねえ、満洲関係の本を全部俺んくへ持って来い」と言うてね。そんなにしちゅうのがいっぱいあるがやき。﨑山さんの持っちゅうのとだぶついちゅうのがあるかもしれませんけどねえ。特に満鉄関係のやつを持ってます。彼は。
渡部：今日はお話をお聞きしましたけど、そのお家にある本だとか写真とかが、また、いずれまた、ちょっと連絡を取って見せてもらえるんだったら、見せてもらいたいと思います。
片岡：私がお陀仏なってね、灰になってしもうたって。灰にならんようなこと考えないといかんなあと思う。ほんで、こんな仕事をしようとったら、なおさらいらんやつやかて、そんな臭いのするやつは全部集めたいんよ。
渡部：ふふ、ははは。
明神：彼はねえ。ほんとに侍でねえ。戦後引き上げてからの話がまた面白いんけんどねえ。
渡部：先程、お聞きました。なかなか、はは。
明神：そうですか。ははは。今はねえ、碁の友達です。日曜日たんびに会いよります。
渡部：ああ、そうなんですか。
﨑山：そんな時にその資料を持って来てもらって。
明神：そうよねえ。
﨑山：また見せてください。あのね、月に 1 回、12 月は、第 2 火曜日にねえ、
明神：また相談してねえ、彼と。
﨑山：集まりますのでね。
明神：あのう、極力、資料ねえ。
﨑山：明神さん、一度、戦争資料ネットワークの、あれ、いらしてくださったことあります?
明神：ええ、いっぺん行ったわね。
﨑山：ねえ、あそこでいつもやってるんだから。お持ちいただいたら、みんな喜びます。
明神：ええばあ話したかよ。
片岡：この本、去年 10 月に出しよってな。
渡部：去年の 10 月？そうですか。
明神：一昨年やろ！

片岡：一昨年かえ。
渡部：あ、一昨年ですねえ。
片岡：やっぱりボケとるな。はは。
明神：ははは。
﨑山：これ、明神さんが私にくださったのよね。
明神：そうやったかねえ。
片岡：私が貸したんよ。
明神：へへへ。
﨑山：貸した！
明神：ぼくが 2 冊だぶっちょってねえ。
片岡：返してくれ言うたら、
﨑山：私もろうた。ははは。
片岡：あっちに回った言うて。けしからん男や。
明神：これは贈呈で井上さんから直接送ってきた。へへ。
﨑山：多分、あの、大学に入ってると思います。まあ、家もう一度見てみますけどね。最後。
明神：井上さんていうのは、共産党の本部でね、ずっと仕事しよりました。中国語が堪能なからねえ。
渡部：はあーん。
明神：本部で、国際部で仕事しよった人です。この人は。
渡部：そうなんですか。
明神：それから帰って来てねえ。吾川村、まだ合併する前の旧吾川村の村会議員を 2 期やったかねえ、井上さん。1 期だったかねえ。2 期やったよねえ。確か。
渡部：はーん、
明神：定年後ね。うん。
﨑山：今はどこにお住まいですか？
明神：今はやっぱりこの人とほとんど同じ所、大崎のね。仁淀川町大崎におります。うん。
﨑山：今日は、奥さんがお悪いから出て来れなかったんですか？
明神：そうなんですよ。うん。
﨑山：残念ですね。
明神：本当にちゅうちょうな調査をしてねえ。
片岡：いやー、あの嫁さんはねえ。満洲から間島まで行ってるき。ほら、ずいぶん南まで歩いて。
﨑山：えー。
片岡：汽車なんかあれへんから。ほら。
明神：歩いて行た。へえ。
片岡：歩いて行ったんよ。
﨑山：その本をねえ、井上さんが書くについて、井上さんも資料をずいぶん集めてるでしょ。
明神：そうなんですよ。
﨑山：その資料もあるわけよねえ。
明神：それはないと思います。
片岡：いや。
明神：おそらく本部で。家にもあるろう、かなり。
片岡：参考文献の本のケツへねえ、ダーッと出てる。
﨑山：ああ。
片岡：だから。
明神：それ、持っちゅうわけじゃあない。持っちゅうかえ。

片岡：この間処分した。
﨑山：ええ！
渡部：あらあら！
片岡：この間処分したけどな。全部処分はしてない。
﨑山：それ、処分しないでくださいって言っといてください。
片岡：それも言づけ。
渡部：ええ、ええ、ぜひぜひ。
片岡：どこへ? どこへ、何冊くらい持って行ったらいい?
明神：うーんと、近所に居るわけ。
﨑山：ほんなら、明神さん。
明神：うん。
﨑山：明神さん嘉照さんと片岡さんと井上さんの資料をどうぞよろしく。
明神：ええ、あの、頭に入れておきます。
片岡：ほんでね、俺もカルチャーとか何冊もあるんよ。ほんで、そのうちの何冊か返ってないよ。だから、私、評判が悪いわけ。だからな、「これほかすんやけど、お前いらんか」言いにこんわね。
渡部：どうもありがとうございました。わざわざ、遠方のところ。じゃあまた、資料よろしくお願いします。
渡部：どうもありがとうございました。
﨑山：ありがとうございました。

記録集の全文 PDF は、満洲の歴史を語り継ぐ高知の会のホームページでも無料公開しています。なお、本記録集は財団法人大竹財団の 2023 年度助成金（事業名：「第５回満州の歴史を語り継ぐ集い」と記録集の発行）を活用して発行しました。『地域資料叢書』は九州大学比較社会文化学府地域資料情報講座（現在は改組）が、1997 年から学会誌等では公開しきれない地域のフィールド調査の成果を公表するために刊行してきた学術書のシリーズです。現在は講座の卒業生や高知県の市民団体が引き継いで刊行を続けています。

＝＝＝

『子・孫世代が語り継ぐ移民・引き揚げ・戦後－第５回満洲の歴史を語り継ぐ集い記録集－』

（地域資料叢書 28）

編集　　　満洲の歴史を語り継ぐ高知の会
（編集責任者：大野正夫（会長)、編集担当：楠瀬慶太（事務局長)）

発行者　　満洲の歴史を語り継ぐ高知の会（高知県土佐市宇佐町井尻２６２－１）
e-mail: kusukei31@yahoo.co.jp

ホームページ　https://mansyu-kochi.yuhocreate.com/

発行日　　２０２４年３月２０日

印刷　　　西岡総合印刷株式会社
〒640-8324 和歌山市吹屋町５ 丁目 54

＝＝＝